# 記の

915.6-Y86-3ウ
1200500758659

吉田絃二郎著

始

915.6
Y86
3

# わが旅の記

吉田絃二郎著

東京
齋藤書店

992
[294]

# 自序

人は時として曠野の草のごとく生きなければならぬ
人は時として秋風のごとく生きなければならぬ
人は時として渡鳥のごとく生きなければならぬ
行雲流水のこゝろは旅人のみこれを知る

かつて青春の日紀伊見峠に一輪の河原撫子を見し
かつて若かりし日球磨の磧に一羽の川鳥を見し
かつて高野の清淨心院の閼伽棚に一輪の黄菊を見し
かつて槍ヶ嶽に雪降りて雷鳥の鳴くを聽きし
かつて伊賀上野の旅にトルストイに似たる男の俥を曳くを見し
われ老いぬれど若き日を忘れず
旅人のこゝろにきざまれたる姿は死よりも強し

かつて若かりし日六里ヶ原に見し雲の美しさを忘れず
かつて嵯峨に聽きし水鶏の聲を忘れず
かつて木曾川の流れを下りて掬みし水の清冽さを忘れず
かつて大村灣の月夜に聽きし笛の音を忘れず
かつて月寒の牧場に見し羊追ふ少年のミレエの繪を聯想させし、可憐なる姿を忘れず
かつて鼠ヶ關の時雨の夜に見し孤燈を忘れず
老いぬれど若き日の旅を思ふ時、人は永遠に若し

昭和二十一年初秋

著者



# 目次

富士山記……九
出羽三山行の記……二三
陸中平泉行……三八
北陸の旅……四九
高野山遍路……六五
男體山……八六
七月の旅……八七
南の旅……九四
時雨……一〇四

十日の旅……一〇六
高千穂に登るの記……一一五
天城を越ゆ……一二八
櫻島……一三三
雪の箱根を越えて……一三四
湖來紀行……一三九
小夜の中山……一四五
旅……一五〇
流れを慕ひて……一六四
南朝の蹟……一七四
山の旅……一八一
仙石原……一九〇
草の花あり……一九二
南國の町と島……二一一
初夏の旅……二一九
山……二二六
旅を思ふ……二四〇
涼夏靜秋……二四八
秋山に對して……二五七
旅人寂光……二六七
芭蕉の墓に詣づる記……二七八

# わが旅の記

著者自裝

# 富士山記

東海道吉田の町は日が暮れかかるころから軒並に門火を焚いてゐた。子供たちは火を焚いては手に手に小笹を持つて何かうたつてゐた。盂蘭盆の月いつぱい毎夜家毎に門火を焚くといふことである。

東海道の松並木に沿うた家々、行けども行けども薄暗の底に門火を見るのは何となく旅の心をわかさせるものである。

宿も昔のままかと思はせる旅籠屋である。本陣の趾とでもいひさうな家構へである。閾をまたげば薄暗い廣い土間であり、上り框にちかく帳場がある。土間を奥へ通り抜くれば長い甃である。柘榴の下に湯を沸かしてゐた男はちよつと頭を下げた。狹い流れが庭の中程を横に貫いてゐる。橋を渡つてさらに奥の方へ三棟ばかりの離房がある。その一棟々々が園風な構へになつてゐる。

恐らく參覲交替の武家たちは、その一棟毎に閉ぢこもつて、旅の無聊に苦しんだことでもあらう。槍を立てかけ、馬を繋いだでもあらう軒先の木の古りて、苔ふかく碎屑の氣を漂はしてゐる。

窓の下にはすでに桔梗が咲いてゐる。秋らしい感じだ。

宿の婢が湯の案内に來た。雨が降つて來たので傘をさしかけてゐる。導かるるままに長い甃を表の方へ歩いて行く。甃の雨に濡れてゐるのも旅らしい落ち着きを見出させる。

さつき稲穂の下に火を焚いてゐた男は、なほ庇の下にしやがんで、半身を雨に濡らしながら風呂の下を焚いてゐた。暗の中にうづくまつて、いつまでもじつと火を見守つてゐる男の愚直さうな姿までが、時代に取り殘された古驛の感じである。

ふたたび雨に濡れた甃をつたうて部屋にかへつて寢ころんでゐると、さつきの婢が來た。話を聽くと、元々東京に生まれたのだが震災から東京を出て旅に來てゐるのだといふことであつた。わたくしは數年前信州の大町の宿屋でも同じやうな境遇の婢に逢つたことを思ひ出した。神田に住むでゐたのだが震災に夫は生死不明となり、自分ひとりで雪の深い奥信濃に宿屋奉公をしてゐるとのことであつた。その翌年ふたたび大町をたづねた折はその婢はそこにもゐなかつた。さういふ境遇の女のせゐか二人とも寂しい影につつまれてゐた。

婢が雨の中を甃づたひにかへつて行く跫音もやがて、募り來る雨垂れの音に消されてしまつた。

「明日の富士登山を斷念しなければならぬか知ら？」そんなことを考へながら、わたくしは寢



ころんで、机の上に置いてあつた『大井川蓮臺越』といふ本を披いて見た。中に大井川の川越人足半次郎といふ男の物語が書いてある。

「半次郎は明和の頃の川越であつた。或る年遠州掛川の商人某が府中からの歸りを大井川にかかつたが、時に風雨激しく河水が增し今にも往來が絶えやうとしてゐた。某は急用のため如何にしても渡川したく豫ねての知合である半次郎に頼んだ。丁度半次郎は風邪のために自分で渡してやることが出來なかつたので隣人に頼んで商人を送らせたが、風いよいよ強く水量增して中流で進退を失ひ、隣人一人辛うじて泳ぎ歸ると岸に救を呼んでそのまま姿を沒してしまつた。半次郎は驚いて筏を作り乘り出したが時遲く、商人も隣人も溺死してしまつた。半次郎は之は全く自分の罪として翌朝自ら流に投じて死んだのである。」

山に登る人々はたとへば上高地の嘉門爺の物語に似たものを時折いろいろな由で聽かさるであらう。海に於いても恐らく。人間の眞といふもの、人間の至情といふものは宗教や、教育以上のものであり、小智の觸手の達し得ないところに生きてゐるものであることをしみじみと感じさせられる。

雨はますますはげしく降つて來た。母屋とここの離房の間の流れの水も氾濫しさうになつて來たといつて、さつき風呂の下を焚いてゐた男が橋の上に立つて、流れて來る木屑などを傍に掻き集めては揚げてゐた。

島田の町の八木君が奥さんと二人で雨にびしよ濡れになつて訪ねて來た。

「何うでも明日は富士にお登りですか？」と奥さんは心配さうな顔をする。「あなたお一人でお登りになるのは危險ではないでせうか。」

「大丈夫ですよ。何うせ大宮へ行けば强力がゐませうから、案内を頼みますよ。」

「だつてお富士さんには一人で登るもんぢやないつていひますよ。」奥さんは何處までも心配さうである。

「出登りにしろ、旅にしろ、一人が一番いいのです。」わたくしは笑ひながら奥さんの顔を見た。

八木君の奥さんがわたくしが一人で富士に登るのを案じてゐるのには、理由がある。

話は數年前にさかのぼる。八木君は島田の友人數名と富士に登つた。富士の山頂で石室の電話を借りて島田へ話をするつもりで電話室の前へ立つた。ところが生憎電話室は塞がつてゐたので、電話をかけることを斷念して山を下つた。ものの二三丁と下らぬところで恐ろしい雷鳴があり、石の路に突つ伏してしまつた。そしてふたたび須走を轉ろげるやうにして太郎坊の方へ降つて行つた。振りかへつて山巓を見ると山は雷雲につつまれてものすごい程の電光を浴びてゐた。

島田の八木君の留守宅には誰からか電話がかかつて來た。八木君が富士の石室で電話をかけてゐた際、雷に感電して卽死したといふ通知である。島田町の舊家である八木君の家には殆んど町中の重だつた人たちが集まつて來て、葬儀萬端の手筈から、富士山頂へ死骸を引き取りに行く役



割までも決めてゐた。玄關の前には受付の人たちが羽織袴で控へてゐ、家中の人は眼を泣き腫らしてゐるといふ有樣。そこに八木君が何も知らず呑氣さうな顔をして歸つて行つたので、八木君の家では悲劇は忽ちお祝ひになつたが、富士山頂の電話室で雷に撃たれて死んだ氣の毒な人といふのは同じ島田の人であつたことが後になつて分つた。それ以來八木君の奥さんは富士山に登ることを極度に恐れるやうになつた。

「今夜の雨が明日までも明後日までも續きますやうに。そしたら詮方がないから東京へおかへりなさるでせう。」奥さんは窓の外の雨の音に耳を傾けてゐる。

「しかし、さつき聽いたラジオの天氣豫報だと富士山頂は明日は晴れといふことになつてゐますよ。」

「さうでせうかねえ。」と奥さんはなほ八木君に不安さうな視線を投げる。

わたくしは一人になつて床に就いてからもなかなか眠れなかつた。いつもさうであるが、明日山に登るといふ前の晩は何としても神經が昂ぶる。富士さんは極平凡な砂山の徑であるし、女子供でも平氣で登る山だから、危險なことなんて萬に一つもあるべき筈はない。けれどもさつき八木君の話を聽いてから、そして奥さんの心配があまり眞劍だつたのを見てからは、その萬一の危險といふことを考へないではをれない。東京を立つ時は島田に夏期講習に行つた歸りに富士驛あたりに下車して、ちよつと氣輕に富士山に登つて來る考へで家を出たのであつたが。

雨の音が氣になつて仕方がない。枕もとの電燈をひねつて、鞄の中に入れて置いた登山用の上衣だの、卷脚絆だのを出して見る。新らしい襯衣や、携帶用の藥品――といつても繃帶、外傷藥、胃腸藥といつた風なものであるが――などを一纏めにする。いつも感じることであるが、旅に出る前夜、山に登る前夜の心といふものは一種の憂鬱さを伴ふ。その憂鬱さあるがゆゑに、旅を思ひ、山を戀ふわけであるかも知れぬ。

＊

まだ暗い中に眼がさめた。大井川は非常に水嵩が增したなどと宿の男たちが話つてゐた。朝の食事をすますころは、それでも幾分小降りになつて來た。

「こんな雨でも富士にお登りですか。」八木君の奥さんは昨日からの不安をつづける。

「ええ、登りませう。」

「やつぱりお一人で？」

「强力を雇ひますよ。」

上衣だけを登山衣に着替へて卷脚絆を穿き、風呂敷包み一つだけを抱へて島田を立つ。如何にも輕々とした心になる。

靑田の中には雨に濡れて田の草を取る人たちが時々山を眺めてゐるが、何の山も低い雲につつまれてゐる。八木君や、奥さんや、東京から來たといふ宿の婢たちに送られて島田を立つたのは



朝の八時ごろ。

富士驛に下りて見ると、登山者の團體らしい人たちが二三十人も集まつてゐる。大宮まで電車に乘る。富士川を左に電車は歩一歩富士の裾野を高原へと急ぐ。

大宮の淺間神社をめぐつて登山客對手の店が並んでゐる。あてもなしに歩いてゐると幾人も幾人も强力らしい男たちが往來の者に聲をかける。若い人の善ささうな男を物色して案内を決める。その男にまかして息杖、草鞋、糸立、桐油紙などを纏めて求める。間もなく乘合自動車が太郎坊までで出る。强力の名を問へば宗七と答へる。

大宮の町を出はづれたばかりで高原らしい氣分に浸される。火山灰の道が富士の裾野を斜に走る。桑の畑、甘藷の畑、玉蜀黍の畑、時折り杉の木立、水車の小屋と大方はただ一色に織り込まれた靑草の原である。何處かで瑠璃鳥が鳴いてゐる。冷たい霧を含むだ高原の微風を颯と頰に感じる。自動車が通はず、馬で行くのであつたら「馬ほくほく」の詩趣もわくであらうなどと思ふ。人も木も山も淡い霧を感じる。

太郎坊には七八頭の馬が客を待つてゐた。樣、楢などの雜木林、草の原を幾曲りして石ころ道を爪先上りに登る。鶯が啼いてゐる。時々霧が草の上を這ふほどに漂ふては消ゆる。二合目の手前で下りの馬に逢ひ、馬の背を借る。樅、楓、朴などの老木が道を掩うてゐる。空をかさして靑木の下をすすめば淵の底を歩いてゐるやうな氣もする。溪川が流れてゐる。山案内の男は二三日

前そのあたりで鹿を見たといつてゐた。

二合目にかかるころから霧が深く、山も渓も見えなくなつた。仰いでも辛うじて頭上の梢を見るのみで、人はただ雲の中をたどるばかりである。一鳥鳴かず山更に深しの境涯をたどる。

三合目を越え四合目近くなつてはじめて豁然として空は晴れ、栂の林の中に郭公や駒鳥の鳴くを聞く。富士の森林地帶ほど小鳥にめぐまれたところは餘り多くないであらう。海洋を南に受けた富士の地勢、樹木の種類の豐富なこと、水氣の關係、いろいろな原因からしてともかく富士の裾野は小鳥にめぐまれてゐるのであらう。

わたくしは一度山中湖のほとりで一生を小鳥の鳴く音の研究に費してゐるN氏に逢つたことがある。「あれはとらつぐみです。あれは小瑠璃。」と一々鳥の鳴く音を教へてくれるのであるが、さらに「あの鳴き聲は雛鳥を呼んでゐる聲です。」「あの鳴き聲は喜んでゐるをりの聲です。」といふ風に一つ一つ鳥の鳴く音の裡に感情を聽き分けて説明してくれるのであつた。

尙一人――これはわたくしはまだ逢つたことはないが――裾野にはあらゆる鳥の鳴く音を巧に擬して小鳥を集める老人がゐることを聽いたことがある。

僞りの多い都會人を對手にせず、小鳥を對手に生きてゐる人たちを羨ましく思ふこともある。

*

日本北アルプスあたりを歩いてゐると、たいてい一つの澤には一羽の駒鳥を聽く。だから棧を



渡り、丸木橋をつたうて新たな澤に出るごとに新たに駒鳥の鳴く音を聽き出すのをたのしみに渓を歩くこともあつた。

富士の木立を歩いてゐると、一つの渓、一つの澤に幾羽ともなき駒鳥を聽く。むしろその聲の豐富なのに驚かされる。

四合目を離るれば間もなく木立は疎きて、一面の岩山を擁して道は屈折する。富士の大觀をほしいままにすることのできるのはそれからである。富士の山そのものは、長い間の登山客に馴らされ過ぎて山を攀ぢてゐても山を歩いてゐるやうな氣はしない。物を賣る店のあまりに多きに煩はされる。しかし山を登るにつれて、甲駿遠の山々はいふまでもなく、太平洋の浪に洗はる常陸、安房、相模、伊豆、駿河、遠江の濱の白砂青松を眼下に眺むる大觀は他の山に求むべくもないことである。

焼けただれた熔岩の肌をつつんで柔かな草がすでに秋の風を抱いてゐる。

仰げば五合目からずつと八合目九合目頂上にちかき石室までが一眸の裡に入る。六合目で馬を捨て、八合目の石室に泊る。

日は暮れかかつてゐた。四十人ばかりの登山者たちがすでに狹い石室の中に眠つてゐた。寒さと、蚤の多いために眠ることはできない。

薄暗いランプがただ一つ小屋の梁からつるされてある。澤庵、味噌汁、半煮えの飯を板の上に

据ゑられた。ただ砂を嚙む思ひである。

夜の九時ごろ外套を引つかけて石室の外に出た。眞冬のやうな寒さである。富士の嶺が巨人のごとき眞つ黑な姿を滿天の星空の眞ん中に突つ込んでゐる。何の石室も眞つ暗である。人のけはいさへ感じられぬ。興津、吉原、沼津、大磯、横濱あたりの燈が一かたまりになつては霧の底に明滅してゐる。

强力の宗七が石室から出て來て一つ一つ燈の見ゆる町や、御前岬、三保、伊豆あたりの燈臺を指さす。裾野の演習場「瀧ケ原、板妻の廠舍はこの下ですよ。」と指さしたあたりを見ると、そこにも三つ四つの燭が暗の中にまたたいてゐた。

今度わたくしが富士に登つた動機の一つは是非一度瀧ケ原、板妻の廠舍の附近を通り過ぎて見たいと思つたからであつた。友人の田中中尉が稻毛近くで自殺をするまで長いこと瀧ケ原や板妻の廠舍に居り、幾度か裾野から手紙を寄越したことがあつた。かれが中學時代からの家庭的な惱み、人生に對する哲學的な懷疑、その個性的な孤獨の一切を死によつて淸算するに至つた十餘年の內生活を象徵するかのやうに、裾野の草の中の燭はわびしげにまたたいてゐた。

わたくしは石室の中に歸つて行つた。

五六人の强力たちが集まつて酒を飲んでゐた。「繭は今年も廉い。」といふ話から、誰かが富士山のことを惡く言つたと見え一人の强力が「もつたいないことをいふな、このお富士さんがあ



ればこそお互に、一夏に六十圓や七十圓は稼げるぢやねえか。田を何反作つてそれほどのお金が自分の手に殘ると思ふぞ。」と言つた。傍の强力たちも「さうだとも。」と合槌を打つた。外から石室の戶を叩く者があつた。

「誰だな。」

「おれだよ。六合目の石室から來ただ。お客さまが急にひどく加減が惡くなつたで、頂上までお醫者さまを迎へに行くだ。」その男は室の中にはひらず通りすぎてしまつた。暗の中に二三度石のころがる音がした。

蚤が體中を這ひまはつた。筵の床が堅いので、背中が痛くて、なかなか眠れない。二時間も經つたかと思ふころ、さつきの男がふたたび山を下つて來た。提灯の火が戶口の暗を赤く染めた。

「どうだつたお醫者は？」

「うむ、先生さまをお連れして下るところだ。」

「御苦勞さま。」

戶外の聲音は消えてしまつた。

「餘程ひどいのかな。」

「この夜中に頂上からお醫者を呼ぶほどぢや、むづかしいのぢやないかな。」

「しかし、もしものことがあつても六合目あたりからだとまだ樂だなあ。」

「おれと××と二人で、頂上から死骸を捨いで卸したが、えらかつたよ。」
「死ぬと重くなるからのう。」
「今年はこなひだの嵐の時吉田口で死んだのと、須走のと、もう二人ぢやのう。」
「うむ……」誰かが腰がへりを打つた。

*

御來迎を拜むために石室を出て行つた。六合目あたりから下は、雲の海につつまれてしまつた。空は星、山はまだ暗の中に眠つてゐた。同じやうに御來迎を拜む人たちが二三人岩かげにしやがんでゐた。風は冬のごとく寒かつた。生憎横雲がかかつたために御來迎は拜めなかつた。

朝の山肌は黒く濡れてゐた。白衣の講中の人たちが鈴を鳴らしては六根清淨を唱へながら、嶮しい胸突坂の岩を這うてゐた。物賣る店のみ多く何となく俗な、あわただしい感じに充たされてゐる山路も、夜明け方の冷たい風に吹かれながら、或る者は岩に攀ぢ、或る者は砂に倒れつつも、頂上へ頂上へと精進するこの刹那の人々の姿は、むしろ尊くさへ思はれる。

振りかへれば六合目七合目の石室あたりに泊つてゐた人たちは、脚下の岩の路を同じやうに這つてゐる。仰げば巔のあたりまで、眞白な行衣の先達たちが、ただ一筋の道を天上へ天上へあくがるるもののごとく、動き岩根を攀ぢ登つてゐる。天路を慕ふ人の子のいたましき尊い姿だ。朝風につれてかすかに鈴の音が漂ふ。遠き彌撒の鐘を想ふ者もあるであらう。たしかに一脈の朝山



の命を感じる。宗教的な或るものを心の底ふかく、かすかに觸れさせる。

天保四年七月十七日、大鹽中齋がその著洗心洞劄記を富士山頂の石室に埋めたといふことを思ひ出しながら劍ヶ峰から白山の方へお鉢廻りをする。甲州に向いた方の崖はものすごいほどに切つ立つてゐる。行者の通ふ道といふのがほそぼそと糸のごとく遙かに走つてゐる。膺が一羽一直線に懸崖を下つて行つた。

雲の間に山中湖、河口湖が碧水を湛へて見える。日本アルプスの山々も雲の上にわづかにいただきを見せてゐる。

須走を下つて太郎坊で二頭の馬を雇ふことにした。

御殿場まで自動車が通うてゐるが、わたくしは瀧ヶ原を横切つて廠舎のあたりを見、田中中尉を追憶したかつたので、わざと馬に乘ることにした。強力も馬に乘せた。

裾野の雜木林地帶はすでに半ば紅葉してゐた。裾野は行けども行けども草の原である。秋草は孤獨なる世界をこめて咲きみだれてゐた。

御殿場へのただ一筋の道がゆるやかな勾配を描いて北から南へ走つてゐる。

二時間ばかりも歩いたところで、わたくしたちは流れを見出したので馬を下りて木蔭に憩ふことにした。

そこからは、草の涯に瀧ヶ原の廠舎の細長い屋根が白く日光に反射してゐるのが見出された。

「マコトニスマヌ」と臨終の田中が、千葉の衞戍病院で、ベッドに仰臥したままわたくしの手の平に字を書いたことを思ひ出した。咽喉を突いた短刀の鋩が折れてゐた。切られた傷口からすうすうと呼吸が洩れてゐた。

わたくしたちはふたたび馬に跨つた。

冷たい雨が降つて來た。

今まで見えてゐた廐舍の屋根も雲につつまれてしまつた。富士も裾野もまたたく間に雲にかくれてしまつた。

雨に濡れた吾木香の下では蟲が鳴いてゐた。

# 出羽三山行の記

那須の原はただ草一面の曠野である。遠い山も高い山もただ一色に秋を漂はせてゐる。ここかしこの柴山の間から青い煙が立つてゐる。

正午ころの太陽を眞正面に浴びた那須の赭茶けた山肌も透明な秋の空氣につつまれて、磨き上げられたものの美しさと落ち着きを見せてゐる。

美しい流れに沿うて曼珠沙華が咲き、稻田の間を五六人の客を乘せたガタ馬車が走つて行くのもめづらしい。

奴凧を案山子かはりに使つてあるあたりには威銃を抱へた青年が立つてゐる。夥しい渡り鳥の群が稻田の上を飛んで行く。

七日ころの月がぼかりと草の上に浮いてゐる。

白河の關といふ名を聽いただけでも東北の旅のなつかしさを感じる。寒いころは白河の驛で熱い蕎麥を賣つでゐるが、今はそれもない。石垣のみを殘した古城のほとりには小ひさな工場の煙突などが見える。

汽車を福島驛で奥羽本線に乘りかへる。車體はひどく古びてゐるが、歩一歩道は山手にかかるにつれて山峽の景色は人の心を惹く。右手にやや遠く連なる山の彼方に飯坂溫泉があると聞かされた時は亡友のことを思ひ出した。かれが自殺をする一年前の夏病を養つてゐた溫泉場は飯坂であつた。飯坂からの歸りにかれは櫻株を持つて來てくれた。

阿武隈川の渓谷に沿ひ、吾妻山の白雲を眺めつつ板谷、峠などと呼ぶ山上の驛を通る。虎杖が人の背を埋める程に繁つてゐる。昔は米澤から江戸に出る唯一の險峻な難路であつたらうが、今は通行の人とても稀に、雲にとざされたる山溪に一鳥啼かぬわびしさをこめてゐる。

そこにもここにもはげしい冬の吹雪や雪崩を防ぐためのスノー・セットや防雪林を見出す。草の中、木立の蔭には飯場のやうなものがある。筵や天幕を張り、板圍ひにしたばかりの小屋であるが、そこには十五六人の男たちが寢泊りをしてゐるらしい。電線を架けて行く男、鐵板を斷つ男、レールをへし曲げてゐる男、砂防工事をやる男といつた風に、人一人見ぬ山の中にも、逞しい筋肉の男たちはあわただしげに働いてゐる。直ぐ近くの芒の中では四五人の若者たちが野天風



呂にはひつたまま、喘ぎ喘ぎ國境の山を越えて行く汽車を眺めてゐる。

板谷といふ村はちよつと舊箱根あたりの山村を聯想させる。村の眞ん中を莞の道が貫いてゐて、木陣とでもいひさうな構への家が昔のままに取りのこされてゐる。草屋根の形といひ、窓の切り方といひ、いかにも落ち着いた均齊を見せてゐる。

峠あたりでは背負籠に夜具や米を擔いで、山を下つて來る男と、そのうしろからお歩いてゐる溫泉客らしい男女を見た。このあたりの溫泉ではまだたいていは米持參の客が多いといふことである。

峠を越ゆれば汽車は米澤の盆地に向つて下ることになる。行けども行けども山といつた有樣である。汽車の留るところには數十戸の農村がある。概して家の構造は落ちついてゐて、屋根の切り方も複雜であり、繪畫的であるが、何となく長い間自然の壓威にさいなまれたもののわびしさを感じさせる。

米澤には舊い友人がゐる。蛙を愛し、庵の名も蛙仙寺と名づけてゐる程の脫俗振りである。相見ざることすでに二十餘年、木立につつまれた米澤の町を車窓に眺めながらかれの健康を祈る。

昔、湖底であつたらしい幾つもの村、耕作地、菊畑などを夕暗の中に見送つてゐる間に山形に着いた。

山形では酒家長谷川氏の邸で芭蕉の出羽三山の句を何よりもありがたく拜んだ。

羽黒山に登る前に立石寺に芭蕉の跡を訪ねて見たいと思つたので、山形市の田代氏、長谷川氏、大場氏等に案内されて山寺村に向ふ。

何處まで行つても山に圍まれてゐるといふのがこのあたりの感じである。山には雲がかかつてゐる。道に沿うて背の高い桑の木が繁つてゐる。村の家の構などが宇治から山科の方へ通ふ洛外の田園の俤を偲ばせる。道の兩側からさしかかつてゐる桑の下をくぐるやうにして、道は爪先上りになつてゐる。溪川の流れを右に見つつ左手に聳え立つ奇岩の山を迎へる。立石寺である。

川一つへだててすでに新たに鐵道が布かれてあるが、ただ寺の前の旅籠屋も茶店も大方は昔の面影をとどめてゐる。

苔むしたる石磴を登り、本堂の前を十數歩行つたところに芭蕉の蟬塚がある。

芭蕉は元祿二年五月の半ばころ平泉から道をかへて出羽の國へ向つてゐる。この數日の旅行は滅多に人も通らぬ山道であり、「おくの細道」の中でも最も危險な、難渋なものであつたことが想像される。

光堂に降りそそぐさみだれを平泉の旅の名殘りとして、芭蕉は國境の山を越えて羽前最上の庄に入つてゐる。「小黒崎みつの小島を過て、なるこの湯より尿前の關にかかりて出羽の國にこえんとす。」と『おくの細道』にあるが、「蚤しらみ馬の尿する枕もと」といふ當時の句は芭蕉の



經驗であつたらう。

「あるじの云、これより出羽國に大山を隔て道さだかならざれば道しるべの人をたのみてこゆべきよしを申す。さらばとて人をたのみ侍れば兇竟の若もの反脇差を横たへ、樫の杖を携て我々が先に立て行。」と書いてあるところを見れば山賊などの難もあつたのであらう。

ともかく左樣な恐ろしい思ひをして國境の山を越えて、最上川沿岸に出た芭蕉は、先づ尾花澤に滑鳳といふ男を訪ねてゐる。「涼しさを我やどにしてねまるなり」といふ句があるところから考へると、尾花澤の滑稽は芭蕉にとりて長途の疲れを癒し、旅のわびしさを慰むるに充分であつたらしい。尾花澤の人々は山寺の見物をすすめたので、芭蕉は七里ばかりの道程を取つてかへし山寺を訪ねた。

「日いまだ暮ず、獄の坊に宿かり置て山上の堂にのぼる。岩に巖をかさねて山とし、松柏年ふり、土石老て苔滑に岩上の院々扉を閉て物の音聞えず云々」とあるが、今も岩より岩に傳うて堂宇があり、老杉古松いよいよ年古りたる影を深はせてゐる。五大堂は苔深き斷崖に臨み脚下の獄の坊、さらに溪川をへだてて一群の昔の宿らしい草葺きの家並を見る。その三四十戸の山村を貫いて一筋の道がある。道はやがて左右から迫る山と山の間を縫うて東南に走り、やがて雲の中に消えてしまふ。この山道は陸羽國境の二口峠を越えて名取川に沿うて仙臺に通じてゐる。二口峠の左右は面白山であり、神室嶽であり、名取川は源をそこに發してゐる。

五月あやめ葺く日に芭蕉は名取川を渡つて仙臺に入つてゐることなどを思ひながら、わたくしは五大堂の柱に凭りつつ東南の山々を眺めてゐた。

開山堂の賽錢箱の上に、丈け二尺ばかりの僧形の銅像がある。筏舟といふ越後あたりの出家で、諸國を行脚し最後にここの山寺に落ち着き、一切經堂に入つて經を持ち出して、南向きの石窟の中にこもり、終日經を讀んでゐたといふことである。自ら銅像を鑄、死後は茶毗に附して、灰は最上川に捨てよと遺言して、終に大往生を遂げたといふことである。その銅像は悟り切つた男のやうに微笑んでゐる。

ここの開山慈覺大師の入定窟は開山堂の傍ら、百尺ばかりの懸崖の上に在る。窟は東南景勝の山水に對して扉を鎖し、千古の夢を結んでゐる。

去年の雪はこのあたりでも數十年來のことであつたさうで、大きな松が幾本となく雪のために折られ、岩の徑を埋めていたましい殘骸を横たへてゐるのも秋のわびしさを深くする。

芭蕉の句を思ひつつ

あきかせもいはにしむへし山の寺

*

山寺を出て、やがて川に沿ひ天童に向ふ。田代氏と別れ長谷川氏に送られて白い埃の道をたど



る。

道は桑の葉に掩はれ昔ながらの家居、白英蓉の籬など何となくゆかしい。恐らく芭蕉もそこの小徑を尾花澤へ歩いて行つたことであらう。

天童の驛で長谷川氏とも別れ、大場氏とただ二人になる。

芭蕉は尾花澤のすこし西、大石田といふところから船に乘つて最上川を下つてゐる。數日滯在して日和を待つたことが記されてゐる。汽車は最上川に近く大石田を通つて行くので、尾花澤の町とはやや遠ざかつてゐる。鐵道の南方に一面のなだらかな丘阜があり、丘は芒に掩はれてゐる。尾花澤はその丘のかなたになる。汽車は鐵橋をわたつてゐた。わたくしは義經主從が平泉に落ちたをり越えたといふ山を指示された。川は廣く、水は澄んでゐた。白い川原に沿うて一筋の徑が山腹を縫ひ、やがて雲に入つてゐた。しばらくはわたくしの視線は雲に入る山徑に惹きつけられてしまつた。

いたづらに雲山にあり蕎麥の花

*

最上川は濁つてゐた。

幾度か廻り、廻つては山の裾に出で、山村を洗ひ、稻田を貫き、山に隱れてはやがて雲のかな

たに漂うてゐた。

## いく曲り秋をめぐるか最上川

昔は酒田から山形あたりへの最大の交通路であつたらう最上川も、今は船の往き通ひも稀になつて、ただ秋の雲を浮かべて悠々の思ひをやるのみである。

最上川と立谷澤川と合するところに清川といふ靜かな驛がある。山は聳え、川幅は廣く、杉の木立古りてあたりの家の構へも整うて見える。清川八郎の故郷である。最上川に近く八郎の墓がある。

清川の次の驛狩川で汽車を下り、庄内平野見わたすかぎりの稲田の中を自動車に搖られて手向町に着く。稲の香は子供のころの故郷を想はせる。

手向町は榛名や碓氷あたりの社家町をさらに大きくした形の山の町である。仕合せにもわたくしたちは山伏達の秋の峯中入りをする行列を見た。

羽黒山には春の山、夏、秋の山、冬の山といふ風に四季の峯中入りがあるといふ話であつた。

峯中入りといふのは修驗者達の苦行である。扮裝はわたくしたちが芝居で觀る勸進帳や安宅の山伏達のそれであつて、太だ時代がかつてゐる。この山を開き給うた蜂子皇子の山に入らせられたままの姿であらう。鉞を擔いだ男たちが先頭に立ち、貝の音を杉の木立にこだまさせつつ山に



入る。

羽黒の隨臣門をくぐれば十六丁餘の間苔むしたる石磴を登らなければならぬ。道の兩側には幾抱へもありさうな老杉が小暗い蔭をこめてゐる。大杉の下の築地の跡、草の中の木立の有樣など何となく奈良の淺茅原を偲の地をのこしてゐる。ところどころ昔宿坊であつたかと思はれる平坦ばせる。ただ一羽鵲に似て、やゝ小さき鳥の谷へ鳴いてゆくのを見た。

芭蕉の「有がたや雪をかをらす南谷」の南谷には樵の木の下に熊笹が生ひしげり、今はすでに雪も解け、道は草の中に消えて、月ほそぼそと杉の間にたそがれてゐた。

十六丁餘の石磴を登り盡せば山はやや展けて、そこには老杉につつまれた山間の廣場がある。廣場にはすでに夕暗が漂ひはじめてゐた。かすかな燈明の光りを浴びつつ、神樂を舞ひ了へた童子たちが坂を下つて行つた。

羽黒神社の前にぬかづいたころは日もすつかり暮れて、月の光りが寄く神殿の前の鏡池に動いてゐた。山氣もしんしんと身に沁むやうだ。

齋館の方へ疲れた足を引き摺つて甃の道を歩いてゐると、後から若い男がいそいで燈を持つて來た。「こんなことはつひぞない事ですが昨日このあたりで蝮を三疋捕へたものですから。」といつて足もとを照らしてくれた。

杉の木の間の月を仰いでは停り、をりをりに谺してひびく溪川の音を聽く。

齋館は數百の人々を入れることができる程の大きなものである。ここの齋館に一泊して羽黒山の後月山に登ることにする。

すでに登拜の時期も遲く、山に入る人とても少いせゐであらうか、今宵は東道の主典武若氏、同行の大場氏とわたくしの三人の他には一人の同宿者とてもない。廣い齋館の片隅にただ一つの燭を點して山上の秋の夜を語る。

緣の外十歩にして深い溪である。溪は楢や、榛、杉の老木に埋められてゐる。溪を越え、溪を越えて遥かに庄内平野を一眸の下に見る。庄内平野にはところどころ霧が漂うてゐる。一面の稻田の間に點々と木立につつまれた村の燈を算へることができる。酒田の町の光りが一つ二つ霧の間に明滅してゐる。最上川が大きな弧を描き、蒼白い月の光りをただよはせつつ流れてゐる。飛島あたりの沖を走つてゐる汽船の燈も見える。

宵の口には地蟲のやうなものの音も聞えてゐたが、夜の更けるにつれて蟲の音も止み、遠い谷川の音のみが時折り風のやうに響いて來る。

なかなか眠れない。二三度溪の方にけものの鳴く音を聞いた。むささびの聲であらうか。

*

朝の食膳も茗荷、豆腐といふやうな精進料理であつた。草鞋の緒を締め、糸立、菅笠、鳥杖といふいでたちで、神前にぬかづく。



蜂子皇子の御墓は數株の老杉立ち並び、苔深く露千古の夢をこめたる形の地域がそれである。ただ何となく尊く、寂び寂びて秋はいよいよ深く旅人の心に迫る。

御墓に詣でてゐる間に、凄まじい音を立てて大粒の雨が降つて來た。谷を渡り、喬木の山を叩き、打ちつつ襲ひ來る山雨の姿はものすごいといふより他はない。

わたくしたちは默々として杉の並木に沿うて雨の中を歩いて行つた。道は夕暮のやうに暗い。雨は笠を打ち、木立を打ち、遠ざかつては、ふたたび新たなる勢をもつて木を撃ち、枝を搏ちつつ降りつづく。最初は秋の山にありがちな驟雨であらうと思ひ、梢を通してわづかに見ゆる空を仰いでは歩一歩、坂を昇り、谷を下つて行つたが、遠い嵐の音までも誘うて、空はただ曇りに曇るばかりである。徑のところどころに藥を束ねて道を塞ぎ椿の枝を立て、神火を焚いた跡がある。

二十丁ばかりも登つたころわたくしたちは昨日隨臣門の前で逢つた峯中入りの修驗者達の堂にこもつてゐるのを杉の木の間に見た。

堂の入り口には、昨日行列の先頭に立つてゐた大きな鉞が立てかけられてあつた。暗い木立の中に古典的な修驗者たちの姿を見るのもうれしく、尊かつた。

さらに十丁ばかりも山を登つたところに荒澤寺といふ古刹があり、そこにも多くの修驗者たちが靜かに窓外の雨を聽きつつこもつてゐた。

荒澤寺を過ぐるころから雨は一しほ強く降つて來た。雨に濡れた白衣の道者たちが走るやうに

して山を下つて來た。道者たちはわたくしたちと逢ふごとに「御苦勞さま」と聲をかけて行つた。道者たちの白布の寶冠をいただき、木綿しめを引つかけてゐる姿の雨にかくれてゆくのもありがたかつた。

道はやがて數里の間樅の大樹につつまれてしまつた。道は雨のために谷川となり、木を打つ雨の音は人の心をいやが上に暗くする。

樅の樹海を通り過ぐればやがて灌木地帶となり、をりをりは雲の裂け目からあたりの山や谷々を見出すこともできた。

山上の嵐に吹き落さるるやうにして白衣の道者たちが草の原を走りつつ下つて來た。

六合目七合目にさしかかるころから恐ろしい嵐の聲さへ聞えて來た。雲もをりをりは裂けて俄に山の麓を縫ふ溪川を覗かせることもある。ちかごろ砂金を採る人々がそこの溪川に集まつてゐるといふことであつた。雲は忽ちにして砂金採る谷川をもつつみはじめた。

八合目あたりからはただ一面の草原である。雨に濡るる手はやや冷たさを感じるほどになつた。谿から吹き上げられた雨は横なぐりに草の原を叩きつけはじめた。草は泣くがごとく、狂ふがごとく雨に叫び、雨に伏す。

草の原はまた山上無數の沼澤によりて高原の一風光を形作つてゐる。小ひさな池は一畝にも足らぬ程のものもあり、大きな池は五段も一町歩も或ひは數町歩もあるであらう。大小さまざまの



池を六千尺ばかりの山上に見出さうとは想像もしないことであつた。或る池は銀閣寺のそれを、或る池は金閣寺の、或る池は洛北廣澤の池を聯想させる。漫々たる水の涯にただ一つ、或ひは二三の動き岩石が天工の妙を盡して布置されてゐる。雨に打たるる水の面には蝦夷細蘭が繁り、白い水芭蕉の花の嵐に搖れてゐるあたり、神韻縹渺、幾度か行人の足を停めさせる。池の形、渚の石の姿、剩へ雨風に打たれたる風情といひ、わたくしは誠にめぐまれた日に登つた。

時として草の原を横切る雨か、雲か、水か、判斷に苦しむことがある。忽然として雨の脚が消える刹那に水芭蕉の四五尺もあるやうな柔かな葉の間から、白い夢のやうな花が搖れはじめ、燈心草ほどの細蘭が煙のやうな雨にそよぐ。水も草も水芭蕉の花も細蘭も一樣に空にあり、雲にあり、嵐の中にあつて日は暮れかかつて來た。草の中に嵐に溶けつつ可憐な鳥の聲がひびく。

疊石、一の嶽などといふ難所には脚下に雪溪の雪のほの白く嵐に打たれつつ暮れて行くのを見た。雨はますます激しく、風は募りに募る。二三歩走つては草に臥し、岩に隱れ、巖を攀ぢ、相呼應しつつ進む。

九合目の小屋に辿り着いた頃は空はますます荒れ、草は千切れて谿底に吹き飛ばさるる程のものすごさであつた。荒縄で糸立を身にしかとくくりつけ、篠突く雨の中を山巔に向ふ。晴天ならば鳥海をはじめ磐梯山も陸奥の山々も日本海もさながらに眺めらるるであらうが、今はただ吹きつける雲と雨と、身邊數尺の草と、嵐の聲のみである。

月山のいただきに着いたころは日は暮れてしまつた。嵐は石を飛ばし、石を削つて狂ふ。

芭蕉は「雲霧山氣の中に氷雪を踏て登ること八里……頂上に臻れば日沒て月あらはる。笹を敷篠を枕として臥て明るを待」と書いてゐる。今夜は月もある筈であるがかすかに曇つた空を見るのみである。小屋の中にはランプが點されてあり、小屋の主の心づかひから百目蠟燭が立てられた。岩のり、山のみつばなどの馳走にあづかる。梁からとま蟲といふ小蟲が落ちて來るので顏を掩うて寢る。嵐の音をはるかの谿底に聞きつつまどろむ。戸の隙から雲を誘うて冷たい風が吹込んで來る。日露戰爭にも出征したといふ背の高い修驗者は小屋の外に出て法螺貝を吹く。貝の音は嵐を喚び、嵐を追ひつつ雲に消ゆる。

## かひの音に野分をよぶか月の山

＊

夜の明けるのを待つて雲の中を湯殿山の方へ下る。月山を下る二三丁ばかりのところに刀工鍛錬の趾がある。山上の雪を解かし、月山の名刀を打つた跡である。草はすでに枯れて秋のふかきを感じさせる。湯殿までは嶮しい石の山徑を一氣に下る。時として鐵の鏈を頼りに下る難處もある。

湯殿山からまた樅の林がつづく。瀧があり、流れの水は美しい。ここで武若氏と別れ、大場氏と二人で山を下る。樅の林にはかけすが鳴いてゐる。



田麥俣、大網などといふ山間の村を通つて赤川に沿ひ庄内平野に出る。雪袴を穿いた山村の娘たちが壞れかかつた馬小屋の前に立つて旅人を眺めてゐたりする。赤川は鶴岡の傍を過ぎ、酒田で最上川と合つて日本海にそゝぐ流れである。

鶴岡の町から日本海岸の湯の濱に行く。東の方には鳥海山の裾を洗うて日本海の白波が立つてゐる。象潟は鳥海の山裾を廻つたあたりになつてゐる。夕刻象潟行きを斷念して鶴岡から鼠ヶ關にまはつて東京にかへることにする。山形から一緒であつた大場氏を新庄廻りの汽車に送る。後はただ一人になつて西行きの汽車を待つ。

鳥海も月山も同じやうに庄内平野のかなたに蒼然として暮れてゆく。

雨が降つて來て、汽車の窓を打つ。しかし小一時間も走つてゐる間に空は霽れて月さへあらはれて來た。走れども走れども燈の影も稀なる秋の夜である。

日本海の白い波が線路を洗ふやうに近く襲ひ來てはふたたび月の光りに溶けて消ゆる。

二つ三つ寂しい驛を通り過ぎる間に時雨を思はせるやうな雨が降つて來た。停車場とはいへ一人の乘客もない。雨に濡れた草の中には蟲が鳴いてゐる。

汽車は一筋の遠に沿うて海岸を走る。白い砂、眞つ黒な岩山、潮吹を浴びた漁火すべてが昔のままであるやうに思はれる。伶良を伴うた芭蕉がなほ旅の路に行き暮れて草の中に燭をもとめてゐるやうな氣さへする。鼠ヶ關を通るころは雨も霽れて、月を背にした山の姿は暗かつた。

# 陸中平泉行

高野から歸つて來て數日、近ごろになく靜かな小春日和がつづいた。四日五日と緣側に出て怠惰な快い日の光りを樂しんでゐる間に、わたくしはまた旅の魔にとりつかれてしまつた。

わたくしは陸中平泉に行つて見たいと思つた。平泉を訪ねる序に、少し時期は遲くなつたが日光から中禪寺をも見て來ようといふのが今度の旅の計畫であつた。

十一月の下旬、赤羽の鐵橋をわたればすでに旅に出た心になりきつてしまふ。山はともかくも里にはまだ紅葉が燃えてゐる。櫟や楢の雜木林にとりかこまれて、南に小春日を受けて冬を待ちつつある下野あたりの農家をながめながら汽車は北へ北へと走る。桐の畑のみがつづく。冬の影が梢ばかりの桐畑のなかにのみこめられてゐるやうにも思はれる。二三坪の鷄舍があり、菊の花が咲いてゐる。走つても走つても菊の花が咲いてゐる。



赤城や、男體山が黑い土の涯にそびえてゐる。この夏、夜霧に道を迷うた榛名の姿をさがしたが見出せなかつた。

新聞を讀んでゐて、今日が芭蕉忌にあたることを知つた。あの日は時雨が降つたやうである。けふは風もない小春日和である。せめて折々は時雨も降れと思ふ。

遠い山にはすでに雪が積もつてゐる。

菊の畑、桐の畑、そして菊の畑、菊の畑。その涯に白根の雪がかがやいてゐる。日本の秋は菊の花一つでたくさんである。

芭蕉の句を思ふ。

隱家や月と菊とに田三反
稻こきの老もめでたしきくの花
見どころのあれや野分の後の菊

そのさらになつかしき句に

菊の香や奈良には古き佛たち

がある。

わたくしは古き佛たちの句を思ひながら近づいて來る男體山を眺めてゐた。

汽車はゆるやかなスロープをのぼつて山に近づく。汽車は雜木林の中を走る。紅葉は窓に迫り、窓を打ち、汽車の中の人も、空氣も紅に燃ゆる。老杉の並樹三里四里と連なる。菊の花の日本に生まれた幸福を思ふと同時に、木の多い日本に生まれたありがたさを思ふ。

日光の人工は、とても日光の自然に比べることはできぬ。天工はすでに人工に幾千倍してゐる。あまりに厚化粧をこらした日光の人工には飽きが來る。ただ楣間の可憐な眠り猫だけがいつまでも眼にのこる。

馬返しのあたり、水は涸れはててゐる。

橋の畔に一株の楓葉が燃えてゐる。幾度か振りかへつてはながめる。

全山、枯枝寒梢のみ。山は稜々として骨のみ霜に痛んでゐる。

「ここいらは猿が出ます。」と案内の男は幾百尺の懸崖を仰ぎながらいふ。落葉しつくして山の肌は寒く薄日を浴びてゐる。

曲折また曲折して冬木立の間をくぐる。かけすが鳴いてゐる。

三四寸もありさうな霜柱がさくさくと冬枯れの音を立てる。

登りつくして、中禪寺湖畔まではやや平な道である。白樺の林の根を熊笹が掩うてゐる。華嚴の瀧の水も涸れてゐる。日は暮れてしまつた。中禪寺湖畔に佇むにはあまりに寒い。蕭殺たる枯



れ山を十二月の月が照らしてゐる。

「昨日は終日吹雪でございました。今日はおだやかで、いい時おのぼりになりました。」といつて宿の婢は火をはこんでくれたが、東京の一二月ころの寒さである。湖上の月をながめる勇氣もない。

翌日は夜明方から雪催ひの空であつた。ぽつりぽつりと雨が降つてゐた。湖の面に落ちては消ゆる雨を見てゐると旅らしい哀愁を誘はれる。宿の駒鳥がしきりに鳴く。

十時ころになつて雨が止んだ。湖畔に沿うて中禪寺へ歩く。明治三十幾年かの男體山の山崩れのために中禪寺も小學校も湖の中へ押し流されたとかいふ話。小學校の先生夫婦子供までが岩の下になつて死んだといふ氣の毒な話をも聽いた。それまでは中禪寺は湖の東岸にあつたさうだが、今は南の方へ移されてゐる。二三人の男が焚き火をしてゐる。堂の中を見せてもらふ。立木觀音の荒削りな、まだ手斧の痕がそのままにのこつてゐる姿は、僞りのない子供の創作を見るやうでうれしい。笑藥師の像も尊いものである。それは宗教だの藝術だのといふ狹い範疇を絶したものである。心からの人間のよろこび、人間の聖福を象徴したかのごとき作品である。中禪寺の立木觀音、笑藥師この二つのきはめて大まかな味の藝術を見るだけでも寒い山をのぼつて來た甲斐はあつた。

どこの家でも、家の前三四尺置きくらゐに高い丸太や太い竹を組み立てて吹雪除けをこしらへ

てゐた。

來年の春まで日毎夜毎の吹雪の聲を聽きつつ暮らさなければならぬ山の人たちの生活を想像しながら山を下つた。人間はどのやうな自然の殘虐の中にも忍びつつ生きてゐる。生きることの苦しみ！　人間はただ忍びつつ生きてゐるといふ一事だけでも涙ぐましいほどの尊いものを持つてゐる。それは神にもまして尊いものであるやうにすら思はれる。

白樺の林の中に瑠璃鳥に似た鳥の聲を聽いた。瑠璃よりはやや寂びた聲である。

曲折の山道を下つて谿川に出た時であつた。不圖かけすの聲かと思はれる聲を聽いた。

「猿だ！」と一人の男が叫んだ。

川をへだてて懸崖の上に一匹の猿を見出した。つづいて三匹五匹十匹の猿が木の根を傳ひ、枝に飛んで冬枯れの山を歩いてゐるのであつた。

あたたかな日には五六十匹の猿が谿川に下りて水を掬ひ飲むところを見出すことがあると、山の男は語つてゐた。

*

那須の原は走れども走れども櫟の林である。

日が暮れかかつて來た、空は曇つてゐた。

波狀形の起伏地は幾十里となく走つてゐる。ただ一畔の起伏地である。丘には櫟の林が枯れ、



低地にはわづかな耕作地や、草の中を走る細道を發見することもある。

人家も、人の影も滅多に見ることはない。たまたま丘の中程に北風を避けて炭燒く家がある。白い煙が低く枯れ草の上を這つてゐる。

氣をつけて見ればかしこの丘にも、ここの櫟林の蔭にも炭を燒く白い煙が纒綿として夕暮れの地に這つてゐる。煙の涯を想ふては旅愁さらに深きものを感ずる。

白河といふ聲を聽いた。薄暗いプラットフォームである。白河の關跡南×里といふやうな文字を薄闇の中に讀む。

昨夜に比べて今夜は空は曇つてゐる。たまたま月は雲を破つて荒寥たる冬枯れの野を照らすことがある。

汽車は走りに走る。蕭條たる水、蕭瑟たる原野のみである。何處かの町に汽車が停る。町は暗い。霧が町をつつんでゐる。

旅人は暗い窓を通して霧につつまれたる町を眺める。旅疲れした頭に暗い町が映つて來る。旅人は町の名も知らない。町は闇の中に吸ひ込まれてしまふ。旅人の頭からはその町の姿さへ消えてしまふ。

何時とはなしにまだ暗い町があらはれる。やがて消える。

何といふ町であらう？　時としてはプラットフォームに町の名を見出さうとつとめることもあ

る。やがてはそれだけの好奇心さへ枯れ果ててしまふ。硝子窓の前を物賣りの若い男たちが消えてゆく。不圖人を懐かしむ心がひらめく。

名取川をわたれば直ぐに仙臺である。川には月の影が動いてゐた。

仙臺に一泊して翌日の朝さらに北して平泉に行くことにした。

走つても走つても杉の木立と丘阜を前景としたる遠い山である。山はみな雪につつまれてゐる。尊いほどの雪の遠山である。

伊豆沼を通り過ぎるころから地はふたたび低い冬の山につつまれてしまふ。低い冬の山がふたたび展けたところに一の關がある。昔の關町であらう。北に負ふ山には城跡らしいものがある。一の關から平泉まで一畔の間北上川を右手にして野はひろがつてゐる。藤原氏三代榮耀の跡である。東稻山は北上川をへだてて雪空の下を走つてゐる。三百の坊、七堂伽藍の跡はただ冬枯れの草に埋まつてゐる。枯れ草の野の中にたまたま二三寸に伸びた麥の畑を見る。

一の關を出でて平泉に入る道のあたりに盤井川がある。恐らく昔の大木戸は盤井川のあたりに設けられたものであらう。祇園、王子、稻荷などと京の名はそのままに殘されてゐるが、今はただ霜にとざされた草の原ばかりである。

平泉の驛から中尊寺までの間は十三四丁もあらうか。松の並木の間を物賣る店などが並んで、僅かに田舍のちよつとした町らしい姿もある。



義經の館は中尊寺の手前二三丁の小山の上にある。

老杉の並木道には紅葉が散り布いてゐた。かつては三代の將軍等も義經主從も泉の三郎もその道を歩いたことであらう。胸毛の眞つ赤な、かけす程の鳥が群をなして松の間に鳴いてゐた。

北上川が東稻山と平泉の間を南へ流れてゐる。衣川は中尊寺の丘の下で北上川と結びついてゐる。老杉の下に佇立して日本の北の涯とも思はるる雪の山々を見る時「涙を落し侍りぬ」といふ芭蕉の心持ちもわかる。

『奥の細道』には「大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野と成て金鶏山のみ形を殘す。先高館にのぼれば北上川南部より流るる大河あり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入。」と誌してあるが今も地形は大體この通りである。秀衡時代には北上川はずつと東稻山に近く流れてゐたさうであるが、今は東稻山からはかなり離れて、義經の高館の丘の直下を流れてゐる。芭蕉が訪れたころは今日とたいてい同じあたりを流れてゐたのであらう。

さみだれの降のこしてや光堂
夏草やつはものどもが夢のあと

芭蕉のこの二句あるがゆゑに平泉の山河はさらにあはれである。

柿色の法衣を着た老僧が杖にすがり、靴下もなしに護謨靴を穿いて光堂の縁に憩うてゐるのを

見た。

雪が降つて來て辨天堂の前の枯れ葉をかすかに搖つてゐた。

今は冬枯れて夢の跡を思ふにはさらに切なるものがある。雪は靜かにその夢の草をさへ埋めてしまはうとしてゐる。

中尊寺の山を下りてふたたび元の道に出る。辨慶や龜井や鈴木などの墓が道のかたはらにある。わたくしは辨慶の墓だけを拜んだ。一本の松の根方に苔むした石が横たへられてあるばかりである。

二三丁歩いたところで道は登りになり、北上川の方へさらに一丁あまり歩いて冬枯れの山に入る。

畑には土を打つてゐる人たちがある。栞を洗つてゐた女に聲をかけて義經廟の扉を明けてもらうやうに賴んだ。女はもんぺを穿いてゐた。

爪先上りの道を歩いて雜木林の中へ入る。北上川は直下に流れてゐる。數十丈の崖である。老樹が繁つてゐる。その一番高いところに雨風にさらされた小宇がある。義經廟である。そこからは衣川も、北方の山々も何の遮ぎるものもなく見られる。義經の館の跡である。義經自刄の場所である。

栞を洗つてゐた女は大きな倉の鍵を携へて來た。そして廟の扉を明けてくれた。中には彩色を



施した甲冑姿の義經の像が拜まれた。若い美しい大將の姿である。

雪はますます降つて來た。北上川はそこの山の根で大きく一曲りして瀨をなしては南へ南へと流れてゐる。川には舟も見えず、人の影さへない。易水寒しの感がわく。

義經が死んだのは三十一であつたと思ふ。かれは愛敬さるべき大將であつた。

高館判官屋敷の跡から北すればはるかに衣川、琵琶の柵をへだてて泉三郎の城跡がある。冬枯れの草のみである。

わたくしは泉三郎も好きである。かれはまことに義に死することを知つてゐた陸奥の武人中の武人である。

北上川を南して今二三丁の麥の畑あたりに佐藤庄司の役宅があつたのであらう。かれも亦陸奥の武人らしき武人であつた。二子繼信、忠信は屋島と吉野で義經に代つて死んだ。（忠信はさらに京都まで逃れて京都で死んだと傳へられるが）庄司自身また義戰に殉じた。

平泉の山河悉く冬枯れの草につつまれてゐる。

昔も小さかしい人たちがゐたにちがひない。しかしそこにはなほ心の美しい人たちが生きてゐた。そして死んだ。

平泉の冬枯れの道を歩いてゐるとただ美しい過去の人間の心のみが胸を打つ。

雪が日暮れ方になつてますます降つて來た。

雪よ、七堂伽藍の跡を、美しかつた人たちの夢の跡を、ことごとく埋めてしまへ。
平泉はまことに美しい寂しい夢の跡である。

みちのくの草かれ〳〵に光堂



# 北陸の旅

五月二十四日。雨。

京阪の旅からかへつて來て中二日、旅の行李もそのままに朝八時上野を立つ。

大宮、鴻の巣、熊谷の驛々も雨のなかに見る。麥のみすくすくと伸びて、二三丁離れたるばかりの森も村も雨に煙りて旅人の心を誘ふ。

妙義の岩山から落ちてゐる瀧を霧のなかに見、さらに谿深く霧の間に間に川の漂ふを眺めるのは碓氷を越ゆる旅人にとりて情趣ふかきものである。

このあたりから谿に老鶯の聲を聽く。

碓氷の新綠の雨に濡れたるながめは恐らく秋の紅葉にもまさつてゐるであらう。汽車の窓をあけ放して氷のやうな山の霧を感ずる。

輕井澤に着いたころ雨が止んだ。輕井澤から沓掛の間は去年の夏毎日のやうに歩いたところである。汽車に沿うて懐かしい道を見出す。

沓掛の驛を汽車がすでに動き出してからであつた。星野溫泉の若主人がプラットフォームの砂利の上を飛んで追うて來るのを見た。

「氣の毒なことをした。」と思つたので、窓から首を出して「歸りに立ち寄ります。」といつたまま窓をしめた。

東京を立つ前に、わたくしは「北國の旅に出る序に或ひはちよつと立ち寄るかも知れませぬ。尤もいよいよ立ち寄るやうでしたら電報を打ちます。」といふ葉書を出して置いた。朝の間は雨が降つてゐたので、わたくしは沓掛に下りることを斷念して電報を打たなかつた。ところが沓掛の溫泉宿では朝からすでに三度自動車を出してステーションに來てゐたといふことを後で知つた。

汽車は追分驛にちかづいて行つた。わざわざステーションまで出迎へてくれたのをそのまま通り過ぎてしまふことが心苦しくてたまらなかつたので、「歸りに」とはいつたが、急に思ひ立つて追分に下りてしまつた。

霧のやうな雨がプラットフォームの砂利を濡らしてゐた。

わたくしは驛の人に「自動車か俥はないでせうか。」とたづねて見たが、その附近には一臺の自動車も俥もないといふことであつた。荷物さへなければ、里ばかりの道をあともどりして歩く



だけだと思つたが、行李があるのでそれもならず、「電話もない。」といふ。沓掛へかへる汽車を待つとなれば日が暮れてしまふ。

わたくしが困り切つてゐるのを見た驛の人たちは、鐵道電話をつかつて沓掛の驛からさらに溫泉場まで傳へてもらふことにしてくれた。

追分驛の人たちの親切で、わたくしは三十分ばかりの後には星野溫泉の若主人が運轉した自動車に乘ることができた。それにしてもわたくしは高原の小ひさな追分驛であたへられた驛の人々の親切さをしみじみとうれしく思ふ。

追分の町は沓掛の町よりもさらに寂びれた古宿である。くづれかけた倉の壁に沿うて山櫻がさかりである。八重はまだ蕾が堅い。

桃や杏子の花がさかりである。

落葉松の新芽はいかにも柔かである。かがやくといつたのでは感じが堅過ぎる。手を觸れたらつひえさうな柔かさである。

落葉松の森のなかには鳩が鳴き、せんだいむしくひが啼いてゐた。

去年の夏中わたくしたちの家の水を掬んでくれてゐた若い男が沓掛の町を歩いてゐるのを自動車のなかから見た。日が暮れかかつてゐたので先方は氣付かないで通りすぎてしまつた。淺間は一雲につつまれてゐて見えなかつた。

「お珍らしいでせう。」といつて宿の人が炬燵を持つて來てくれた。わたくしはいつたい炬燵きらひで、どんな寒い冬でも炬燵へはひつたことはない。しかし五月末の信濃の山の馳走だと思へばうれしくなつて、炬燵の上に膳を置いて箸を持ちながら瀑の音を聞く。水鶏はまだ鳴かぬ。

＊

五月二十五日。晴。山はまだすつかり冬枯れの姿である。淺間はすつかり晴れてゐる。雪がまだ殘つてゐる。

東の山にも西の山にも杜鵑が啼き、鳩が鳴く。八ヶ嶽の姿が尊いほどに落葉松の若葉を越して拜まれる。

沓掛からの汽車の中でわたくしは一人の若い人に逢つた。「母をつれて善光寺へゆくのです。」といふ。わたくしは母といふものを持つてゐるその旅人をうらやましいと思つた。

昨日追分驛で電話をかけてくれた若い驛の人を、小諸のプラットフォームで見た。わたくしたちは窓越しに笑ひながら語つた。

「今日はここの驛員が一人風を引いたので手傳ひにやつて來たんです。」といつてゐた。

「御機嫌よう！」わたくしたちは舊知のやうな懐しい言葉を交はしつつ別れた。

千曲川は青葉の谿谷を穿ち、古城のほとりをめぐり悠々として善光寺平に入り犀川と合ふ。川中島のあたりただ柿の葉がかがやき、桑の葉がかがやく。



信濃の人たちは峻しい岩山の上の上までも桑畑を切り拓いてゐる。麓の赤松の林のなかによき寺を見、よき墓を見る。

母をつれた幸福な若い旅人は默禮して長野驛で下りて行つた。

處々にアカシヤの白い雪のやうな花を見る。或る小學校の窓はアカシヤの花につつまれてゐた。授業が始まつてゐるのであらう。校庭の畫はただアカシヤの花のみ薫つてゐた。

一茶の故鄕柏原ではながいこと汽車がとまづてゐた。曾遊の地である。丸山の丘、寺、緩勾配の北國街道……わたくしの記憶にのこされてゐるままである。雨上りの川のほとりには子供たちが釣を垂れてゐた。一茶の子供時代を思ふ。

柏原の町はづれに小學校がある。子供たちが多勢町の方へかへつてゆく。どの子が一茶に似たか、たづねて見たいやうな氣もする。

妙高も、黑姫も、飯綱もまだ眞冬である。雪は麓ちかくまで眞白である。

道は越後路にかかる。白樺の新芽とともに幹の雪白の色がいかにも柔かい感じをあたへる。あたかも搾り立ての牛乳といつた感じである。どこの驛であつたか國境ちかきあたりに林檎の花の咲いてゐるのを見た。

田口、關山を越ゆるころはこの冬のあの恐ろしい雪の噂を思ひ出す。そこには恐ろしい冬から救はれた人々がぼんやりと道のわきに立つて汽車をながめてゐた

越後に入れば人々も家畜も、雪から雪の間の比較的短い太陽の光りを惜しむもののやうに日が暮るるまで休む暇もなきまでに、雪をいただいた山を背にして土を耕してゐる。日本海は煙つて見えなかつた。

直江津を出て汽車は日本海に沿うて走る。間もなく濱の鐵道に沿うて幾里もの間防雪林がつづいてゐるのも南の海岸を見馴れてゐる者には珍らしい。到るところの濱の松林は冬の濱の潮風に赤く焦げてゐる。凄まじい吹雪にとざされた北の國の人たちの冬の生活を想ふ。

鯨波あたりの濱の景色は旅人の疲れたる眼にはうれしいものである。ただ山の木の、雪に傷められ、日本海の雲の低迷するが何となくわびしい。山にはにはとこと桐の花が多い。

日暮れて長岡に入る。豫想外に賑かな町である。暗い空の下に明るい町を見出すのはかへつてわびしい旅の思ひを感ずる。

*

二十六日。晴。長岡の驛を南に昔の士族町らしいあたりを通りぬくれば一面の田である。道は一直線に山の方へ走る。

悠久山といふ。藩主牧野氏の廟所。今は市の遊園地である。老杉古松蓊鬱たる靜境。彌彦山、出雲崎等を丘に立ちて眺める。なつかしき名である。長岡の平原をへだてて山は思ふことあるがごとく煙る。



河合繼之助や祖國の難に殉じた長岡藩の少年勇士たちの物語りをあはれに聽く。

「雪はこの櫻山の櫻を埋めてしまひますよ。こういらの木はみなスキイの下になつてしまふのですよ。」と案内のM氏は語つてゐた。

このあたりの岡といふ岡、畑といふ畑には桐の花が咲いてゐる。

昨日直江津から長岡への途中で、わたくしは廣い川のほとりに一つの小ひさな町を見出した。町のうしろには繁つた小山があり、小山にも川のほとりにも桐の花が一面に咲いてゐたことを思ひ出した。日が暮れかかつてゐた桐の花に暮れてゆく北國の町は何となくさびしいものである。

長岡を出ると間もなく野はひらけて一面の耕作地である。葦があり、沼があり、苗を積んだ小舟が泛かぶ。

遠い山にはまだ雪がつもつてゐる。

「すこし山にはひると、まだ里でも一尺ぐらゐ雪がつもつてゐて、田が植ゑられない。」といふ話をも聞いた。

新潟の驛に下りて萬代橋をわたる。信濃川の水は濁つてゐる。いかにも大きな川である。日本の川としては大まか過ぎるほど大まかな感じをあたへる。廣い河口にはすでに日本海の暗い空が低く垂れてゐて、凭いほどに荒海の波頭がかがやいては消える。

葦の間を白帆が走つてゐる。汽船も泛かんでゐる。まことに長い木橋である。雨の日に廣重に

描かすべき橋である。

二三年後には川の幅は狭められ、鐵橋に架け替へられるといふことであるが、惜しいやうな氣もする。

町の人にみちびかれて公園を見、信濃川に沿うて歩む。漫々たる水は嬉しきものである。

新潟は水の町である。縱横に劃られたる幾條の堀割がある。新潟は柳の町である。いたるところ嫋々たる柳絲が輕風にもてあそばれてゐる。

海に近く花街がある。ずつと以前の博多の柳町といつた感じの町である。そこを通りぬけ間もなく濱に出る。小高い砂丘である。新潟の町、信濃川、さらに遠く愁然たる出羽境の山を眺める。

日本海の波は數十歩の下に荒れてゐる。いかにも美しい海の色である。

佐渡の島が波の上に夢のやうに泛かんでゐる。

『奥の細道』に記された鼠ケ關といふのはどこいらであらう。北方のはるかなる雲の下の山をそれと想像しつつ芭蕉の旅を偲ぶ。

芭蕉が出羽の方から鼠ケ關を越えて「北陸の雲に望む」だころはまだ新潟は名もないただの船着き場であつたであらう。

越中國「一ふりの關」で一つ家に寢たといふ女のことを書くにも芭蕉は「越後國新潟と云所の遊女なりし」としてゐる。



夜、町の劇場で、講演會のかへりを宿まで歩く。「雪のなかにとざされてゐることが多いので春になつて雪が解けたとなるとみんな戸外へ戸外へ飛び出すのです。」と語つた人があつたが、いかにもさうらしい。

東京の緣日を想はせるほどの夜店が柳の並木の下で開かれてゐる。若い人たちが幸福さうに街をうづめて春の夜を樂しんでゐる。植木を賣る男たちが殊に多い。

北國の夜の空は星明りも暗い。

＊

二十七日。朝。六時の汽車で新潟を立つ。

直江津で汽車を乘りかゆれば、道は屢々左手に嶮しい山を控へ、右手は斷崖に沿うて辛うじて道一筋を通はすほどの難所にかかる。波はつねに崖下を洗つてゐる。

漁村から漁村へとつづく。わたくしは糸魚川のやや手前で見た一つの漁村を今にもはつきりと記憶してゐる。その漁村全體が嶮々たる岩山に獅嚙みついた一塊の集團となつてゐる形である。だから軒から軒へ並んでゐるやうな平地の漁村とはちがつて、一つの屋根がそのうしろの一段高いところにある家の土間につゞくといつた恰好である。日本海の暗い波に臨んだ嶮しい岩山を攀づべき石磴のかはりに、段々と重ねて漁家を並べ立てたといふ形である。暗い日本海を背景に文字通りに林のやうに網が干されてゐる。

その漁村全體をつつんでゐる色彩の寂しさは旅人の心を搏つ。家の羽目板、庇、こけら葺きの屋根、柱すべてが、恐らく日本海の潮にさらされた關係からであらうが、あたかも死人の家を聯想させる灰色につつまれてゐる。

ややすすけた、白色といふのでもない、まつたくの灰色でもない、無氣味なほどのわびしい色である。

もしこの世界のどこかに死の町、死の海濱、死の空といふものがあるとしたら、恐らくあの北の海の漁村を聯想させるであらう。

死の漁村では人々は濱に出て網を繕つてゐた。漁夫の子供たちが三人濱の岩の上で溜り水を掻い出してゐた。

裏の山には淡紅のにはとこの花が咲いてゐた。

わたくしは糸魚川で汽車を下りて相馬御風氏を訪ねることにした。

*

御風氏の家は驛で聞くとすぐわかつた。濱から捕つて來たばかりの魚を糶つてゐる市場の聲がすぐちかくから響いて來た。

『還元錄』一冊を遺して糸魚川に歸つて行つた氏の當時の心持をわたくしははじめてしみじみと聽いた。わたくしたちの話は殆んど島村抱月先生のことに終始した。あのやさしい、寂しい抱



月先生の眼。あの佗しいスキートな抱月先生の聲がわたくしの頭によみがへつて來るのであつた。

わたくしはさらに冬の恐ろしい雪の話を聞いた。まる一週間晝となく夜となく窓を埋め、屋根を埋めた恐ろしい雪のなかに生死の境に直面してゐた人たちの生活について聽いた。一月ばかり前までは深い雪のなかにとざされてゐたであらう庭の木が太陽のかがやきにあこがれて伸びに伸びてゐるのを見た。雪の解けた濱に嬉戯してゐる雪國の子供たちとともに涙ぐましい心を喚ぶ。

北陸街道は糸魚川から西に走つて、海から出でてまた海に入る形になつてゐる。古い町を通り過ぎて切り岸のやうに突つ立つた海岸をかすかに絲のやうに走つてはやがて越中境の山に入り、潮煙のなかにかくれてゆく北陸の道は秋のごとくわびしい。

川のほとりにアカシヤの花が咲いてゐた。雪の山がすぐ町のうしろに聳えてゐた。

その日はまつたく不思議な日であつた。

わたくしは糸魚川のステーションで三十年振りに小學時代の友人にめぐり逢つた。

友人は黒部川の水電につとめてゐたのであつた。わたくしはかつてその友人と逢つて見たいために幾度か心當りの人たちに手紙を出して見たが、つひに目的を果さなかつたことがあつた。それが偶然にも北國の小驛でめぐり逢ふといふことはいかにも不思議な因緣である。偶然の出來事だといつてしまへばそれまでのことであるが、實際人生には人間の智慧以上のものがある。友人のことを考へながら幾つかのトンネルをくぐり、幾つかの漁村を過ぐ。

親不知は鑿のごとき懸崖の直ちに日本海の荒浪のなかに落ちなんとしてゐるところにある。日本アルプスの尾根が忽然として北の荒海に洗はれたといふ形をなしてゐる。そこにはつひに一條の徑をも切り拓かるべきゆるやかな地積をも見出すことはできない。隧道を出でて青き海を見出す刹那にさらに次の隧道に入る。白帆の點々たるを白雲の下に望む。

親不知を通り過ぎ白砂やや深く海に入るやうな地勢の村を見出す。青く繁つた山に抱かれた寒村である。山は海に突き出て岬をなしてゐる。岬には三四段の畑が耕されてあり、枝振りの面白い赤松が潮風を浴びてゐる。北陸街道はその繁つた青い山をめぐつて岬を横切りやがて親不知の嶮にかかつてゐる。この青い山の裾をめぐる街道を挾んでたえだえに軒をならべてゐる寒村が市振の關である。芭蕉の「一家に遊女もねたり萩と月」の跡である。山には山藤かかり、畑には桐の花が咲いてゐた。

さらに小ひさな驛一つ二つ過ぎて間もなく汽車は黒部川にかかる。雪の山のながめはますます展がつて來る。皚々たる北アルプスの雪の山脈は南の半天を劃つてそびゆる。

山はやや遠ざかり、平野がひらけて來る。海もまたややへだたりて、松の並木のいたゞきを越えて日本海の波をながめる樂うになる。

濱千鳥が群をなして早苗田の上を飛んでゐる。

越中あたりの風習であらう。ちやうど田植ころであつたが、かしこにもここにも若い娘たちが



十人くらゐづつ一かたまりになつて田を植ゑてゐる姿がまことに美しい。赤い襷を懸け、赤い模様の帶を締め、友禪模様の眞つ赤な襦袢の裾をかかげてゐる。田を植ゑるころになれば若い娘や花嫁たちはわざわざ縮緬を裁つて田植の衣裳をこしらへるといふ話を聽いた。

長い間雪と荒海の音に脅かされつづけてゐる北の國の人たちにとつては、夏の初めの早苗取りといふことはいかにもなつかしい年中行事の一つなのであらう。すくなくとも最も神聖な行事の一つであるにちがひない。

美しい早苗取りの女たちの直ぐ上の空を低く千鳥は鳴きつれてゐる。

富山の驛に下り、長い橋をわたつて舊城内の講演會場へゆく。城の石垣のあたりには散つたばかりの櫻が繁つてゐる。

ふたたび長い橋をわたつて金澤へ向ふ。

神通川は幅の廣い、水量のゆたかな川である。水もきはめて美しい。神通川をへだてて富山の町を見るころは日はすでに暮れてしまつた。

窓をあけて眺むれば、ただ黝い山のみ。旅の疲れを覺ゆ。

くりから峠を見ようと思つて幾度か窓の外をながめたが、窓に迫つた山は暗くて山の形も見わけがたい。星のみまたたく。

金澤の町に入つてはじめて北國の都らしい心を見出す。

二十八日。晴。兼六公園の菖蒲はややまだ早いが、盛りのころを偲ぶ。河北潟を東に望み、西に雪の山を眺む。

「あかあかと日はつれなくも秋の風」の碑は老楓の蔭に苔むす。

＊

二十九日。金澤より二里犀川の河口に金石港がある。錢屋五兵衛の宅趾をとどむ。金澤の町を出外れたあたりから金石まで松の並木がつづく。

「金石から金澤のお城まで小判を敷きつめるから罪をゆるしてもらひたい。」と錢屋五兵衛がいつたと傳へられてゐる道であらう。道の兩側には梨の花が咲いてゐる。

松並木から別れて田圃の中を五六丁も行つたところに尼寺がある。案内を乞ふと六十ばかりの尼さんが出て來て堂のなかに導いてくれた。五兵衛の木像がある。上下姿に小刀を帶してゐる。紋は橘をつけてゐる。

當時十八歳であつた小間使某が五兵衛一家の人々の冥福を祈るために世を捨てた尼寺である。三四年前、九十四歳で世を去つたといふことであつた。

金石の町に入つて最初要藏が貰はれてゐたといふ家の孫にあたる人に逢つて見た。要藏といふ男は五兵衛の魂をそつくり受け繼いだ豪膽者であつた。



五兵衛の墓は最初金澤にあつたものを後乞うて金石の墓に合葬したといふことである。いかにも質素なものである。これがあの剛腹にして富王侯を凌いだ錢五の墓であるかと驚かるるほどのものである。

わたくしは金石の港にも行つて見た。年々犀川の河口は淺くなるばかりで、今では少し大きな和船すら荷役をするに困難なくらゐである。

岸にもやはれた船からは七八人の男たちが木材を荷揚げしてゐた。

繪を書いてゐる一人の若い男をめぐつて五六人の男たちが立つてゐた。すぐその傍には一人の大きな男が壞れかけた椅子に凭りかかつたまま眠つてゐた。ゴルキイの『夜の宿』にでも出て來さうな姿の男である。

それらの男たちや、河口の船の上を白い翹の海鳥の群が靜かに飛んでゐた。

河北潟へゆく途中わたくしたちは砂丘の一本松を見た。碧い海からは約一二丁も離れた場所である。かなり大きな松である。要藏が磔せられた松である。六七人の番頭たちはその松の下で打首になつたのである。

あたり一面に眞つ白な砂丘を掩ふてアカシヤの花が咲いてゐた。まことに美しい香が濱をこめて薫つてゐた。

河北潟には葦が繁つてゐた。

金澤の町は落ちついてゐる。金澤の人々の朴々としてホスピタルな心をうれしく思ふ。宿を出て自動車が見えなくなつた時、宿の女たちはさらに町の角を走つて來て別れを惜しんでくれた。

*

福井の町は舊城の石垣と、その美しい城をめぐる濠の水をうれしいと思つてながめた。城をめぐる水を埋めることがどこの町でも行はれてゐるやうであるが、まことに惜しいことである。

一つの町の美がその町の人々の魂をどれほど美しくしてゆくかといふことを忘れたくない。旅人にとつて一つの美しい城を見出すことはどれほどのなぐさめであるか知れない。どれほどの深いなつかしさをその町に對して抱かせるものであるか知れない。

ただ一本の木、一莖の草もわれわれはみだりにその町から破壞してはならぬ。

福井の町は北の庄の哀史を想ふ時そぞろに旅人の心を打つ。

暮れゆく雪の山のいただきにはなほかすかなる夕燒の空がためらうてゐた。

旅人は靜かに暮れゆく山に思ひを寄す。

あはれなり雪はろはろと越の春



# 高野山遍路

二十幾年振りでわたくしは天下茶屋を通り過ぎてゐた。

秋も末ちかく、草の葉は枯れ、ポプラの葉は黃ばんでゐた。草紅葉の中には白い野羊がきよとんとして電車をながめてゐた。

わたくしの頭に描かれてゐた天下茶屋はどこにもなかつた。わたくしはそれらしい草の丘を見た。葱畑を見た。しかしそのころの爪先上りの赭土道もなく、背の低い櫟の並木もなかつた。

わたくしはテニスンの「イン・メモリアム」の中で、あの詩人と友人アーサー・ハラムがかつて丘の上の道を歩いたくだりを讀むごとに、天下茶屋のあのころの赭土道を聯想したものであつた。

低い丘であつた。わたくしは雲雀の聲を聞きながら堺から大阪への歸り路に天下茶屋を通つた

のであつた。

麥畑もあつたであらう。桃畑もあつたであらうが、わたくしはただ雲雀の聲と、楪の木と、丘から丘へと走つてゐた赭土道だけを記憶してゐる。

一人ぼつちで大阪の何とかいふ寺町に住んでゐたわたくしは、やはり一人ぼつちで春の暮れ方を大阪へ歸つて行つたのであつた。

あのころは高津神社も桃畑の眞ん中にあつた。茶臼山はすぐに麥畑につづいてゐた。わたくしは暇さへあれば麥畑の中を歩いてゐた。

十六か七の一番感傷的な時代であつただけにあのころのことを思ひ出すと、自分自身の生活がどこからどこまでも浪漫的な蒼白い月の光りにでもつつまれてゐるやうである。

十八世紀から十九世紀初めにかけて英吉利の浪漫派の詩人たちの詩にはよく pale といふ文字が見出されるが、まつたく、浪漫的の色はいつも pale である。

そこには未知の世界に對するあこがれがある。そこには手に觸れられず、しかも手に觸れらるるものよりはもつと確かな、もつと悠久な、もつと蠱惑的な或るものが潜んでゐる。何となしに深い影をもつてゐる。寂しくはあるが、胸をときめかす或るものがある。頼りなくはあるが、頼らないではをれぬやうな人生の深所が直ぐそこいらに見出されるやうな氣がする。翹望がわく。

あのころ見た天下茶屋には、たしかにまだ浪漫派の詩人の詩に見るやうな牧歌的な情景が漂う



てゐた。わたくしはただ十軒にも足らぬ家を見た。見わたすかぎりただ麥の畑であり、赭土道であつた。

あの春であつた。わたくしは奈良からの歸りに法隆寺を通つて濱町の方へ行つた。その時も日暮れころであつた。わたくしは或る墓場を見た。墓場は麥畑につつまれてゐた。墓場のうしろには枯れ木があつて、枝には三羽の鴉がとまつてゐた。一人の農夫が日の落ちるのも知らぬげに麥畑を打つてゐた。

「あの男もやがてあの墓場に眠らなければならないのだ。」わたくしは少年らしい人生についての哀愁を感じたことがあつた。

あの時の印象だけは今日までどうしても忘れることが出來ぬ。

チエホフ流に考ふれば人間は生まれて、生きて、苦しみ、戀をして、やがて頭を壁に叩きつけて死んでゆくばかりであるが、大和の麥畑の男たちは生きて、麥畑を打つて、働いて、やがて麥畑から三尺と離れぬ墓の下へ眠るばかりである。

麥が芽生え、伸びる、熟れる。人は黑い麥畑の土を打つ。太陽は落ちる。人は死ぬ。

太陽は同じ麥畑の中に、幾萬年の間人類を見たことであらう。

一つの太陽は上り、落ちる。幾萬人の男たちが落日をながめつつ麥を打つたことであらう。そして同じ土の上に死んだことであらう。

葦の中にはたくさんの蟹がゐる。そこには無數な蟹の穴がある。蟹は穴を出ては砂の上で兩手を動かしてゐる。その姿があたかも土を打つ人間のやうに見える。葉摺れの音がしても蟹は驚いて穴にかくれる。そして間もなくふたたび砂の上に出て來ては土を打つ。

麥畑を打つ人間は永遠に絶對の人間であるやうにも思はれる。父、子、孫……かれ等は生まれては土を打つ。生きては土を打つ。かれ等は人生について考へる。かれ等は哲學を持ち、藝術を持つ。しかしすべてはかれ等の頭の中に描かれた visions ではないか。かれ等は時が來れば穴にかくれる蟹のごとく寂然として土に眠る、何ものをも持たず。蟹の生活と人間の生活と、そこに何のけじめがあらう。その儚さに於いて、頼りなさに於いて。

*

わたくしは南へ南へと走つてゐた。

生駒も、金剛も、葛城も穣々たる稲田をへだてて秋の半空を劃つてゐた。稲は熟れ、薫り、刈られてゐた。

そこの稲村にもここの蘋草のほとりにも「わびしき刈り手」たちが枯れ草のごとく靜かに働いてゐた。

大和川をわたる時、わたくしはそこの平原の眞ん中に窯を焚き、土をこね、釉をかけて默思しつつある人のことを思ひ出した。窯に飽けば大和川の岸に綸を垂れ、世を忘れてしまふかれの寂



しい男らしい顔が。

薄暗い窯際で白い土をこねてゐる陶工の手は尊くもあるが、さびしいものでもある。

かれが指端を動かすごとに白い柩を聯想させるやうなほの白い兎が作られ、人間が作られ、小鳥が作られる。ぴたぴたとかすかな水音と、こねられた土の音が土間にひびく。

白い土の飛沫によごされてしまつた硝子窓の際には、作られたばかりの兎が、人間が、小鳥が立てかけられてある。柔かな秋の日はかれ等を照らす。

窯の外の無花果の下にも筵の上に並べられたほの白い人間があり、小鳥があり、獣がある。小壺がある。飾陶板がある。

まだ窯の火を浴びぬ人間や、小鳥や、小壺や、獣や八角壺や飾陶板は一様にせまい筵の上の靜かな未知の世界を樂しんでゐるやうだ。まつたくそこではほの白い土細工の人間も生き、小鳥も生き、飾陶板も生きてゐる。そこは童話の世界よりももつと靜かな、もつと遠い世界である。

見よ、無花果の下の筵の上の土の人間の影を。影は五寸にも足らぬ。しかし何といふ遠い世界の影であらう。

見よ一枚の小皿の影を。影は三寸にも足らぬ。しかし何といふ尊い、靜かな遠い世界の影であらう。ほの白い陶土のなかから洩れて來る遠い世界のささやき。

わたくしの眼には、それ等の遠い世界の影に見入つてゐるであらう大和の寂しい男らしいかれ

の俤が映つて來た。

くるくると轆轤臺の上に廻る白い陶土を見るのはさびしいものである。

土間には遠い過去の日から忘れられてゐる冷たい影が漂うてゐる。

くるくると廻るごとにほの白い柩のやうな陶土は、土間の冷たい影を土の中に抱き容れてはいろいろな形にかはつてゆく。

くるくると廻るごとにほの白い柩のやうな陶土は、轆轤を踏んでゐる陶工のいろいろなわびしい思ひをも抱き容れてはいろいろな形にかはつてゆく。

かれが無花果の蔭の愛子たちを思ふ時かれの小壺にはかれの瞳の微笑がそのままに練りこまれることであらう。

れが大和川の釣りを思ふ時、かれの手の中の飾壺には明るい太陽とわびしいかれのユウモアとが織り込まれるであらう。

くるくるくるくると轆轤は廻る。

わびしけれどわびしけれど人は轆轤を踏み、土をこねる。

秋の影が、秋の寒さが、秋のわびしさがほの白い柩のやうな土の中に練りこまれる。

石を鐫む者、木を刻む者、土を練る者、

秋はわびしい。けれどもかれ等はひたすらに石を鐫み、木を刻み、土を練りて秋のわびしさを



こめる。

ミケランゼロの石はミケランゼロの秋のわびしさのみをこめたものではないか。ダ・ヴインチのカンヴヤスはダ・ヴインチの秋のわびしさのみをこめたものではないか。

無花果の下の土の人間、小壺、八角壺を秋の日が照らしてゐることであらう。

わびしさを土の人間に盛り、わびしさを小壺に盛り、わびしさを八角壺に盛り、陶工等はくるくると轆轤を廻す。

*

攝津から河内へ、ここいらの平原には池が多い。池には菱のやうな藻草が多い。わたくしは菱の白い可憐な花を愛する。今は菱の葉はやや紅葉し、堅い實を結んでゐるころである。

菱の葉を押しわけて釣りを垂れてゐる人もある。赤い浮きが池の靜寂を一つにこめてゐる。そこにも秋の空が落ちてゐる。

千早口、觀心寺、ほととぎすの名所などといふ小ひさな山里の驛々を過ぎるころは、すでに道は坦々たる平原を過ぎて葛城の山近く、美しい松山や、小川の多い山地にかかる。

山はさして高いといふのではない、さして暗いほど茂つてゐるといふのでもない。一口にいへば懐しまるる山である。小山の群である。柔かな小山と小山の迫つたところに碧珠のやうな谿川が流れてゐる。川を挾んで行儀よく石垣を築き上げた邸がある。白い土塀がある。白い倉がある。

ゆるやかな勾配の屋根を持つた家がある。紀州近い秋の山はいかにも小春日和の靜かなあたたかさを心ゆくまでに樂しんでゐる。

一つ一つの谿は廣からず、狹からず、四十戸或ひは五十戸くらゐの人家を容るるに足るほどの擴かりを持つてゐる。

谿を出ればまた谿があり、そこにはふたたび同じほどの靜かな村里を見出す。旅人は谿から谿へとつつましやかな一つ一つの村里を通り過ぎてゆかねばならぬ。

赤松と脩竹の林を背景にして村は谿川に臨んでゐる。そこには熟れたる稻田が展けてゐる。熟れたる柿の實が屋根と、白い倉の壁に秋の色を反映してゐる。紅葉した葛城の山脈が赤い柿や、青い脩竹の間に見える。わたくしは不圖逍遙先生の『役の行者』の舞臺面を思ひ出した。柿の下で連枷を打つ娘たちや、媼たちの姿は見えぬが。

空と空山と秋とのみが紀州境の村々を支配してゐる。

紀伊見峠には一人の友人がゐる。一度別れたきり七八年も逢つたことがない。紀伊見峠といへばどんなに嶮しい山かと想像してゐたが、わたくしの想像はすつかり裏切られてしまつた。

水の美しい、やさしい山である。あたたかな小春日和の日の光りが山をも稻村をも抱いてゐる。

河内を經て高野や、粉川寺や紀州の札所々々をめぐる遍路たちが今もなほ紀伊見峠を越えるで



あらう。

千年の昔から日となく夜となく遍路たちがあの山の道を越えつづけてゐるのだと思ふと、何の奇もない山であるがかぎりなく尊いやうに拜まれる。

本來無東西　何處在南北

遍路の言葉である。何といふあはれな、何といふ尊いあきらめであらう。

東はわたしのものであり
西はわたしのものである

ホイットマンの言葉である。

西ひがしあはれさおなじ秋の風

芭蕉の言葉である。何といふ尊い言葉であらう。

わたくしは峠の友人の家を遠い山の上に思ひつつ紀伊へ入つた。

*

紀伊見峠を越ゆれば山は展けて紀の川の秋の平原が横たはつてゐる。

高野の山、吉野の山とただ指呼の間に連なつてゐる。

紀の州の水を横ぎつて渡り鳥の群が葛城の方へ飛んで行つた。

紀伊から葛城を越えて和泉、河内へ入る山道が幾條となく葛城の南面を縫うていただきに走つてゐるのを見る。

高野口　妙寺、名手市場、粉川などの町々が紀の川に沿うてわづかに黒い屋根だけを熟れ切つた稲田の上に見せてゐる。そしてそれ等の町々からはあたかも天に向つて手を伸ばすもののやうに一筋づつの道が葛城の嶺まで、羊腸として走り登つてゐる。

幾筋もの峠道が一樣に午後の日の光りを浴びて並んでゐるのを一目に見た。道は煙つてゐる。

遠い山を見るのは儚いものである。遠い山に入る道を見るのはさらに儚いものである。

東西に流るる紀の川を中心にして、兩岸の高い山を貫いて南北に幾條ともなく峠道が走つてゐる。その一つ一つの峠道に家があり、寺があり、霧がこめてゐる。秋の日が照つてゐる。

叡山に登つた日わたくしは近代の機械文明のために破壞されてしまつた叡山を悲しまずにはをれなかつたが、高野に登つてまたわたくしは同じ悲しみを覺えた。來年になれば電車はさらに深くあの處女林を伐り倒して、殺風景な無遠慮な見物客たちを運ぶことになるといふことであつた。

わたくしは或る美しい川のほとりで、その新らしい線路のための地鎭祭を行つてゐる人たちを見た。わたくしは何といつていいか言葉を知らない。

歩一歩紀の川の展望がひらけ、紀の川沿ひの町々が紅葉の窓をへだてて視野の間に取り容れられて來るのであつた。

新道のところどころに於いてたまたま舊道の一部分を見出すことがある。昔の道はその頃たれたる一面を露出してゐるのみで、險しい山道と頼りない峡谷とを聯想させるのみである。

それ等の舊道をたどつて行つたであらう西行や、龜口大道や、鎧塚や、秀次や、さらに芭蕉や、わたくしの頭にはいろいろな人々の俤が描かれて來た。

わたくしの前後になつて歩く夫婦連れの遍路を見た。

不動堂の前でやすんでゐた時、夫婦連れの遍路は默默しながら通り過ぎてしまつた。

「恐らく子を失つた悲しみに耐へないで二人きりで歩いてゐるのであるかも知れない！」

わたくしは笠を摩す檜の並木の下にかくれてゆく二人の遍路を見送りながらさう思つた。かれ等の顏は柔和であつた。寂しかつた。

奥の院へ通ふ兩側の大杉の木立の中の墓場に於いてわたくしは光秀の墓と三成の墓とを一番印象深く拜んだ。日は暮れかかつてゐた。苔は暗かつた。

二三日前京都に行つて、京の島邊山からお俊傳兵衛のあの小ひさな墓を取りのぞいたら、どんなにか島邊山がつまらなくなるか知れないと思つたわたくしは、高野へ來て、やはり同じやうな

ことを感じないわけにゆかなかつた。光秀のための、三成のための供養塔あるがために高野のあの杉の中の墓場が、どれだけ美しい人間の心を語つてゐるか知れない。

伊賀上野に蓑蟲庵をたづね「今宵たれ吉野の月も十六里」の句を味ひえたと思つたわたくしは高野の墓場に入つてはじめてまた「父母のしきりに戀しきじの聲」を味ひえたと思つた。

亡くなつた不運な父と母のためにわたくしは小ひさな墓を杉の根方に遺したいとも思つた。

「今年の夏、夜の八時ごろわたくしは奥の院の前の橋の上で佛法僧の鳴く音を聽きました。二羽ゐたやうです。一羽が佛法と啼くと、他の一羽がそれに應じて僧と啼くのでした。」案内の少年はこんなことを語りながら、甃の上を高い下駄の音をさせて行つた。

*

夜の山は死のやうに靜かであつた。

雨催ひの空には雲がかかつてゐたので、たまにしか星を見ることはできなかつた。

わたくしの部屋は池に臨んだ一番端の茶室作りの離れであつた。廊下には水屋もあり、さらに廊下をへだてて爐も切つてあつた。

わたくしは若い坊さんに案内されて長い廊下や、暗い、廣い庫裡を通り過ぎて湯殿へはひつて行つた。湯殿の中は暗かつた。年老いた坊さんがひとりわたくしより先に湯に浸つてゐた。

「今晩は。」とわたくしは聲をかけた。



「寒いですなあ。」坊さんの聲が湯氣の中に滅えて行つた。

どこかで砧を打つ聲が聞えた。坊の妻であらうか。砧の打ち方はかなり急調であつた。

「いつもこんなですか。」

「いつもよりあたたかいくらゐです。」

「さうですかなあ。」

「もう今年になつて三度氷が張りましたよ。」

「すゐぶんお寒いのですなあ。」

「今日山にあがる途中で紅葉をごらんでしたか。」

「はい、實にいい紅葉でした。」

「もういいでせうなあ……お先へ……」坊さんは行つてしまつた。

わたくしは若い坊さんが持つて來てくれた湯上りの上にどてらを着た。眞つ白な木綿の帶がいかにもお寺さんらしくて可笑しかつた。

部屋にはお膳が運ばれてゐた。

酒もつけてあつた。

わたくしは久し振りで酒が飲んで見たくなつたので遠慮なしに盃をかかへた。

久し振りで酒を飲んでじつと眼をつむつてゐるといろいろなことが思ひ出さるるのであつた。

わたくしは夜具をかむつて寢てしまつた。

廣い堂に響いてかすかな柝の音が聞えて來た。

*

わたくしは二三度眠をさましては、暗い堂にひびく柝の音を聽いた。そしてふたたび眠りに陷ちた。

板庇を打つ雨の音も聽いた。

本堂の方から鐘の聲が響いて來た。

わたくしは起きて顏を洗つた。

戸外はまだ眞つ暗であつた。筧の水は氷のやうに冷たかつた。顏のシヤボンを落すために、わたくしは幾度か自分の指先をごしごしとこすつてあたためては水を手に掬んだ。

わたくしは朝のお勤めに坐つた。

須彌壇の菊をめぐつて燭燭の火が漂うてゐた。

朝のお勤めが終つたころ夜が明けて來た。

わたくしはその日高野を下つた。

女人堂の前の黑い門の前まで二人の友達が送つてくれた。一人は墨染の法衣をまとうて黑い門の前に立つてゐた。



山を下りつつわたくしは幾度か振りかへつて見た。黑い法衣をまとうた友の姿がいつまでも見えた。

「送られつおくりつ果は木曾の秋」の句を想ひつつ山を下るほどに幾曲りしてつひに二人の影は見えずなつた。

*

わたくしは百日餘を旅に送つて東京の家にかへつて來た。

七月の半ばには長良川に、七月の末には長崎に、八月の初めは伊豆に、九月の末までは信濃に、十月は比叡に登り、京に遊び、高野に登つた。

玄關には淺間に登つた折の杖や、榛名や六里ヶ原の草の中に寢たをりの糸立がそのまま壁に立てかけてある。高野を下りて來たばかりの靴はまだそのままに土にまみれてゐる。

わたくしは地圖をひろげてはまた旅を思つてゐる。二三日後にはふたたび信濃からさらに北の國へ旅立ちたいと思つてゐる。

芭蕉は旅の魔にとりつかれたといつた。わたくしはそれほどにも思はぬが、東京へ歸つて來るとまた直ぐ旅を思ふ。

無心にして岫を出る雲のやうに、旅の山を越え、草原を横切り、雨を憂ひ、日暮れの道をなやむ姿を描いただけでも胸はときめく。

二三日來、狹い庭に鶯が來て囀鳴きをしてゐる。

四十雀、頰白が來て鳴いてゐる。

信濃の落葉松の林の中で語つた美濃の男はわたくしを待つてゐるであらう。

かれは鳥の鳴き聲を聽き分けることが上手であつた。

「チーン・ツーケー・ジヤカジヤカ……これが四十雀の鳴き聲ですよ。」かれは一つ一つの鳥の鳴き聲を教へてくれた。

かれはかけすの聲、みやまどりの聲、頰白の聲と一つ一つを教へてくれた。

「冬の初めにはまた山へ來るよ。」とわたくしはかれに約束した。

わたくしはまだかれの名を知らない。しかしかれの顏は、かれの聲は、かれの名以上にわたくしの記憶に深く刻みつけられてゐる。

チーン・ツーケー・ジヤカジヤカ……けさわたくしの庭には四十雀が啼いてゐる。わたくしは名も知らぬ信濃の山のあの男を思ひ出す。

「はやくはやくお出で下され度。毎日思ひ出しては懐かしく存じます。」かれはこのやうな葉書をくれた。かれの名はわたくしが想像してゐたよりも鹿爪らしい名であつた。わたくしはかれの名を忘れてしまつた。しかしかれの笑顏、かれの聲ははつきりとわたくしの記憶に生きてゐる。

信濃の高原を汽車が通るたんびに恐らくかれは汽車の窓にわたくしを探してゐるであらう。



＊

たいてい一日に一度或ひは二日に一度くらゐはわたくしは谷中の墓地のあたりを歩む。このごろは菊の香が墓をめぐつて薫つてゐる。

かさかさと落葉を掃く墓場の聲はいかにも秋らしい。

落葉を焚く煙の靜かなるも捨てがたい。

昨日はあの五重の塔の緣の上に十二三人の人夫たちが小春日をたのしみながら酒を飲み、唄をうたつてゐた。何處にも人間の隱れ家はあるものだとつくづく考へさせられた。

墓は鳥邊山あたりの墓よりも、谷中あたりの墓の方が靜かでもあり、落ちつきもあつていい。

たまたま樹へ廣く、碑も高くそびえた墓の、草に埋まつてゐるのを見れば流轉の相を見せつけられるやうで、方丈記の作者ならずとも暗い心になる。

男爵何々などと大きな石に刻まれた墓がひどく荒れてゐるのでうしろに廻つて見たら、大正九年歿と誌してあつた。そのころよく新聞で見たことのあるかなり有名な人であつただけに、一層氣の毒に思はれた。あまりに早い流轉の相である。

＊

秋から冬の初めにかけて旅をしてゐると、その土地々々の寒さから受ける感じがそれぞれにちがつてゐることに氣付く。京の町を歩いてゐると京でなくては味へない底の底から冷えこんで來

るやうな寒さがある。いかにも沈んだ靜かな寒さである。

その寒さが何ともいへず京といふものの印象をはつきりとさせる。懐しいものである。朝より

は、夕暮れの寒さである、宵の寒さである。その寒さの持つかすかな、しかも心の底に喰ひ入つて來るしみじみとした感じがあるために京の町は忘れられない。

大阪には大阪の初冬の寒さがある。軒の低い、電車の音を聽かぬやうな横町を歩いてゐるとたまたま宵のままの初冬の寒さが宵の口の街に忍んでゐることがある。その小寒の持つ味の懐しさは大阪でなければ味へぬものである。昔の蜆川のほとりの女たちはその小寒の味といふものにいやといふほど泣いたでもあらう。

大阪の初冬の夜を歩いてゐると「紙治」の小春を思ふ。

京都の初冬の夜を歩いてゐるとお俊を思ふ。

その郷土、郷土の持つ小寒の味である。小寒のあはれさである。

このころ東京の夜の町を歩いてゐてもやつぱり同じやうな初冬の寒さからあたへられる懐しさを感じる。

それは東京でなくては持つことのできない初冬の寒さであり、あはれさである。

からころと初冬らしい下駄の齒音を聽くだけでも何となく胸を搏たれる。

荒削りではあるが、京にも大阪にも見ることのできない忍び音に泣いてゐるやうなわびしさを



東京の初冬の夜に感じる。

そのやうなかすかな冬の夜の小寒の感じが漂うてゐるがゆゑに東京の初冬は捨てがたい。

＊

門を出づればすでに冬が近づいてゐる。

菊が枯れかかつてゐる。

夕暮れの町を歩いてゐる人々はたれもかれも行人といつた感じである。

たれもかれもが何事かを考へつつ楽じつつ歩いてゐる。

初冬の夕暮あるがゆゑに生きてゐたいと思ふ。

思へども思へども思ひ盡せぬほど初冬の夕暮は深いものを持つてゐる。

＊

東京の初冬の夜の町を歩くのはうれしい。

何となしに涙が流るる。

十軒店の羽子板を見るのも冬のよろこびの一つである。

羽子板を買つてやるべき子供もないが、ただ十軒店の夜店を見て歩くだけでもうれしい。同時に何となくあはれでもある。

初冬の夜はいかにも沈んだ、心の底にしみこむやうな、細やかな一脈の哀感をそそるがゆゑに

懐かしまるるのでもあらう。

初冬の夜を歩いてゐる間にすぐそこまで新らしい年が歩み寄つてゐる。

しかし新らしい年を迎へるといふ心よりは、舊い年を送るもののあはれさの方が強く迫る。

行く年の寂しさのなかにはなやかな羽子板の繪を見る人たちをもこめて夜は更けてゆく。

悟りすはすれば逝く年もなく、冬の夜のわびしさもないであらうが、悟られぬままに、はなやかな羽子板の繪の前に立ちつくして、逝く年のわびしさを忘れようとしてゐる人々のなかに自分自身の姿を見出すのも冬の夜のあはれさである。うれしさである。

＊

わたくしはよく大晦日の午後東京を立つて旅に出る。このごろではほとんどそれが年々の習慣のやうになつてしまつた。

旅に出れば除夜の鐘を聽くことができぬので、それだけは寂しいと思ふが、旅の見知らぬ土地に、まつたく初めての旅籠屋の壁に面して何のわづらはさるることもなく除夜を送るのはうれしいことである。一番騒がしい筈の除夜が、一番靜かな夜となつて來る。

或る時は海岸の宿で旅廻りの役者たちと襖一枚をへだてて寢た。

或る時は山寺の庫裡に佇んで除夜を送つた。

托鉢から歸つて來たばかりの山僧の編笠が緣の端に置かれたまま夜が更けて行つた。



歸命十方一切佛　最勝妙法菩提衆

以身口意清淨業　慇懃合掌恭敬禮

歸命頂禮大悲毘盧舍那佛

ただ一基の燈明と誦經の聲のみが旅人の心にかすかなわびしさを呼びさました。

わたくしは旅の除夜を愛する。

思ふほど思ひ、煩ふほど煩ひ盡す凡愚の悲しみを心ゆくまで味ふために。

# 男體山

東京を出でゝ北に旅する人々は蕭條たる冬枯れの曠野を横切りて榛名赤城の北方にさらに高く、さらに寂然として君臨せるがごとく雲の上にそゝり立てるやゝ圓錐形の巨人の姿を見出すであらう。近づくにつれて山は赭く、黝く、幾十條のものすごき山崩れの痕をさへ遺してゐるのを見る。盤根深く、いかにも山といふものゝ王者のごとき雄大な威容を具へてゐる。中禪寺湖の水をへだてゝ神のごとき男體の姿を仰ぐ時、昔沙門勝道がはじめてこの山に分けのぼつたころの憧憬の心も偲ばれる。

或る時は山腹の林影深く駒鳥を聽き、或る時は疎林に時雨わびしき猿の聲に旅愁を誘はれる。はげしい男體颪を防ぐために中禪寺湖畔の家々で吹雪除けをしつらへはじめるころになれば、滿山寂として湖心に月の影も冰る。



# 七月の旅

半年振りに東京を西へ立つた。

いつの旅でもさう思ふことだが、程ヶ谷、戸塚、大磯あたりの松並木を見るたんびに廣重の筆に描き出された東海道の自然の美が、あの附近だけにはまだまだ昔のままに殘つてゐるのがうれしい。

いつも夏になつて箱根を越えるごとに眞つ白な百合の花と淡紅色の合歡の花をたのしみに眺めたものであつたが、今年はまだ少し日が早かつたせゐか、一莖の百合も見なかつた。御殿場をさらに三島へ近く來たあたりで、わづかに咲きかけた合歡を一本見たのみであつた。

箱根の青嵐に吹かれて西へ旅するごとにわたくしの頭に映つて來るものは西の故郷の老親のことであつたが、もうわたくしには故郷へ歸つても一人の親もない。それだのにわたくしは西へ西

へと走つてゐる。父も母も新しい墓の下に眠つてゐるのに。
わたくしは汽車の窓の方を向いてそつと涙を拭いた。

東海道の旅の一番印象的なものは幾筋の川であらう。馬入川、安倍川、富士川、天龍川、殊に雨の日の大井川のほとりは旅人の心を惹きつける。芭蕉の「さみだれ」の句なくとも、朝顔の傳說なくとも、西に小夜の中山を控へ遠く松並木煙る島田と金谷の町を東西に分つた大井川の磧はあはれである。天龍川に西行を思ひ、富士川に芭蕉を思ふ。

岐阜に下りたころはまだ日は鈴鹿山の上に殘つてゐた。白い砂の道が焦きつけられてゐて、町を行く人の影もきはめて稀であつた。

宿に着いて涼を納れようとしてもたまたま吹いて來る風は燒くやうな白い砂の道と瓦の屋根を撫でて來たものである。いかにも徹底した暑熱である。金華山の翠巒が軒に迫つてゐるのがせめてもの慰めである。

日が暮れるを待つために長良川の橋の袂から船を出す。七日ごろの月が川下に傾きかかつてゐる。

この前長良川に遊んだ時は小雨が降つてゐた。雨の中に船を行るのも興味深いものである。



船頭は水の中へはひつて船を川上へ押す。白い波が船首に碎けては散る。

橋の上には夕涼みの人たちが集まつてゐる。ちやうど精靈流しの夜だつたので、橋の上から長い絲を垂れ、それに精靈船をくくりつけては靜かに川の面に船を流すのであつた。長いにつるされた燭が徐々に流れの上へ卸される。船が流れへ達するとともに絲は斷たれる。燭をかかげ精靈船は流れにつれて川下へ遠ざかつてゆく。

かしこにも流れてゆく燭がある。亡くなつた人々の魂が遠い世界へ旅立ちするやうであはれである。

精靈送る灯もありて鵜飼かな

歌妓を擁した屋形船の燭と精靈船の灯が一つ闇の中に溶けて同じ流れの上を漂ふ。流れにつれ、浪につれて或る時は速く、或る時は緩く、或る時は高く、或る時は低く、川下へ川下へと月の下を遠ざかつてゆく、水の上二三寸の灯はやがていつとはなしに消えてしまふ。

金華山の黝い影を頼るかのやうに鵜飼見る船の燭は崖の下に集まつてゐる。うたふ者、醉ふ者、罵る者、笑ふ者、水は暗く絶壁の根を流れては消ゆる。

十八樓の跡はどこであらう。川上の闇を貫いて折々稻妻が走る。かすかな水鳥の鳴きわたる聲が聞える。

物賣る船が暗い水の面を絶えず隼のやうに上下してゐる。流れは急である。流れに影を投げて遠ざかつてゆく船の燭は旅人の魂を涯もなく誘ふ。

煙花を買へとすすめられるままに買ふ。彼方でも此方でも美しい煙花が闇を縫うてぱつと消える。

舷に凭つて水を掬む者、絃歌に醉ふ者、磧にしやがんで北斗を仰ぐ者の上にすでに秋近い風が吹いてゐる。

鵜飼の面白さは鵜飼を待つ間にある。煙花にも飽き、絃歌も絶え、月、山に落ちて星爛旰としてかがやくところ、川上の暗い山の裾を焦がす篝火のあらはるる刹那、醉うたる男もさめ、うたた寢の女も艙に立つ。

鵜船は矢の如く流れを下つて來る。篝火は火の粉を散らして水をてらす。鵜は火の粉を浴びて水をくぐる。まさに涼味萬斛の戰ひである。

鵜船は矢の如く川下へ走る。篝火は遠ざかる。船の燭は消される。川の面には一雙の船も見えなくなる。

暗い夜と、涼風と、銀河のみが川の面を支配してしまふ。



長良川に鵜飼を見た翌日わたくしは名古屋に立ち寄つた。

名古屋をめぐる郊外の蓮の花は忘れがたき夏の情景である。

夏の祭りで、名古屋の町中が、酸漿提灯にかざられてゐた。御輿を擔ぎまはる人たちが一樣に厚い綿を入れた赤い肩當てを背に負うてゐる姿が珍らしくもあり、何となくほほ笑まれる。

夜の最終の汽車で名古屋を立ち、逆に東海道を東へ東へと急ぐことにした。

むしあつい夜であつた。どうしても眠れない。うとうととまどろむ暇もなくわたくしは夜明け前の沼津のステーションに下りなければならなかつた。

沼津から修善寺まで自動車を雇ふことにした。夜がまだ明けきらぬ沼津の町は眠つてゐた。

駿河、伊豆の海岸の村々の盆の習慣であらうか、家々の門口の軒下に竹で編んだ精靈棚がしつらへてある。ませがきも、茄子も瓜もすべてが戸外の棚にかざられてある。燭も線香も門口にそなへられてある。

この冬わたくしは伊豆の旅をした。その時はちやうど伊豆の里々では御火を見た。夜の闇の中に御火の火を見るのは何となくわびしかつた。

わたくしは今また同じ伊豆に來て精靈送りの朝の脫け殼のやうな濱の町を歩いてゐる。

濱には木槿が咲き、向日葵が露を浴びてゐる。伊豆の山には朝から杜鵑が啼いてゐる。

鶯が鳴いてゐる。
谿川には河鹿が鳴いてゐる。
わたくしは毎日山に登つては鶯を聽いてゐる。
今朝は霧が深かつた。
山鳩が直ぐ頭の上の高い松の木で鳴いてゐた。
朝霧が晴るるころから瑠璃鳥が啼きはじめた。
瑠璃鳥は毎日同じ木立の中で鳴いてゐる。
日が暮れかかつて、鶯が默りこんで、瑠璃鳥が鳴かずなればひとしきり蜩が涼しい聲を送つてくれる。
日が暮れてしまへば梟が鳴き、伊豆の山は燭一つ見えぬほどの靜寂をこめて更けてゆく。
わたくしは暗い川の縁で二人の山の女が淵を覗いてささやいてゐるのを見た。川のほとりに風のまにまに光るものがあつた。
「ダイヤモンドだらうか！」
一人の女が低い聲でいつた。
二人の女はなかなかそこの淵からはなれなかつた。
闇の中を乘合馬車が來た。



カンテラの火に映つた旅の外國人はひどく疲れてゐるやうであつた。胸のあたりまで伸びた白い鬚が眼立つて見えた。カトリックの坊さまである。
河鹿の鳴いてゐる川をわたつてゆく黑衣の老人の胸の小ひさな十字架が不圖したはずみに螢のやうに光つた。

# 旅

暫く振りの旅である。

夜汽車はさつき岡山驛を通り過ぎた。同じこの列車で幾度か兩親の危篤の電報を抱いて故郷に歸つたをりのことなどが思ひ出されてなかなかに眠れない。大方福山あたりの町の燭であらう、あわただしげに暗い窓をかすめて走る。そこの町から山を越えて山陰道境の村にただ一人で住んでゐる老いたる姉の面影が浮かんで來る。去年の秋八年振りで、ほんの三四時間のことであつたが、姉と逢つた日のことなどを思ふ。菅茶山と昵懇であつたらしい幾代前かの先祖の墓に姉の案内で詣でたりした。不運の裡に死んで行つた義兄は、その先祖の墓の傍らに靜かに眠つてゐた。まだ石碑も建てられず、赭土を冠つたままうづくまつてゐた。

今は晩秋蠶の季節だ。恐らく今夜あたり姉は眠りもせず桑をやつてゐることであらう。數人の



姉弟の中で、その姉一人が子供の頃から里子にあづけられ、緣づいては一番遠い山の中に行かねばならぬことになつた。

思ひ出は思ひ出につづく。

白々と空が明けて來た。花崗岩の低い山には朝霧がただようてゐる。美しい松山の懐につつまれて白壁の農家がひとりひとりの秋を守るかに眠つてゐる。

福岡はあの恐ろしい震災の年訪ねて行つたきりである。そのをりは水野といふ旅館に泊つたが、新築されたばかりのところで、建具などもまだそろつてゐないといふ有樣であつた。夜遲く梟の鳴くのを聽いたことを覺えてゐる。

今度もまた偶然にも水野に泊ることになつた。この前は夜、水野の裏の川にボートを浮かべたりしたが、今度はひどく疲れてしまつたので雨の音を聽きながら眠ることにした。あのころは靜かな袋町見たいなところであつたが、十年後の今日ではカフエやバアが軒毎に連なつてしまつた。梟など鳴いてゐたことが夢のやうである。

筑後川は濁つてゐた。少年のころ友と二人で筑後川に舟を浮かべ小一里も川下へ流されてしまつたことなどを想ひ出した。土堤の櫨紅葉も、久留米城の跡もそのころのままである。

汽車の中にしつらへられたラジオはしきりに石垣島に颱風が近づいて來たことを報じてゐる。

有明の海には流石に白い波が立つてゐる。雲仙嶽が腰から上だけを雲の上にあらはしてゐる。薄におほはれた海岸を壯夫が裸馬を走らせて行く。

明治十年の役の激戰地であつた田原坂の嶮峻は石を切り出してゐるのか、秋の日を浴びて眞つ白な山肌を見せてゐる。麓の農家からは高く空に揭げられた日の丸の旗が翻翻としてゐる。恐らく滿洲に出征してゐる人達の故郷の家であらう。

一三百人ぐらゐづつ一塊になつた死骸を大きな穴の中に埋めてあつた。それから腦がすんでからそこいらを見たが小指ほどの笹までも一本殘らず鐵砲の彈丸に折られてゐた。」などと亡くなつた父が語つてゐたことがあつた。亡父は職爭の歸りに薩摩馬を二頭買つて來たさうである。非常に脊の高い馬で父の他誰も乘ることはできなかつたといふことであつた。

空はいつの間にか曇つて來た。子供の頃見馴れた山や川が霞けて來た。山蟹を捕らへて子供たちが小川のほとりを飛んで行くのも昔のままだ。

*

熊本の町は三十幾年振りである。

空想の世界のみを追ひ求めてゐた頃の少年であつたわたくしは、ただ一人で佐賀平野を筑後川の岸まで歩いて、諸富といふところで川を渡つた。川はひどく濁つてゐた。柳川から更に矢部川まで歩いて、熊本行の汽車に乘つた。熊本驛に着いたのは眞夜中頃であつた。城のあたりを月の



光りに照らされながら歩いてゐる間に、東京から歸つて來たといふ若い女に導かれて友人の家にたどり着いたころは、月も落ちかかつてゐた。名も知らぬ人ではあるが、子供心にも旅で受けた親切はいつまでも忘れることはできなかつた。

宿に落着く間もなくいかにも颱風らしい嵐は梢を叩きつけて吹いて來た。嵐の音を聞きつつ横になつてゐる間にわたくしは旅の疲れに眠つてしまつた。

自動車を呼んでもらつたころはもう日も暮れかかつてゐた。

「本妙寺の石磴がすこし長いですから傘をお持ちなさい。」といつて宿の婢は傘を貸してくれた。

本妙寺の石磴はいかにも長かつた。七、八町もあるやうな氣がした。颱風はものすごく荒れ狂うてゐた。眞つ暗な路をたどりながら廟の方へ歩いて行つたが、時をり打ち折られたる梢がはたと音を立てて地に落ちた。

打ち並んでゐる塔頭の奥からは勤行の太鼓の音などが嵐につれてひびいて來たりした。木立のなかに明滅する燭が一層颱風の夜のものすごさを增す。人の影もない。

長いこと甃石の道を歩いて、ふたたび石磴にかかる。石磴の中央に二列に並んだ燈籠が奥の廟までつづいて、嵐のなかにかすかに燃えてゐる。雨は横なぐりに燈籠の燭を打つては叫ぶ。

石磴の中程に一つのささやかな御堂があつた。「日蓮聖人安置」といつたやうな文字が見出さ

れた。正面の厨子には蠟燭の火が一つまたたいてゐた。わたくしは不圖その時厨子の前に一匹の猫がしきりに顔を撫でてゐるのを見た。雨戸の中のささやかな御堂に猫を見出すといふことが、何となしに怪奇的な興味を惹いた。しかし先を急ぐので飛ぶやうにして石磴を昇つて行つた。或る井戸の前でわたくしは一人の無精鬚を生やした男を見た。かれは雨に濡れた袂を絞つてゐた。清正公の廟の前に額づいて、わたくしは携へて來た蠟燭と線香に火を點けた。しかし雨がはげしいのでなかなか火は燃え移らなかつた。突然わたくしの後でグロテスクな聲を絞つてお題目を唱へてゐる男に氣付いた。並外れて頭の大きな少年であつた。少年は雨に濡れながらお題目を唱へつづけた。

石磴を下る時わたくしはふたたび嵐の中に井戸の水を浴びてゐる無精鬚の男を見出した。その男が水を浴びるたんびにお題目の聲がものすごく暗い木立にひびく。

わたくしはなほ一度、さつきのささやかな御堂の前に立ち止まつて見た。もうさつきの猫はゐなかつた。しかしわたくしはふたたび異樣なものを天井の低い、薄暗い御堂に見た。狸のやうな形の黑い影が煤けた障子に映つた。しかもそれは本を讀んでゐる。

わたくしはなほも近づいてその黑い影を見た。眞つ黑に煤けた塑像である。眞つ黑に煤けた柱、板戸、天井、眞つ黑な厨子、いつ張り替へられたともないらしい骨太な障子……すべてがこの一定の本を讀んでゐる動物の黑い影を一層怪奇的なものにするに役立つてゐる。



後になつて聞いたことであるが、本を讀んでゐる動物といふのは、論語をかかへた清正の愛猿を刻んだものであつた。

＊

雨雲につつまれて阿蘇の煙も見えない。この前薩摩に入つたころは、球磨川をわたるあたりで二三百人の壯夫が、荷車に載せた大太鼓を曳き、田圃の間をねり歩いてゐるのを見た。太鼓には花が飾られてあつた。

薩摩境の櫨山はもう大分紅葉してゐた。

天草の島影が水をへだてて窓に迫つて來る。

阿久根は毎年鶴の群が渡つて來るので有名である。黄金色に實つた稻田の間にも「鶴渡來地」と書いた標木が見出される。頼山陽も歩いたであらう阿久津あたりの海岸もけふは波が高く、一隻の船影を見出すこともできない。今日も沖の島々は水天髣髴の間にただようてゐる。

汽車は數い岩山の腰を縫うて海を眺めつつ走る。この前そこを通り過ぎたのは波一つ立たぬ靜かな秋の日であつた。遣唐使を乘せた船の朱欄の夕陽に映るのを見出すことさへできさうに思はるる太古さながらの海であつた。遣唐使の船を送り迎へした坊の津あたりの山も煙つてゐた。わたくしはその時、海の中の巨巖に釣をたれた男を見出した。傍らにはその子らしい一人の少年がしやがんで沖を眺めてゐた。

わたくしはその後しばしば太洋の中に突き出た巖頭の父と子を一つのなつかしい消去の幻影としてわたくしの追懐の中に描き出すこともあつた。

わたくしはけふ、ふたたび數年振りで海の中に突き出された眞つ黒な巨巖を見出した。海は荒れに荒れてゐた。波は巨巖をゆるがすほどに狂うてゐた。そこには釣を垂るる父もなく、子もなかつた。

汽車は走りに走つた。だがまつたく人の影を見出すこともなかつた。ただ黒い岩と、白い波と憂鬱な空のみが旅人の心を暗くした。

日暮れちかくわたくしは鹿兒島の町を見出した。櫻島も半ば雨雲につつまれてゐた。

宿の所在は城山の裏、南洲翁終焉の地である。宿の部屋から眺めると、右手に城山の老樟林があり、左手に櫻島が見える。三十年前に英語をそはつた市來先生からの手紙を女中が持つて來た。今は日向の小ひさな町に孤獨の老後を守つてをらるるといふことであつた。一度逢ひたいと思つたが、明日は鹿兒島を立たねばならぬのでその機會も惠まれない。「若きころ學び候英語と鉛筆畫が役立ち、今は町の人々に英語を教へ、肖像畫を描きなど致し、ともかく老人らしき生活を送りをり候。」などと書いてあつた。

砂糖黍の畑をへだてて朝夕霧島を眺めつつ暮らしてゐるといふことなども書いてあつた。

スキントン英語讀本の第四卷を古川といふ男と二人で、學校がすんでから毎日市來先生に教はつてゐた。古城の濠のすがれ果てた蓮の葉をくぐつて鶯が鳴いてゐるのを聞きながら、日の暮るるまで詩人らしい先生の講義に耳を傾けてゐたこともあつた。古川といふ友人は二十年も前に死んでしまつた。



市來先生の手紙を讀んでゐる間に日はすつかり暮れてしまつた。

南國といへどもさすがに秋だ。たえず裏山の桐の葉の地をたつ音が聞える。風は冷たい。

しかすがに秋の寒さのしむ夜かな

谷山といふ町は鹿兒島から薩南拝宿に至る途中にある。櫻島を前に控へ、海に臨んだ漁村である。昔懐良親王の御幼年時を過ごさせ給うた地である。ここに豐臣秀頼の墓と傳へらるるものがある。朝早く谷山の町長、町の古老たちにさそはれて秀頼の墓に詣ずることにした。高さ八尺ばかりの塔で、赤色を帯びた石である。塔のいただきは兜になつて居り、塔の正面にはかつては文字が刻まれてあつたさうだが、今は磨滅して何も見えない。塔の右側に東帯姿の人物が彫られてゐるのだけが見出される。左側にもかつて彫刻が施してあつた形跡だけは見出される。

場所は農家と農家の間の一畝ばかりの空地にあり、無花果や竹林が塔の後に連なつてゐる。

數年前までは年に二度づつゆかりの子孫だと名乗る人が墓地を訪れて來たといふことを墓地つ

づきに住んでゐる老人は語つてゐた。

秀賴が大阪城を逃れて薩摩に落ちたといふことは想像されないこともない。殊に二條城を訪ねて行つたをりの記錄に殘つてゐる秀賴の風貌と谷山の町の人々の間に語りつたへられてゐる秀賴の風貌とに太だ似通つたところのあるのも面白い。朝夕、薩摩潟の波の音をききながら不遇敗殘の一生を送つたであらう秀賴のことを想像すれば、今さらの如く旅人の心を打つものがある。

二日前の夜は颱風の中に雨にぬれつつ清正の墓にまうでたわたくしは偶然にも今朝は秀賴の墓を訪ねることになつた。頼り賴られた主從が、肥後と薩摩に山をへだて、國を接して眠つてゐるのも一奇である。

鹿兒島を立つたわたくしはふたたびきのふ通り過ぎた線路を北へ北へと走つてゐた。熊本師團の凱旋が近づいたといふので、汽車の中までも、その話で持ちきりの形である。靜かな沿道の山の中、稻田の中にも、高くかかげられた國旗が秋空に映つてゐる。若い男を戰場に送つてゐる人たちの家である。一つの谷、一つの部落、或ひは水に沿うた村、或ひは石切場らしい岩山の根にも必ず雨風にさらされた日の丸の旗を見出す。待つ父、待たるる子。山も谷も、稻田の村も旅人の心を暗くする。果して、生きて今日還る者幾人ぞの歌きもわく。

鳥栖から西へ長崎線に移る。北方に筑前境の背振山が近づいて來る。そこにはかつてわたくしの亡父が馬を走らせたであらう國境への白い路が櫨の列樹の間を縫つてゐる。小高い丘が走る。



そこには、祖先の墓があり、かつて父の家があつた。若者たちが、土堤の上を馬を走らせてゐる。わたくしは南の空を眺めた。筑紫平野を蔽えて雲仙嶽が蒼然として浮かんでゐる。線路に近く限りもない濠の水がづらなる。鵜飼が昔さながらに菱の葉の間をくぐつてゐる。杉の並木、單調な國道。濠の水を汲む女、すべてわたくしの少年時代のままだ。そこには亡くなつた母の家がある筈だ。汽車は西へ西へと走る。憂鬱な秋の午後だ。

雪の降る日、川に落ちたわたくしの著を探すために、水の中に入り、手足を眞つ赤にして川底をかきまぜてゐた親切な老婦のことを思ふ。かの女も恐らくそのあたりの地下に眠つてゐることであらう。

雪の降る日、町の若い巡査と二人で山に登つてお祈りをしたことがあつた。その山も昔のままだ。若い巡査は熱心なクリスチヤンであつた。

汽車は西へ西へと走る。日は暮れかかつた。

# 時雨

時雨に濡れた信濃の山は旅人の心の底までも冷え〳〵と感じさせた。いや、旅人の魂までもといつた方がもつと適當であらう。千曲川に打ち迫る山も山も高く、險しく、一つ〳〵の孤獨な世界をじつと見守つてゐた。

爪先上りに登つて行く小諸の町の甃の路をも時雨はしつとりと濡らしてゐた。

古城の直下を流れてゐる千曲川の眞白な早瀬をも時雨はつゝんでゐた。

柿紅葉の中に見ゆる製絲工場の眞つ白な壁、規則正しく連ねられた窓までが時雨につゝまれては尊きほどに眺められた。

岩山の懷に抱かれた農家の中二階の窓のあたりにつるされた玉蜀黍の色までが時雨の朝は寂しかつた。

長野の町に下りて、長い甃の道をたどつて善光寺の山門に立つた時、しみ〴〵と信濃の時雨に濡れてゐる自分自身の旅の姿に見入る氣にもなつた。眞つ赤な林檎を賣る女たちは雪袴を穿いてゐた。

山門をくゞつて行きかふ人も人もことごとく旅人であつた

# 十日の旅

汽車が走るにつれて赤い罌粟が日の光りをいつぱいに浴びて、麥畑の間に燃えてゐるのを見出すのも初夏の旅らしい。

麥は熟れてゐる。スロープを描いたクロバの草地には黄牛が寢ころんでゐる。

遠い地平線を見れば、黄麥の上に雲が湧き、「雲無心にして岫を出づ」の句を想はせる。

汽車の響きさへなかつたら、恐らくあの麥畑の空高く雲雀が啼いてゐることであらう。

六月の麥畑を見るごとにわたくしはTのことを想ふ。千葉の海岸でかれが自殺をした日の午後、わたくしは雨上りの海岸を一人で歩いてゐた。麥の間の小徑にはまだTが歩いた下駄の痕がのこつてゐた。雲雀が鳴き、紫陽花が咲いてゐた。

箱根を越ゆる時、殊にわたくしはTのことを想ふ。かれが自殺を考へてゐたのは中學を出る一



二年前からであつた。かれはいつも一管の笛を手ばなさなかつた。かれは詩人であつた。

かれは學校のことを放り出して日向境の山を歩いてゐた。東京に來てからも十國、乙女、裾野、榛名と山から山、野から野を歩いてゐた。

乙女峠で草の中に笛を失つた時かれは泣いたとわたくしに語つたことがあつた。

箱根には野茨の花が咲いてゐる。翠巒の上に乙女峠の草が輝いてゐる。

Tが死　で七年になる。いつも寂しかつたかれの眼が、かれの聲が、かれの溜息が、あのいたましい自殺の部屋が、まだわたくしの頭にさながらに刻みつけられてゐる。

死んで行つたTの美しい詩人らしい心を思ひ出せば思ひ出すほど、わたくしは自分の心の醜さを思はずにはをれない。

富士は見えない。裾野の一部分が雲の下に遠くひろがつてゐる。桑を積んだ馬が雲の中にはひつて行く。

御殿場であらう。草と杉と桑との間に白い家の壁が見える。れんげ草が咲いてゐる。

忌はしい病氣のために、十九か二十の若い女が家からも、都からも姿を隱してしまつて、この附近の山の病院に逃げてゐるといふ話を或る若い人に聽いたことがあつた。

「女學校時代にも才貌共に羨望の的だつたのです。それが何といふ運命の呪ひか、その女は遺傳的に恐ろしい病を持つてゐたのでした。それでもやつぱり世の中といふものが捨てられないの

か、山の病院を出ては時々東京にやつて來るのです。無論たれにも顔も合はせず、またその女がそんな病氣になつてゐることなんか誰も知らないんですが……」

*

二三年前の夜汽車で眞夜中過ぎまでわたくしは青年とその不運な女のことを聞つたことがあつた。わたくしはその青年がその女に對して何のやうな關係にある人だといふことをほぼ想像することができた。それだけにわたくしはその青年をも氣の毒だと思はずにはをれなかつた。

涯しもなく裾野の草が雲に濡れてゐるばかりである。

或る寺の聖マリヤの御像が拔け出して、巷に出て行つたといふ外國の古い話のことなどをその時、わたくしは聯想したこともあつた。

どこにその山の病院があるのだらう？

名も知らぬ雜木の花が一面に白く咲いてゐる。卯つ木の種類でもあらうか、野炎は一とかたまりになつては苗代田のあたりにやはらかな蔓のやうな枝をしをらせてゐる。

草は裾野を埋めてすくすくと青く伸びるといふよりは天に向つて燃え上つてゐるといふ感じを抱かせる。

二里三里歩いて行つたところで人の影一つ見えさうもない。

その廣い、燃え上つた草の中でただ二人の裸體の若い男が結い土を掘りかへして一本の電柱を



樹ててゐる。今、野から生まれたばかりの原始人の力强さ、男らしさ、自然さが、かれ等の日焦けした顏にも胸にも漂うてゐる。かれ等の眼は野獸の如く、また嬰兒の如くも見える。

わたくしはゴツホの繪に見出さるるあの線の强さを、たくましさを、暗さを想ひ出した。

無限なる野の中に放り出されたただ二人のたくましい筋肉勞働者？　一本の電柱！　やがて一本の電柱は天を指さして無限の草原の中に突つ立つであらう。

夜が明けかかるころわたくしは中央山脈を見た。去年亡母が危篤であつた時、わたくしは同じ汽車で同じ夜明け方に桑畑の間から遠く中央山脈を見た。

茶畑の上に白く雪をいただいた山々が連なつてゐた。美濃飛騨地方の山々であらうか、あの朝の心を思ひ出しながら、わたくしは窓をしづかに明けた。故郷に待つ母を持たぬわびしさが身に迫つて來る。

伊賀地の山であらうか。遠い麥圃の涯に斜に一脈のかすかな弧を描いて寄くかすんでゐる。山も家もまだ半ば眠り心地である。「蟬一つ見つけてうれし」の芭蕉の句を思ひ、芭蕉の旅心を偲ぶ。

京都には下りぬつもりであつたが、あの東山の黑い塔や、見るからに打ち沈んだ古都の空氣を思ひ出しただけでも素通りするのは惜しいやうな氣がして、わづかの時間で智恩院から清水にまはることにした。

やつと夜が明けたばかしのやうな朝の空氣が、東山に沿うた京の町の半分をつつんでゐる。霧が深く山をも塔をも埋めてゐる。

オーバーをひつかけても肌寒いほどの朝風に吹かれながら加茂川に沿うて上る。疏水の土堤には柳の嫩葉が草の吐息を想はせるほどにやはらかに俯垂れてゐる。

疏水に沿うて加茂川の磧を眞正面に控へて、隣りから隣りへと夜の歡樂地らしい家の戸が、まだ堅くとさされてゐる。柳に沿うて夜の名殘りの燭だけが白く力なく消えがてにまたたいてゐる。

低い軒の、暗い格子戸の前には眞つ白な大根を荷車に積んだ男と遍路の女とが立ちながら話してゐる。

*

燕がその低い軒の下から飛び去つてはまた歸つて來る。

木も石も伽藍も一樣に黑い頽唐の影につつまれてゐる。黑い高い影の下で人々はかすかに動いてゐる。塔の下をめぐる下駄の音までが遠い過去の幻影の世界にわたくしの心を誘ふ。智恩院の奥からは絶えず木魚の音が霧の中を響いて來る。一段二段と石磴を踏むごとにわたくしの心は過去に還る。山も塔もまだ暗く霧につつまれてゐる。お茶湯の大釜の前には二人連の旅人が休んでゐる。

暗い。しかしながら言ひやうもなく端麗莊嚴な須彌壇の前に額付いた刹那に、人は宗教と藝術



と、敬虔と耽美と、憧憬と享樂とが融然として一處に結びついてゐる至境の尊さに擊たるるであらう。

智恩院から清水へ行く途中であつた。そこは藪の下の窪地になつてゐた。昔、加茂川の磧でさらされた獄門首の捨て場だと伴夫は語つた。そこには隱元豆の花が美しく咲いてゐた。

清水では御札を賣つてゐる男の横柄なのが可笑しくもあつた。

奈良への道は宇治の白い磧が茶畑の間に隱見するあたりをいつの旅にも面白いと思ふ。

この前は秋のはじめころで、あの低い小山には柿が赤く熟れてゐた。山は紅葉しかけてゐた。

今日は白い手拭を冠つた茶摘み女たちが茶畑の中に、宇治川を背にして柔かな點景を作つてゐる。

奈良はいつ見てもいい。三笠山の青草と、淺茅ヶ原の芝生と、あの思ひ切つて晴やかな春日社の丹色と。

もし細雨でもしづかに灑いでゐたら何んなにかいいだらうと思はれる。

馬酔木の花はすつかり散つてゐた。

法隆寺は二十年前に汽車の窓からあの塔を眺めただけであつた。

小ひさな法隆寺驛から俥を走らせながらわたくしは菱畑の間にあの黑ずんだ塔の影を見ては心を躍らせた。

わたくしたちの祖先人の宗教はいかに尊い藝術的な憧憬に燃えてゐたであらう。あの鵬翼を羽打つたやうな五重の塔の屋根の曲線はまさに天界に翱翔らんとする祖先人の慶ぶしい、しかしながら明るい、大膽な、力強い享樂的な宗教と藝術の至境を象徴してゐる。麥畑の間に聳えた塔の影を見た刹那に、わたくしはロシヤの寺の黄金の屋根の話を想ひ出した。

恐らくここでも菜畑や麥畑の間に旅をつづけて歩く遍路たちは、どんなにかあの山の麓の塔の影を見出すことによつて慰められ、勵まされたことであらう。

そこには人間の赤裸々な悠久に對する翹望欣求の心が、太い、ナイーヴな、大膽な塔の線によつて語られてゐる。

そこには悠久な實在に對する人間の最も虔ましい讃歌があの山の麓の麥畑の間から何の飾り氣もない節でうたはれてゐる。驚くほどそれは原始的な節奏である。けれどもそれは驚くべき程の偉大さと淳朴さと調和とを持つてゐる。

「夢殿への道」といふ道標を見出しただけでも、わたくしの心は或る懐かしみを感ずることができる。

麥は刈りはじめられてゐた。白い器粟の畑越しに、葛城や金剛の山々が夏の光りに青くかすんでゐる。



奈良、法隆寺からの歸り路にわたくしは伊豆にまはつた。

かしこには開かれた山、古びた山寺があつた。ここにはまだ開かれぬ山がある。五月雨ちかい城天の根腰は雲につつまれてゐる。

わたくしは麥秋といふこころをつくづく味ふことができた。

伊豆の盆地、或ひは天城の谿間までも、或る時は山のいただきまでも麥が熟れてゐる。もし青い夏の山を見ないで、あの黄色に熟れた麥畑の平原だけを見つめてゐたならば、誰が秋と夏とを區別することができよう。麥の上にかがやいてゐる日の光りも秋のやうに靜かである。平原を埋めてゐる空氣も秋のやうに沈んでゐる。

さくさくと麥を刈る鎌の音さへ秋を聯想させる。

伊豆の山には五月雨雲がかかつてゐるのに、鶯が啼いてゐる。

日がかげつて來れば谿川を傳うて河鹿が鳴く。それは恰度村の若い男たちが麥畑の道で柴笛を吹いてゐるのを聽くやうなわびしさを旅人の心にわかさせる。

五日、六日ころの月が天城の谿を覗くやうになつた。わたくしは夕方になれば谿川に沿うて河鹿の聲を聽くのを樂しみにしてゐる。

河の瀬の音につれて鳴く河鹿の聲は懶い初夏の夜を一層懶くする。單調な河鹿の聲の底には人生の無常と、青春の儚さとを想はせる深い愁がある。

「自然は何ゆゑに、こんなにまで可憐な、同時に、こんなにまでさびしい聲を作つたのであらう！」

わたくしは河鹿の聲を聽いて暗い道を宿に歸つて來るたんびにこんなことを考へる。

この二三日、伊豆の谿間では村の若者たちが夜になると笛を吹き始めた。



# 高千穗に登るの記

汽車は天草島を右にながめながら肥後と薩摩の國境を走つてゐた。九州本線袋驛を出てやがて米の津を通り過ぎようとしてゐるのであつた。德川の鎖國時代には肥薩の間に關所を設け旅人を嚴しく改めたところであらうに、今はそれらしい跡もなく、低い櫨の間に二人の若者が鍬を抱へて立つてゐた。

このあたりから海のながめは殊によくなつて來る。鹿兒島をたづねた賴山陽がここの海岸を愛して低徊去る能はずといふ態であつたといふことを里の人々は言ひつたへてゐる。有名な山陽の天草灘の詩はこのあたりでうたはれたものだといふことである。

薩摩に入つて間もなく海岸に沿うて阿久根といふ小驛がある。この附近には鶴の渡來地がある。毎年十月ごろになれば海をわたつて鶴の群が飛んで來る、そして翌年三月にふたたび何れかへ旅

立つて行く。汽車の窓からながめてゐると「鶴渡來地」と書いた標木や、鶴の形を描いたものなどが青々としげつた葦の間などに建てられてゐる。

川内川はまことに美しい川である。水量の豐富な川である。昨年の夏わたくしはそこの川で鯉漁にさそはれたことがあつた。鯉の味は日本一といふことである。

川内町には瓊々杵尊の御陵がある。旅人は川内川をへだてて老木蓊鬱たる山の、たとへば大和の畝傍にも似たる姿を見出すであらう。しかも畝傍よりも一層山深く、山黒く見ゆる南國の山である。それが御陵である。

この附近には島津氏の古城の跡が多い。古城といつてもたいていは自然の山をそのままに利用して城塞としたものであつて、今は或ひは畑地となり、草離々としていたづらに行人の心を傷ましむるのみである。太閤の島津征伐のをりには秀吉はこの附近まで本營を進めて島津家の降を容れてゐる。

この時の逸話としてこんな事が語りつたへられてゐる。

秀吉は島津の大將をもてなした。そして島津の大將に酒をすすめたが、あまりうまさうに酒を飲むのを見て「ひげのあたりに鈴蟲ぞ鳴く」と咏んだ。それにつれて島津の大將は即座に「ロひげをちんちろりんとひねり上げ」とつけた。ロひげをひねり上げるといふのは秀吉の風貌を彫したものである。



川内を出て汽車は串木野、西市來と鹿兒島の方へ走つてゆく。海岸の景色は何處もいい。この附近には島津家の金山の跡があつたり、朝鮮役のをり朝鮮から連れて來た陶工の部落があつたりする。有名な薩摩燒の發祥地である。

さらにこの附近の海岸は、經濟的方面或ひは日本の文明史上から見てもはなはだ重要な役目を演じた土地である。

開聞岳は薩摩の南端に聳えてゐる。揖宿半島の南端に在つて海中から文字通りに忽然として幾千尺の天空に聳えてゐる。

南方の遙かな海上から日本をたづねて來た外國の船人たちが、第一番に水平線上に發見したものは恐らく薩摩南端の開聞岳であつたにちがひない。

かれ等は水平線上に忽然としてあらはれた開聞岳を發見した刹那に、恐らく甲板の上に相擁して踊り上つたにちがひない。自然外國船は開聞岳の麓の港々にたどりついて來るといふ形であつた。坊の津をはじめ吹上濱に沿うた港々に外國人の足跡を最も多く見るやうになつたといふことはきはめて自然なことである。

汽車が市來あたりを走るころ、わたくしはかつてそこの靑い海の上を往來したであらう幾多の密貿易船や八幡船の物語を思ひ出した。

薩摩の島津家は德川家にとつていつも一大敵國であつた。だから德川家は絶えず難題を持ちか

けては島津家の勢力を殺ぐことをのみ考へてゐた。有名な木曾川治水工事のごときはその代表的なものである。幕府は島津藩に命じて木曾川の治水工事を行はせた。

島津藩はそのために何百萬兩といふ借金をして木曾川治水の大工事をやりとげた。平田靱負以下七十九人の薩摩義士が責を負うて腹を切つて死んだことは木曾川治水の大事業の尊い犠牲であつた。薩摩義士の尊い犠牲のために今日まで木曾川沿岸の人々はどれだけ恩恵を蒙つてゐるか知れない。

かやうな狀態で德川氏はいつも島津家の力を弱らせることのみを考へてゐた。島津家は財政上しばしば破産の他なきに至つた。そこで島津家は國禁を犯して密貿易によりて國の財政を立て直さなければならなかつた。薩摩にも幾多の錢屋五兵衛がゐたわけである。

市來あたりの海岸には芒の小藔に何も知らぬ無心の子供たちが沖をながめてゐた。

櫻島の優麗な姿が青い波の上にのつしりと浮かんで來る。鹿兒島の町が見える。城山が見える。白い砂の甲突川が横たはる。

甲突川は島津家の軍勢がここで戰つたをり敵の甲を突き刺したといふことからこんな名が生まれて來たといふ傳說がある。

甲突川に沿うて西鄕南洲翁や大久保利通の生まれた邸跡がある。東鄕元帥や乃木將軍の夫人の誕生地もこの甲突川のほとりにある。利通が甲東と號したのは甲突川の東にその邸があつたからである。



西鄕と大久保は子供のころよく甲突川の磧で角力を取つたといふことが今も土地の古老の物語にのこつてゐる。

甲突川から見上げる丘がすなはち城山である。南洲翁があの悲壯な戰死を遂げた前夜はをりからの明月であつた。恐らく翁は城山の老樟の下からあの甲突川の磧やなつかしい誕生地を眺めたことであらう。

*

わたくしは鹿兒島に着いた翌日城山に登つて淨光明寺の南洲先生の墓に詣でた。墓は南洲先生を中央に桐野利秋や篠原國幹を左右に櫻島に面して幾百となく並んでゐる。十五歲十六歲の少年たちの墓も南洲翁の墓と並んでゐる。いかにも薩摩隼人の雄々しい當年の意氣に擊たれて頭が下る。恐らく泣かない者はないであらう。

わたくしは城山の教育參考館に行つて、南洲翁自作の下駄や、鞍を見た。下駄は大きなもので、まはりには大きな鉄が列べて打ちつけてあつた。驚いたのは南洲翁の禮裝であつた。上着はオーバー・コートくらゐの大きさであつた。ズボンの幅など普通の人のからだがはひりさうな大きさであつた。

桐野利秋は勇壯無比の大將であつた。江戸の町で突然敵に襲はれ腕を傷けられたがすこしもひ

るまゝ直ちに敵の刀を奪ひて敵を斬りたふした。普段帶してゐた刀は中身が三尺八寸、柄が一尺二寸、すなはち五尺の大刀であつた。

篠原國幹は薩軍の參謀總長であつたが、つねに緋のマントを着て、先頭に立つて指揮してゐた。みんなが後に引きさがるやうにと賴んだが、どうしても諾かず、田原坂の戰にはいつものやうに緋のマントを羽織つて最前線に立つてゐるところを狙撃されて死んだ。いかにも勇ましい古武士的な將軍であつた。

參考館の陳列品のなかに天吹といふ小ひさな尺八見たいな笛がある。これは征途に立つ時かならず甲櫃の中に入れて置いたもので、陣中で吹いたといふことである。多感な薩摩隼人が陣中月下に天吹を吹いて家鄉を懷うたであらうことが想像される。

＊

南洲翁が可愛嶽に退いて官軍の包圍に陷つた時、愛子菊次郎は手傷を負うた。その時は南洲翁自ら菊次郎の傷を繃帶してひどく心配をされたといふ話を聽いた。人間らしい南洲翁の面目があらはれてゐる。

＊

鹿兒島では今ちやうど六月燈といふものがいとなまれてゐる。東京でいへば盆日のやうなお祭である。二三日前には西鄉先生のお墓のある淨光明寺で六月燈があつた。



わたくしが霧島に立つ前の晩には水をへだてて櫻島の六月燈の燭が美しくまたたいてゐるのを見た。

櫻島はまことに美しい山である。鹿兒島の町は櫻島があるので伊太利のナポリに似たといはれるが、櫻島はいかにも雲の色も山の肌も美しい。夜が明けかかるころ、日が暮れてゆくころ、城山に立つて櫻島をながめてゐると尊いほどの心になる。山にかかる雲も、山の肌もみがき上げたやうな薔薇色につつまれてしまふ。

＊

鹿兒島から自動車をドライブして鹿兒島灣に沿うて霧島へ向ふ。海岸はすなはち薩摩潟である。波一つないおだやかさである。

水をへだてて櫻島の大根畑や學校の屋根も見える。

小學校の子供たちが、學校から歸つて來るが、みんな七月の暑いさかりを草履も穿かないで跣足のままである。

子供たちが潮を浴びてわたくしたちの自動車を見て萬歲を叫んでゐる。

國分の町で日向へゆく道と霧島へゆく道とに分れる。

國分は昔から煙草の名產地である。どの家にも煙草が乾してある。

高千穗の峯が煙草の畑の上に忽然としてあらはれて來た。わたくしたちは手を拍つてよろこん

た。

高千穂の峯は神代ながらの尊さに聳えてゐる。

わたくしたちの自動車は煙草畑の間を歩一歩喘ぎながら上つてゆく。

仔馬を連れた馬が草の中に立つてゐたり、胡瓜を嚙る男が道ばたに佇んでゐたり、いかにものどかなことである。

*

霧島では榮之尾といふ溫泉地に泊ることにした。

牧園といふ村の種馬所の廣い牧場の間を走るころから空が曇り、やがて驟雨が山をつつんでしまつた。

夏の服ではとてもやりきれぬ涼しさである。蜩が原始林の間に鳴く。

榮之尾の溫泉に着いたころは雨もすつかり晴れ、宿の欄干によりかかつてゐると櫻島も開聞岳も遠く一眸の中にながめられるのであつた。ほととぎすや老鶯がさかんに鳴く。

夜は月が美しく秋のやうであつた。

*

朝霧の中を草鞋踏みしめつつ霧島の原始林を横切つて、岩を攀ぢ、木の根にすがつて韓國嶽へ登つてゆく。



霧島といふ名にふさはしく、霧島はいかにも霧の多い山である。見る間に霧は谿を埋め、山をつつみ、空を掩ふ。

韓國嶽は霧島連峯中の最高峯である。鹿や猪の足跡を道に發見しては大人たちも子供のやうになつてうれしがる。

韓國の腰の部分に大波の池がある。周圍一里、舊噴火口である。恐らく世にも稀なる美しい山上の湖であらう。岩燕飛び、ほととぎすが鳴いてゐる。

韓國から東南にあたりて高千穂の峯が聳えてゐる。巔は急に鉾のごとく尖つて天に向つてそそり立つてゐる。北の全面は赤く燃えたるままの幾千尺の斷崖を作つてゐる。高千穂の噴火口は巔より十町ばかり下つたところに御鉢の形をなして燃えてゐる。白い煙がかすかに反映してゐる。

*

韓國は霧島山系の西の第一峯であり、高千穂は東の主峯である。韓國と高千穂をつなぐ山脈の中程に新燃岳がある。新燃はいはゆる霧島躑躅の名の出でたる山であつて、全山ことごとく躑躅に掩はれてゐる。頂上は舊噴火口になつてゐて太だ深く、底には翡翠のやうな水をたたへてゐる。ここでも岩燕は群をなして飛んでゐた。

新燃に登る途中の樹海でわたくしたちはしばしば鹿の足跡や、鹿に食はれた木の芽を發見した。

新燃、中岳の裾を縫ひ、美しい赤松地帶を過ぎて高千穂河原に出る。

高千穂は急にけはしくなる。全山燒石につつまれて、急峻な胸突き坂のやうな形になつてゐる。汗を拭きあえぎあえぎ登る。

八九町も登つたところで御鉢めぐりになる。噴火口の周圍をめぐるのである。すなはち馬の背越といふのである。

昔からこのあたりで死んだ人はかなりあるらしい。一歩足を踏みすべらすれば噴火口に落ちるか、或ひは燒石とともに千仞の斷崖に落ちなければならぬ。そんなことを考へてゐると足がむずむずする。今は噴火も極めてわづかである。

馬の背越からわづかの間平らな燒石原を通り過ぎてさらに嶮しい登りがつづく。幾度か息も切れさうな思ひがする。眼がくらみさうである。しかし南國の青い青い青空の上にくつきりと反映してゐる天の逆鉾を見た刹那にはさすがに魂打たるる思ひをする。逆鉾は地上四五尺の高さだけあらはれてゐる。鬼人の顏のやうなものが兩面に浮き出されてゐる。

逆鉾のほとりに立てばはじめて高千穂はさすがに高い山であり、尊い山であることに氣づく。日向も大隅も薩摩も高千穂の峯の麓に青々と伸び、展がつてゐる。雲が靜かに牧場の上を、原始林の上を這ふやうに飛んでゆく。と見るまに千仞の谿をこめて霧が湧いて來る。韓國も、新燃も中岳も大波も矢岳も夷守も霧につつまれてしまふ。高千穂のみが霧の上にそびえてゐる。



太古、高天原の御神が鉾を垂れ給うて雲の下に地をさがし給うたといふ傳說がいかにもとうなづかれる。

霧が晴れるとともに日向の平原が繪のやうに横たはつてゐるのが見えた。

高千穂の裾の原始林に沿うて周圍三里の御池があり、池にちかく東霧島神社、さらにすこしはなれて狹野神社がある。狹野神社の裏の森にちかく王子原がある。神武天皇のお生まれあそばされたところである。

この附近の森林や草原は恐らくわれ等の祖先が日も日も狩り暮したところであらう。

霧島神社は高千穂の南方に黑いほどの大森林につつまれて見出される。いかにも尊い。霧島神社からさらに南西にあたりて小高い丘や、嶮阻な小山岳が波のやうに起伏してゐるのを見出すことができる。熊襲の根據地である。日本武尊も恐らくこの地方までお歩きなされたのであらう。

日本武尊がお崩れあそばされた時白鳥になつて天高くお飛びなされたといふ傳說が殘つてゐるが、高千穂連峯中に白鳥山といふのがあり、山腹に白鳥神社がある。日本武尊の御靈が白鳥となり、ここの山におとまりになつたといふことを里の人は語つてゐる。西鄕先生が鹿兒島に歸山してをられたころ、先生はよく白鳥溫泉をたづねられたといふことである。

韓國と白鳥岳の間に蝦野原が横たはつてゐる。

そこの硫黃谷には硫黃が吹き出してゐる。恐ろしい勢で地の下から噴煙とともに硫黃が殺れ出

てゐる。

三十人ばかりの若者が硫黄を運んで馬の背に積んでゐる。

硫黄谷の一隅に賽の河原がある。

賽の河原から蝦野原を貫いて湯の川が流れてゐる。一面温泉の川である。

川の岸には秋草が咲いてゐる。わたくしたちは着物を脱いで温泉の川に飛び込んでしまつた。

岩に激し、瀧をなし、瀬をなして温泉が流れてゐる中に腹這ひになり、或ひは仰向けになつてわたくしたちは子供のやうにうたつたりした。

ほととぎすがさかんにわたくしたちの頭をかすめて啼いて行つた。

硫黄を運ぶ馬が蝦野原の草のなかにきよとんと立ちどまつては、湯の川の中のわたくしたちを珍らしげにながめてゐた。

俄かに雲がわき、空は眞つ暗になつた。

「驟雨です。」と案内の少年が叫んだ。

風は横なぐりに蝦野原を叩きづけた。

今まで見えてゐた韓國も大波も雲につつまれてしまつた。二三間先も見えないほどの雲である。

ぽつりぽつりと小石のやうな雨が落ちて來た。

馬は嘶きつつ雲のなかにかくれてしまつた。



わたくしたちは着物を着る暇もなく馬の嘶きをあてにして蝦野原をまつしぐらに走つた。

「どうせかうなりや、いくら走つても同じだよ。濡れるだけ濡れるさ……」誰かがさういつた。

雨は襟頸から背へ瀧のやうに流れて行つた。

草の中ではのんきさうに老鶯が啼きはじめた。

「雨が晴れた！」

野の涯を走る大軍のやうに眞つ黒な雨雲が蝦野原の西端に動いて行つた。

「虹だ！　虹だ！」誰かが頓狂な聲を出した。

日が晴れた。韓國の頂から蝦野原の草にかけて二重の虹が懸かつてゐるのであつた。

「何といふ壯大さであらう。」　わたくしはかつてそのやうなあざやかな神々しい虹を見たことがない。

虹！　虹！　神代さながらの虹！

わたくしたちは地平線上、草の原の馬を見出しては馬の跡を追うて行つた。

# 天城を越ゆ

修善寺の鐘楼では跣足のままの雛僧が一人默々として鐘を撞いてゐた。山門の前の石磴を下つて、橋の袂にかかつたころ、後からわたくしの名を呼ぶ男があつた。「昨日戸田の裏山で野猪を一頭撃ちましたよ。」と眼を細くして話しかけて來た男を見れば去年山で逢つた獵夫である。

「達磨山の炭燒爺さんは何うしてる？」わたくしは何よりも先づ山の老人のことをたづねた。

「達磨山のおん爺かね。丈夫でをりますよ。」

「逢うたら宜しういつておいてな。」わたくしは橋の上で獵夫とも別れた。二十年來世を捨てただ一人で伊豆の山に炭を燒いてゐる七十幾歳の老人のことが思ひ出さるるのであつた。雨の日には萬葉集を讀み、晴れては高山の木を伐り、炭を燒く世捨人の姿が、世捨人の心情が、いろいろに映つて來るのであつた。

一斗の米、一升の地酒代、それが炭燒老人の一ケ月の主なる生活費である。かれはそれだけの金を得るために一挺の鉈と鋸を抱へては柴山の木を伐り、炭を燒く。空が晴るれば達磨山の巔に立つて富士を眺め、歌を詠む。

かれは何處から來たのか、誰も知らない。かれの眞實の名さへ知つてゐるものはない。天城に白雲がかかる時わたくしは炭燒老人を懐ふ。かれは白雲のごとく生きつつ、白雲のごとく寂然として思惟しつつある。

*

北伊豆の谿々には椿が咲き、梅のさかりであつた。狩野川に沿うて梅を探りつつ車を驅る旅人は、なほここかしこに二年前の地震の慘害を物語つてゐる山崩れの跡を見出す。梶山の谿も崖も二年前のままに眞赤な山の膚を見せてゐた。生きながら土の下に埋められた人々の悲しい魂の上にめぐみあれ！

崖崩れの上に樹てられた塔婆の影が狩野川を越えてあはれにも旅人の心を打つ。

去年、梶山をたづねたをり、尋常六年の子供の教科書と手帳が籠に入れられたまま塔婆のあたりに捨てられてあつたのを見出したことがあつた。恐らくあの教科書の幼い主もあの赭土の下に冷たく眠つてゐることであらう。

赭土の崖をめぐつて草は枯れ果ててゐた。

青羽根を通り過ぎるころであつた。わたくしは天城の木を運んで來る若者を見た。數年前わたくしの家で働いてゐた紅顔の少年であつたかれは、すつかり見ちがへるほどの若者になつてゐた。會ふ者のよろこび、別るる者のかなしみ、刹那に二つの心を味ひつつわたくしたちは天城へと急いだ。

湯ヶ島あたりでは梅はまだ早いやうに思はれた。數年前、神のお告げだといつて山を掘つてゐる人たちがあつた。黄金の棒が埋められてゐるといふお伽噺にでもありさうなことを信じ切つて、カンテラを提げては坑内深くはひつて行く人々を見たことがあつたが、それも天城の奥にふさはしい物語のやうに思はれた。

淨簾の瀧は冬枯れの山に一層南畫的な岩と水との幽寂さを示してゐた。

天城の谿々、羊腸の徑、すべて疎な雪に掩はれてゐた。蠹々たる杉の林。越ゆれども、廻れども、走れども、下れども杉の林である。動き谿である。水は澄み、岩は痩せ、山はさらに靜かである。

わたくしは冬の木を愛する。冬の山徑を愛する。冬の山は一切の色彩と、繊衣とをかなぐり捨てたる岩と梢と白風との素描である。そこには一莖の草もない、一輪の花もない。だがそこには山の骨があり、山の孤獨があり、山の靜觀がある。山寒くして直ちに行人の骨に迫り、行人の神を打つ。



天城を南方に下つて、湯ヶ野があり、梨本がある。梨本は幕末の偉人江川太郎左衛門が多年の苦心によりてはじめて反射爐を作るために耐火煉瓦の土を見出した山間の小邑である。

「大島が見ゆる！」突然叫んだものがある。靜かな海をへだてて蒼然として大島は漂うてゐる。白い煙が立ち登つてゐる。

道は下田の河津へ岐れる。河津には小學時代の友人が數人の子を連れて十年來閑居を樂しんでゐる。かれは子煩惱の男である。潮に沿うて青松の列樹が見える。恐らくかれが漫歩、懐古の靜天地であらう。友を思ひつつ蓮臺寺より下田へ下る。唐人お吉入水の地といふのを見、さらに下田を過ぎて柿崎玉泉寺に米國最初の領事館跡をたづねる。

お吉が駕籠に乘せられて日毎ハリスの館を訪うたと傳へられてゐる海岸はさほど長くはないが、砂の美しい松林である。玉泉寺の庭にはハリスが牛を屠殺したをり、牛を繋いだといふ佛手柑の朽ち果てた幹がそのままに遺されてゐる。ヒウスケンの情人おふくの父親が張つたといふ天井もそのままである。

ペルリの艦隊、アメリカ陸戰隊の威容。ハリスやヒウスケンと下田の女たちの情事。黒船渡來といふ劃期的な國際事件の出現！　濱を歩いてをればいろいろなことを懐ふ。

だがそこにはお吉の涙の跡さへない。アメリカまで續く下田港の水は春のやうに靜かである。日は暮れかかつて來た。

箱根路をわがこえくれば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ

薄暮なる實朝の歌のこころをしみじみと思ひ出でつつふたたび天城を越ゆ。



# 櫻島

磨き上げられた南國の涯の空。青い大空に懸かる秀麗な櫻島。乙女の胸を想はせる眞白な山肌。
柔かな山懷。裾は紫色の熔岩に燃えてゐる。
薔薇色の雲が悠然とわきにわき、消えに消ゆ。
山懷も渚の岩も一樣に尊いほどの薔薇の面紗につゝまれる。
白い雲がわき、眞白な山肌にかぐはしい影を投げる。
雲の影が音もなく山を撫でて走る。
白い雲も、雲の影も薔薇色にかげろひつつ青い南の涯の海に入る。
見よ、嶺には薔薇色の雲がわく。
時雨にもましてしづかな櫻島の雲！

# 雪の箱根を越えて

溪河の音に紛れてそれとは聽き分けがたいが夜半から雨になつたらしい。じつと耳を澄ましてゐると庇を打つ雨の音がわびしげに聞ゆる。

雨に降られて旅することは何となく氣も滅入るものである。夜明けまでには雨もあがるかも知れない。そんな空賴みに幾分の氣やすめを見出しつつふたたび眠りに落ちた。

起きて見るとやはり篠突く雨が降つてゐる。朝の薄暗い溫泉に浸りながら窓の外の冷たい雨の音を聽き十日あまりの旅を思ふ。

東京を立つ時は東京がなつかしく、旅に出れば旅がなつかしい。一層家もなく、一生旅を歩いてゐたらばなどと古人の心を想ふ。



天城も十國峠あたりも霧につつまれてしまつた。「晴れるかも知れない！」と山を眺めてゐる間に、雲が途切れ、日が照りはじめた。いよいよ東京に歸ることにしよう。急いで行李をととのへる。二三日前、修善寺の赤松山に登つて山小屋の爐の傍で「山家集」を讀みながら十國、箱根をながめたをり不圖西行の旅を思ひ、腰折を咏んだことがあつたが、机の上の硯引き寄せて走り書きしつつ宿を出た。

箱根路はくもりにけりな旅人のたもとぬらせと雪やふるらむ

晴れたと見えたのはほんの束の間であつた。狩野川に沿ひ、やがて大仁の町を通り抜けるころは空は荒模樣にさへなつて來た。

「しかし箱根にかかるころは晴れるかも知れない。」人間はいつも自分に都合のよいことのみを念ずるものである。三島神社の前を右に折れて間もなく、やがて道は爪先上りになり、舊箱根の路にかかる。この前箱根を越えたをりは山は靑く、あたりの農家の庭には眞つ紅な草芙蓉の花がさかりであり、麥笛を吹く山の少年たちをながめたこともあつた。笹原の中には鶯が鳴いてゐた。

けふはそれに引きかへて箱根にかかるころから雨は霙になつた。舊街道には去年の十一月の大暴風雨に打ち摧かれた並木の松がいたましいほどに根こそぎに倒されてゐる。三百年四百年の老

樹の見るもあはれなほどに道を塞いでゐる。

峠に近づくにつれて山はますます深い雪につつまれてしまつた。不關芭蕉の句を思ひ出す。

はこねこす人もあるらしけさの雪

修善寺の宿を立つて間もなく、わたしは雨の中を箱根に急ぐ自分の旅をあはれむやうな氣にもなつた。なほ一日、出立を延ばすやうにと引き留めてくれた人々の親切な言葉を思ひ出しもした。思ひ切つてこのまま尚一度伊豆の湯の町へ引きかへさうかとも思つた。

しかし、このまま雪に降られればとて、雪に濡るればとて、行くところまで行かねばならぬ。

わたしは芭蕉の「はこね越す」の句を記憶してから、雪の降るごとに幾度この句を思ひ出したか知れない。そして、そのたんびに箱根の雪を踏みつつ山を行く旅人を想像した。わたしは今、箱根の雪の路を降るわたし自身の姿を見た。「心からしなのの雪にふられけり」といふ一茶の句はわたしの愛誦する句である。わたしは今芭蕉の句を思ひつつ心から箱根の雪に降られつつ箱根を越えてゐる。旅のうれしさ、旅のあはれさはここに盡きる。

枯れ枯れの冬の山も見えない。見ゆるものは前程一二町の雪につつまれた山路のみである。雪の途斷ゆる時わづかに谿を見、草山を見る。溪も草山も心から箱根の雪に降られてゐる。

孤獨なる草山、孤獨なる柴山、孤獨なる雪の路！



北歐の厭人主義者ストリンドベルグを想ふ。死が近づいた時、かれは胸の上に銀の十字架と聖書を抱き、「わしの墓は山の上の木の下に樹ててくれ。」と言つた。

孤獨なる冬の山を見る時、わたくしはかれの臨終の言葉を思ふ。『死の舞踏』の主人公の孤獨なる眼が雪の山をさ迷ふ。

わたしは昨日雪の中で遭つた天城の炭燒老人のことを思ふ。かれも亦天城の奥深く心からけふの雪にふられつつあるであらう。

蘆の湖畔の旅館も物寳る家々も雪にとざされて、客引く男たちの騷々しさもない。關所趾のあたり、湖の面は吹雪に荒れて白い波頭が立つてゐる。鴨や鴛鴦の群が吹雪を避けては岸ちかく鳴いてゐる。

老杉の梢は飛び、路は暗いほどに雪雲につつまれてしまつた。多田滿仲の墓、曾我兄弟、虎の墓も笹原の中に雪ととるに埋もれかかつてゐる。

蘆の湯あたりにかかればいつも笹原を越えて伊豆の海を眺め、實朝の「箱根路をわがこえくれば」の和歌を聯想するが、けふは雪にとざされて沖の小島も見えない。

森々として雪は降る。雪は飛ぶ。雲の底にかすかに雪の溪を見出す。吹雪は木を搏つて冬の山をさらに深からしめる。

空山一鳥鳴かず、耳を傾けては吹雪の路を追ふ。

「今此別にのぞみて　ともに岸上に立ち、箱根山はるかに見やる。彼白雲のたはめる處こそ旅愁の嶮難さがしきちまたなるべけれ、君かならず首をめぐらして見よ。われ又此岸上に立んといひて袂をわかちぬ。」

元祿六年四月初、江戸深川の庵に僧專吟に餞したる芭蕉の辭である。古來幾多の旅人の袂を濡らしたであらう白雲はけふも亦谿により、嶺をつたうて漂ふ。「野に伏、雲に泊る」旅人の心は寂しくもまた尊い。



# 潮來紀行

六月二日。梅雨でも來さうな空であつた。水鄉を探るにはこの上もない日である。大岡山に熊谷さんを訪ねて、相伴うて兩國驛を發つたのは午前九時五分。時間を超越して行くがまま、達するがままの旅ながら、めぐまれた一日であつた。江戸川、中川の葦のかがやくにつけても、まだ見ぬ潮來の長葦青蘆の胸に通ふものありて、心は利根河畔に飛ぶ。

滑川驛に着いたのは午前十一時幾分。驛頭には高橋刀畔さんがわたくしたちを待つてをられる。熊谷さんとわたしは人力車をいただいて乘る。刀畔さんは自轉車である。滅びゆくものはすべてなつかしい。人力車に乘ることすらこのごろではめづらしいほどになつた。車を挽く男に不圖チエホフの『櫻の園』の老僕を思ひ出した。驛から刀畔さんの邸に至るあひだ美しい赤松の丘阜があり、丘の裾を縫うて澤があり、河骨の花が眠つてゐる。利根の長堤を右手に見て車は靜かに走

る。桑の實の熟れて黑いのも少年時の故郷の山を思はしめる。車上に眼をつむれば父あり、母あり、桑の實を食ふ數人の稚童あり。三十幾年の昔さながらに胸塞がるの思ひ。

松山を負ひて前庭に橘薰り、梨顆は露を帶びてゐる。苑を横切つて刀畔氏苦心の梅林を逍遙し、さらに苺園に佇む。苺は刀畔氏苦心になるもの。大雅堂、抱一、文晁等の名幅に對しつつ山を眺め、靑嵐を聽きて搖ぎ立ての苺に夏の甘味を盡す。洵に得難き夏日の快適である。

談はたまたま農村の疲弊、別して大地主階級の困憊に及ぶ。同町櫻井氏はかつて早稻田學苑に於いて知りし人であるが、去年は租稅を收めるために父祖の漢籍全部をトラックに積んで東京の書店に賣ぎわづかに五百金を得たといふことである。刀畔氏ならずとも涙なきを得ない物語である。『櫻の園』や『叔父ワニヤ』の歎きは現代の日本にも見出される。滅びゆくもの惡しきか、滅ぼさんとするもの正しきか。最も憂ふべきは滅ぼすべからざるものを滅ぼし、滅ぶべきものをなほ滅びざることである。時代の嵐は概ね盲目である。人は勢に乘ずる時正しからざるものをも正しと見る。かくのごとき認識の不足は最も呪はるべきである。國を憂ふる者の第一の仕事は眞に正しきものを正しと認むることである。

苦茗をすすりて、すすめらるるままに惡筆を揮ふ。

ものゝ名もあはれなりけりくさあやめ



わが夢と三尺へだつ野分かな

月、いでたり佛法僧の咄かな

後の二句は舊作である。

けさの天氣豫報にたがはず南方の山を越えて驟雨がやつて來た。松山をつつみ、早苗田を越えてやがて大利根に走る靜かな雨は時雨に似てわびしい。

*

刀畔さんの邸を辭して道に出れば利根をへだてて雨上りの空にぽつかりと筑波が描き出されてゐる。佐原に着いたのは四時過ぎであつた。モーター・ボートを賃して狹い小野川を下る。佐原の町は小野川を挾んでいかにも落ちついた感じを抱かせる。佐原の町は北國金石の港を聯想させる。かしこには錢屋五兵衞の物語がのこされてある。佐原の町にはかの伊能忠敬先生の邸がある。日本海に臨んだ金石の町、太平洋の潮にちかい佐原の町、靈犀相通ずるところあつてか時代の巨人を出す。殊に忠敬先生に至りては日本人の誇りたるのみならず世界的の驚異である。佐原はかつて忠敬先生一人を生み出したといふ一事だけですでに忘るべからざる町である。惜しいことに忠敬先生の遺跡を見る遑を持たなかつた。

狹い小野川の水門を通り拔くれば大利根の流れである。水また水である。水を抱いて碧蘆また翠葦である。

漾々たる水をつつみ空たゆたひ、雲は水に落ち、落ちてはさらに眞菰のほとりに漂ふ。水路幾度か岐れて雲に入り、葦に入り、蒼然として煙る。舟中隻語なく、江上一波なく、水いたづらに悠々の思ひを運ぶ。

二羽の水禽が眞菰の間から飛び立つた。葦を分けて舟をやる男がある。舟の上には水車があり、黄牛が載せられてある。

家も人も牛も遊ぶ稚童も水の上にある。葦の葉につつまれて二三尺の砂があり、そこには水郷に生き水郷に死んだ人たちの靜かな墓がある。

行々子が啼いてゐる。葦の葉とすれすれに水車を踏む若者の姿は直ちに萬頃の水に映り、半天に投影する。餘りに曠き葦である。餘りに遠き水である。餘りに小ひさき人間の影である。水は濁つて秋よりもわびしい。

兩岸相迫つて舟は十二橋にかかつた。モーターを止めて水棹をさす。わづかに舟を通すだけの廣さである。舟の中から相去り相來る十二の橋を仰ぐ、橋とはいふもののただ隣りから隣りへ通ふ程度のきはめて簡素な橋である。舟を通すために丸木の橋桁を高く取り、二三枚の橋板を並べ立てたほどのものである。しかも江上から眺むる時その素樸な、しかも不思議なほど均齊の取れた十二の橋は水郷の寂びとあはれとを一つにこめてゐる。橋の袂には水を掬む女たちが舟中の旅人をめづらしげに眺めてゐることもある。無花果の葉蔭には牛が眠つてゐる。舟の中から手をの



ばせば枝もたわわな無花果の顆に屆く。汀の菖蒲も何となく餘所の旅にも增して心惹かるる。十二橋下に漂ふ旅人の夢を拾ひつつ舟はかすかな水棹の音を立てて上る。

十二橋を通り過ぎて船はふたたび廣い水にかかる。熊谷さんが佐原でもとめて來られた煎餅と柏餅を岸の草の上に遊んでゐる子供たちに投げる。子供たちも笑ひ、舟中の人々も笑ふ。朗かな子供等の笑ひではある。

潮來の町は水を控へてわたくしたちの船の行手に横たはつてゐる。宿の客引きらしい男たちが水をへだててしきりに赤い旗を振つてゐる。その邊には眞菰の間に點々として菖蒲が咲き初めてゐる。

潮來を右にながめつつわたくしたちの舟は牛堀の方へ急ぐ。早苗を積んだ舟、水車を積んだ舟、野良かへりの若者たちを乘せた舟は歌もなく、音もなく夕暮の水を急ぐ。

舟の上に嬰兒を抱く女、水の面をかすめて飛ぶ水禽、長堤に牛を曳く男、すべて、ミレエの繪を想はせる。

葦を積んだ舟はやがて葦の入江を分けて葦の間にかくれてしまふ。

蕩漾として霞ヶ浦の水は暮れはじめた。

飛魚の音、鵠鳥の鳴く音湖心にわき、湖心に消えて死よりも靜かに日は暮れてゆく。

仰げども筑波は見えず、秋にも似たる雲のみ水を覆うてやがて空の果つるところ水鳥の青蘆に

つらなる。

舟はやがて利根の水門を目がけて走りに走る。

夢なるか葦、夢なるか水。見れども盡きず、思へども涯なく、走れども葦、走れども水。日は水の上に暮れた。葦の間の燈。そこに人あらん、家あらん、妻子あらん。舟をやりて水車を踏み、舟をやりて田を植うる人々の生活の悲しさ、尊さ。



# 小夜の中山

箱根を越ゆるころ山の村々では祭の花笠を冠つた人たちに逢つた。木立の奥からは笛の音が響いて來た。晴れ着の子供たちは稲田の間を嬉しげに飛んで行つた。乙女峠も富士も雲に隱れてゐた。

東海道島田に着いたのは日も暮れ方であつた。舊暦の盂蘭盆である。昔ながらの島田の町では子供たちは軒ごとに迎火を焚いてゐる。東海道の細長い島田の町を家々の迎火にはさまれながら雨催ひの夕暮れを歩いてゆくのも旅らしい心を見出す。舊知の誰れ彼れに迎へられて魚種といふ旅館の奥の離れに案内されたころはすでに雨が降り出して來た。まだ何處かに昔の東海道の宿の名殘がのこつてゐる。雨に濡れた長い甍の上を奥へ奥へと歩いて、さらに大井川から引いた流れをわたつて最後に茶室めいた離れがある。柘榴の枝が小暗く簷を掩うてゐる。

夜つぴて大雨である。昔ならば明日も川止めであらう。徹宵雨を聴きつつ思ふこと多き旅ではある。すでに島田の町を訪るることも幾度であらう。思ひ出多き町に來て雨を聴く。旅なればこそである。

島田町の友人と小夜の中山行きを約束したのは數年前のことであつた。今度こそ約を果すべく島田に來たのであつた。

島田の町を大井川の岸に出て朝顔の碑を見た。そこの松原は恐らく大井川沿岸のうち最もすぐれた松並木であらう。このごろ島田の町の友人たちの手で芭蕉の「五月雨の雲吹き落せ大井川」と「馬方は知らじ時雨の大井川」の句碑が二つ松原の間に建てられたのを見た。

島田から遠州金谷へ架けられた大井川の鐵橋を渡る。雨あがりの大井川の水は濁つてゐる。いかる千鳥が白い翅をひろげては水をかすめて飛んでゐる。

大井川を島田から五里さかのぼつたところに家山といふ山中の町がある。そこには野守の池といふ山の湖がある。京から來た高僧を慕うて都の女野守は池に身を投げて死んだといふ悲しい傳說がのこされてゐる。野守の池を訪ねたり、青い湖の上をいかる千鳥が鳴きつつ飛んでゐたことなどを思ひ出しながら、長い鐵橋をわたつて行つた。

金谷の町の北方城山に沿うて新道が切り開かれてゐる。昔の俤を追ふすべもなきほどに山も開拓されてゐるが、峠の松林の間から谿に沿うて菊川の里を見出した刹那はさすがに幾百年の昔に



自分を置いたやうなわびしさをも感じる。

青い山と山の懷に抱かれ、山の裾に小ぢんまりとした部落を形作つてゐるのが菊川の里である。點々として算へ盡すほどの家數である。家はみなきちんと整うてゐる。大和あたりの山沿ひの家を聯想させるほどの形もよく、落ちつきもある。思ひなしか夕暮れの色、裏山の感じ、訴へて來るものが秋そのもののごとく寂しい。

山と山との間の小川、それが菊川である。菊の模樣ある小石が今もなほをりをりは川の底から見出されるさうで、菊川といふ名はそれに因んだものだといふことである。菊川は太平記の宗行卿東下りを讀んだ人々の忘れることのできぬ名である。即ち

「書餉參らするとて奥を庭前に昇留む　轅を叩きて警護の武士を近づけ宿の名を問給ふに、菊川と申也と答へければ」

云々とあり、東鑑には承久三年七月十日の條に

「宿二遠江國菊川驛一、終夜不レ能レ眠、獨向二閑窓一讀二法華經一。」

云々とあり。中納言宗行が寢もやらず讀經したであらう家は何處のあたりであつたか。草深く、道絶え絶えに旅人の心を擊つ。宿二西岸一而失レ命といふ文字によりてかれが泊つた家は西の山に沿うた家であつたにちがひない。

ちやうどわたくしが立つてゐる山と向ひ合つて菊川西岸の青い山がつらなつてゐる。人の影一

つ見えぬ夕暮れの山村である。宗行卿の塚として傳へられた五輪の塔があつたのを法恩寺の住僧が取つて寺中に移したために發狂して死んだといふ物語がある。草の中に古き悲しき物語をとどめて山の裾の菊川は暮れてゆく。

峠を下りて谿に沿ひ菊川の岸に出た。新たに道を開くために働いてゐる工夫たちが菊川の岸に小屋を組んで夕餉の火を焚いてゐたりした。

狹い、美しい川床を見せて流れてゐる菊川を渡つて道はふたたび坂にかかる。二三の農家を除いては家らしいものも見えない。

雨上りの赭土道を幾曲りして登る。小夜の中山である。昔は老松の蔭ふかく旅人の心を慰めたあたりも今は道荒れ、山も荒れてゐる。少かの金に替へて名所の松並木を切る地方の小役人たちは腹立たしき俗人である。道の傍に二三畝ばかりの山の茶畑に働いてゐる男を見た。

峠をやや下つたあたりに昔めいた家が一軒見出される。家から少しはなれたところに形のいい二抱へもありさうな丸い石がころがつてゐる。無造作にころがつてゐる。夜鳴き石である。表には南無阿彌陀佛と刻んであるが、文字ははつきり讀めぬ。しかしなかなかよい字であるやうに思はれる。

そこの一軒家では夜鳴き石の水飴を賣つてゐる。

竹の皮に包んだいかにも古風なものである。その包みの形がなかなか面白いので東京へのみや



げにと思つてもとめる。

かつて幾千も越え西行も越えたであらう道のあたりに佇んで見ても、山は淺く水は淵れ淵れに昔を想起すべきすべもない。

打ち起されたる赭土、切りくづされたる谿、伐り倒されたる老松の根、かへつて旅人の涙を誘ふ。

だが靜かな山ではある。霧がかすかに谿をこめて行人の影もなく、ありとも見えぬ里のあたりから鐘の音が響いて來る。

初秋の山幾つ越えて來る鐘の音であらう。秋の風よりもかすかな聲である。秋の山を一人行く西行が遺音とも聞き、誦經する宗行の吐息とも聽く。

「命なりけり小夜の中山」をくりかへすともなくくりかへしつつ野菊の小徑をたどる。

菊川のほとり木樣の花を見出しては「殘夢月遠し」の句を思ふ。

馬も見ず、況んや旅人の姿一つ見ぬ小夜の中山、菊川のほとりは一樣に霧の中に暮れて行く。

小夜の中山の裾をめぐりて草の中に燈を見るに至つて初秋の旅のあはれさを盡くす。

「月が！」と友はいふ。たしかに月である。五日ごろの月である。

小夜の中山は霧につつまれてしまつた。

淡月に對して靜かに古人の山を拜す。

# 旅

柿右衛門の家を出る時わたくしは庭に青い柿の實が幾顆となくたわゝに果つてゐるのを見た。初代柿右衛門がいつもその柿の下に立つて赤繪の工夫を凝らしたと傳へられてゐる老木である。

道は二十戸ばかりの谿間の軒並に沿うて下る。陶土を搗く水車の音が小川の畔にものうげに聞える。去年柿右衛門の家を訪ねたのは丁度七夕のころであつた。村の子供たちが露を帶びた笹竹を擔いで山を下つてゐた。今日はもう七夕の笹も枯れてしまつてゐた。

立秋は過ぎてゐたが、まださすがに日中、草いきれの道をたどるのは苦しかつた。わたくしは草の路を歩みながら、數年前初めて柿右衛門を訪ねた秋、庭の柿の實を貰つて東京の郊外の家に持つて行つて、種子を播いたことを思ひ出した。

翌年の春になつて四株の柿の芽が出た。まだ春は淺かつた。そこにはよく小鳥が來ては鳴いてゐた。わたくしは杭を樹て、籬を結んで柿の芽を、人の足に踏まれないやうにして育て上げた。根にまつはる草を刈り、落葉した後には肥料をやりして三年の秋になつた。後にこゝに住む人の子供たちが、せめて名工の俤を偲ぶためにもと思ひながら、柿の木の大きく伸びてゆくのを樂しみに待つてゐた。

去年の夏鹿兒島、霧島の旅を終へて東京に歸つた時は柿はすでに一尺五六寸にも伸びてゐた。そして東京の郊外の家に歸つて半月經つか經たぬうちにあの恐ろしい地震のために、わたくしは妻と二人でその小ひさな柿の木の傍にテントを張つて、幾夜かをしのがなければならなかつた。九月三日の夜は恐ろしい雨であつた。嵐であつた。四日、五日、六日と夜も晝も生死の間にさ迷ふ心地で過した。

七日であつたらうか、八日であつたらうか。わたくしたちが家を追はれたのは。わたくしたちはあの恐ろしい、殺伐な不安な東京の眞ん中へ新に家を探して歩かなければならなくなつた。雨が降つてゐた。簞笥も、本も、行李も雨ざらしになつてゐた。わたくしは石油を注いで燒き捨てた方がどんなにせい〳〵するか知れないとすら思つた。

わたくしは風呂敷のなかに梨を五つと玉葱を少しばかり持つてゐた。妻は六本の蠟燭とマッチと角砂糖を少しばかり抱へてゐた。わたくしはシャツ一枚にズボンで、長靴を穿いてゐた。水筒を肩から懸けてゐた。

草の上には家を焼かれた人々が寢ころんでゐた。

大塚の終點で牛どんを喰べるために小一時間も待つたが、間に合はなかつたので、空腹を抱へて戒嚴令の町を歩いて行つた。どこにもわたくしたちと同じやうに家のない人々が疲れ切つた眼をしばたゝきながらうづくまつて居た。

わたくしたちを追ひ出した人々のあさましい心を憤るよりも、むしろ草の上、地の上、石の上に眠つてゐる人々に對する同苦相憐の涙が肚腑を突いて來る。住むべき家を追はれ、風呂敷包み一つを抱へて、當もなく夜の道をさ迷ふ自分自身を顧みて、わたくしはむしろありがたい心を經驗することができた。住むべき家を持たぬ人々と共に夜の町をさ迷はなければならぬといふことは、涙ぐましい氣安さを感じさせた。

わたくしは草の路を歩きながら去年のその夜のことを思ひ、郊外に遺して來た柿右衛門の柿の木のことを思ひ出した。家を追はるゝことは詮ないことであつた。しかし柿右衛門の柿を遺して去ることは殘り惜しかつた。秋になつたら樂しまうと思つて柿の周圍に播いて置いた向日葵や、百日草や、夕顏も踏みにじられてしまつた。

わたくしは一年經つた今日なほ草いきれする田の中の道を歩きながら憤りを感じてゐる。悲しみを抱いてゐる。

わたくしはあの刹那の何物をも持たぬ者の心の悅びをこの上もなく尊く思つた。しかも一年後



の今日、わたくしは柿右衛門の青磁の香爐を抱へながら停車場へ急いでゐるわたくし自身を見た。

水鷄笛を欲しがつた芭蕉の小ひさな欲念の尊さを思ふ。

柿右衛門の家を辭して停車場に着いてから長崎行きの汽車が來るまでには二時間餘の間があつた。川を隔てた名もない岩山に登つて暇をつぶすことにした。深い谿に沿うて家のあるところ必ず白い陶土が積まれ、窯の煙が立つてゐる。大河内、三河内、有田、南川原、幾十の谿の間悉く、柔かな松の山を負うた陶工の家のみである。わたくしは不圖有田の町を抱く山と山との間を通じて北に十里餘を隔てた故郷の山を見出した。嶺は夕暮れの雲につゝまれてゐた。あすこには亡母の田舍があつた。白い菱の花が咲いてゐた。よく酒を飲む人のいゝ若い巡査がゐた。かれは酒を斷つて熱心な傳道師になつた。逢ひたいと思ふ親切な老婆がゐた、不運な女であつたが。雨の降る日など柘榴の花の下の窓からぼんやり城下の方を眺めてゐる女だつたが。橋の上でよくわたくしを待つてゐた氣のやさしい與一もゐた。與一は人を斬つて監獄で死んだ。與一とわたくしはかいつぶりの鳴く沼で鮒を釣つた。

日が暮れてから長崎行きの汽車に乘つた。稻田を吹く夕風は肌寒いほどに思はれた。

東の空が遠い町の火事のやうに明るくなつて來た。黝い山の影がくつきりと明暗の輪廓を初秋の空に描き出した。

砂丘を瞰想させるほどの低い山の上に十五夜の月が出た。まつたく月に比べて山はあまりに低かつた。家の村よりわづか數尺のみ高いやうに思はれた。途り火を焚く家といふ家には幾十となく盆提灯が點された。山のあるところ、谿のあるところ、家のあるところ、滿月の光りを浴びた盆提灯が丘から丘へとつゞく。大村灣に沿うて二十里の間、滿月下の盆提灯に飾られた山と水の眺めを滿喫しつゝ旅人は初秋の風を浴びて長崎に入る。

あの山この浦すべて人は死に、人は生き、人は忌ひつゝ旅をめぐる。月の下に白い雲が山をつゝんでゐる。秋の色はすでに水にも空にも調うてゐる。旅人の心は沈む。

七月に東京を立つたが、玉蜀黍の葉のうら枯れたのを旅で見るやうになつた。

今年は七月に讃岐、伊豫をめぐつたが、そのころから旱魃の聲を聽いた。一本の桔梗の綱に家中の男も女もかゝつて、割れた稻田に水を注ぐのを讃岐富士のあたり到るところで見た。京都に歸り、大和に入つても山の上の雨乞ひの炎を見た。中國では一人の赤ん坊だけを家に殘してほとんど夜つぴての水掬みに疲れ果てた若い男たちが、草の上にいぎたなく眠つてゐた。雨乞ひの火が幾夜つぴての水掬みに疲れ果てた若い男たちが、草の上にいぎたなく眠つてゐた。雨乞ひの火が幾百町歩の山を燒いたといふ話も聞いた。岡山附近では川に沿うた一村が燃えつゝあるのを見た。川には一滴の水もなかつた。人々は磧の砂を叩きつけて火を消してゐた。またある山沿ひの村では



は土瓶の水を一株々々の稻に注いでゐるのを見た。

伊賀上野に芭蕉の故鄕塚を訪ねるために京都を立つた日は朝から秋らしい雨が霏々として、京の町のアカシヤの並樹にそゝいでゐた。八十日振りの雨だと叫ぶ人々の聲は更生の喜びの言葉であつた。

愛宕、比叡を徂徠する白い雲のさらに密ならんことを祈りながら奈良ゆきの汽車に乘つた。燒けた田の中に僅かにたゝへられた雨を見るだけでも嬉しかつた。百日紅が雨に打たれ、美しい木津川の磧が靜かな雨に濡れつゝあるのを見たゞけでも救はれたやうな氣がした。四國や中國で見た野良の人々の喜びに滿ちた顏を想像する時、八十日振りの慈雨を見出しえたことは、他人ごとならぬ喜びであつた。雨に摧かれたる木を見ても頽れた土堤を見ても「もつと降れ、もつと降れ！地が壞れるほど降れ！」わたくしはかう思つた。

自然の偉大な力の前に跪いた刹那に人間は始めて自分等の力の小ひさいことを知ると共に、隣人を相思ふ美しい心を見出す。去年の震災三四日の間にわたくしたちはそれを經驗した。今年またわたくしは稀有な旱魃の田園においてそれを經驗した。一樣に大自然の前に苦しむ時ほど深くお互同士の心が淨められることはない。

自然の力を忘るゝ時、自然の深さを忘るゝ時、わたくしたちの都市生活も田園生活も利己と排撥の息づまりさうな空氣につゝまれてしまふ。人間の生活から潤ひが失はれてしまふ。

自然を思ふことを忘るゝ時、自然の恐ろしさ、自然の深さ、自然の無限を忘るゝ時、わたくしたちの生活は膚淺なものとなり、わたくしたちの藝術は汚される。自然を忘れたる時人は俗人となる。エゴイストとなる。旅人は風の聲を聞くがゆゑに救はれる。芭蕉もさうであつた。西行もさうであつた。

京都、四國、九州の旅から一ヶ月目にわたくしはふたゝび駿河灣の漁村に歸つて來た。さくさくと黍を刈る鎌の音が晝寢の耳に秋風のやうに響く。濱では二三日來近年にない鰯の大漁だといつて夜を徹して松明を點し、男も女も砂の上を駈けまはつてゐる。一里二里の波の上を海鳥の群が靜かに輪を描きながら飛んでゐる。聲は千鳥のやうにあはれである。濱には大漁の印に赤い幟が立てられる。地曳網を引く聲が朝まだ薄暗いころから海鳥の聲のやうに寂しく山に響いて來る。刈り殘された玉蜀黍や砂糖黍の葉搖れの音がかさ〳〵と秋の日を急ぐやうに裏山へ消える。

旅の疲れにうと〳〵と眠りながら松山の瑠璃鳥の聲を聽き、籐の下のこほろぎの聲を聽く。東京にも歸りたくない。こゝの濱にもいつまでゐようとも思はぬ。旅にも疲れた。

七月から來て今日幾十日目にかはじめて水を隔てゝ伊豆半島を見る。夏の間は霧のせゐか山一つあるとも思はれなかつた海の上に戸田、土肥の濱が僅か二三里のへだたりを置いたくらゐに近く見える。天城にもすでに秋が來てゐる。夕方になれば天城の嶺に白い雲が下りる。虹が立つ。



夜、濱に出れば伊豆の海岸の町の燭が水を隔てゝ五つ六つ七つと見える。海を越えて伊豆の燭を算へながら眞暗な濱邊を歩いてゐると、妙な寂しい氣にもなる。銀河が中天から南の太平洋へ滑り落ちるやうに傾いてゐる。

人間の住むところ、何處にも劇的な氣の毒な記錄がある。

今夜は三保に二尺球の煙花を打ち揚げるといふことである。濱の人に誘はれたが、遠い松原を歩くのも億劫なので、家に寢ころんで山越しに煙花の音だけを聽く。

去年の秋清水のある老煙花師は火藥の爆發のため二人の子供を失つた。今年の春の煙花でかれはまた最後の一人の男の子を失つてしまつた。老煙花師は今たゞ一人でこの世に殘された。かれは何の樂しみもない世に一人殘るよりは煙花の犧牲になつて死ぬるが本望だといふので、今夜特に大仕掛の煙花を打ち揚げるといふことである。

九時十時になつても、波の音の間に、山を越して遠い煙花の音が夜の山に谺して聞えて來る。十一時になつても時折遠い煙花の音が聞える。老煙花師のいたましい心を思ひながら谺する煙花の音を聽く。幽谷の嵐の如き寂しさが湧く。

久能つゞきの裏の松山では梟が鳴いてゐる。

今朝濱には若い女の死體が流れついた。

午後老いさらばへた配達夫が濱から上つて來た。二三年前、澤に芋を洗ひに行つたかれの妻は誤つて溺れ死んだ。兩方の手に藻草を掴んだまゝ死んでゐたといふことである。老配達夫は、遺された五人の子供を抱へながら、清水から三里の道を毎日往復してゐるのである。かれの愚直さうな、泣くにも泣かれないといつた風な眼を見てゐると、大きな自然の前に、鐵の如く冷たい宿命の前に置かれた人間の小ひさゝと、あはれさを想はずにはをれない。

午後の一時ごろになると必ずかれのいたましい姿が、刈りのこされた黍畑の間に見える。青い大海を背景にして、かれは歩むともなく走るともなく草いきれの道を通つてゆく。聲をかけてやるとかれは泣くやうに笑ふ。腰には一足の穿き替への草鞋が結びつけられてゐる。子供のやうな海軍帽は却つて老配達夫の姿に傷々しさを增す。人間は生きてゐる間は働かねばならぬ。けれども働いても働いても心の寂しさと、窮乏の脅迫から逃れることのできない愚直なかれの運命はあまりに氣の毒である。「人は悲しむべく作られた」といふロバート・バアンズの歎きは、今日もなほ到る處の田園に見出される。

二人の濱の男が二尺足らずの小ひさな柩を引つ提げて來た。後からは濱で地曳網を引いてゐた男たちが八九人ぞろぞろと寺の門をくゞつて來た。

寺のおかみさんは庫裡の横に鰯を干してあつた二つの臺を持つて行つて小ひさな柩の臺にした。初めてわたくしたちがここに住むやうになつた時、水甕の臺にといつて、おかみさんが持つて來てくれた臺も、棺の臺であつたことを今日初めて知つた。今日もまだ水甕の臺はそのまゝになつてゐる。わたくしの窓の直ぐ下には古い塔婆が雨風にさらされたまゝ捨てられてある。水を運ぶバケツは閼伽桶である。

今日は久し振りで在家に法事があつたので住持は、苺畑の仕事を捨てゝ、法衣を氣呂敷に包んで自轉車で町まで下りて行つた。

町から歸つて來て汗を拭く暇もなしに、住持は袈裟を引つかけて小ひさな柩の前で短い經を讀んだ。人々は柩を犬麝の下に運んだ。二三人の男が鍬を持つて來て、淺い穴を掘つた。ほんたうに雜作もなく十分ばかりで墓穴を掘つた。恐らく少しひどい雨が砂を叩きつけたら、小ひさな柩はあらはに地の上に流れ出して來るにちがひない。住持が袈裟姿で犬麝の下に立つた時は、五六人の男たちが聲高く笑ひながら濱の方へ下りて行つた。

日が暮れた。伊豆の燭が波をへだてゝまたゝき初めた。薄暗い庫裡には住持が一人でちびりちびり酒を飲んでゐる。

住持は愛すべき禪僧である。わたくしはかつて住持が默坐してゐるのを見たこともない。須彌壇の前に讀經してゐるのを見たこともない。今朝は庫裡の繡眼兒籠の上に飛んで來た山の繡眼兒を追つかけてゐた。朝から苺畑の水を掬み、濱に出て砂を掻き、夕暮になれば野天の氣呂の火を焚

き、時としては清水まで自轉車を走らせて獨酌を樂んで歸る。かれは濱の人と少しもちがはぬ生活をしてゐる。けれども好々爺然たるかれの風貌のうちには愛すべき飄逸さがある。苺畑の中に働かせて置いても、濱に坐らせて置いてもかれは百年前の禪門の徒である。今の世の理窟のみを並べる坊さまではない。

「枕經を讀むごとに、新佛の顏を見なければなりませぬが、何十年見てゐても死人の顏はいゝものぢやありませぬ。笑つたやうな顏をして死んでゐる佛もありますが、中にはすねぶん恐ろしい顏をしてゐる佛もあります。氣味の惡いものですなあハッハッハッ……」緣に腰を卸しては星を見ながら住持はこんな話をする。

庫裡で唄をうたふ聲が聞える。濱の聲自慢の男である。醉へばうたふ。醉へば夜が更けるまで村中の家々を訪ねて自慢の唄をうたふ。日露戰爭の話をする。自分で自分の唄が面白くて眠れないのである。「日本にこのくらゐいゝ土地はない！」かれは二言目にはかく言ふ。そして酒を飲んでは唄をうたふ。

「おつさん、今日は彼ひが二つあつた。酒を一升おごれ。」聲自慢の男は住持と向かひ合つて、卓を圍んで夜が更けるまで飲んではうたふ。

犬鶏の幹が、夜の目にもほの白く浮いて見える。



とにかくもあなた委せの年の暮
此の次は我身の上か鳴く烏
小貫いふ相手もあらば今日の月
五十年踊る夜もなく過ぎにけり
露の世は露の世ながらさりながら　（一茶）

東京を立つ時わたくしは芭蕉と一茶の句集を持つて來た。二人の句を讀んでゐると、やはりほんたうな句が生まれるのは四十五十だといふ感じがする。ほんたうな藝術が生まれるのはそのころだと思ふ。不惑といふが實は眞個の惑ひはそのころから愈々深さに徹してゆくのであらう。四十年五十年の人生の苦惱疑惑がその波紋を狹くし、小ひさくし、淵を深くし、死生の境に人生を凝視するに至つてはじめて枯淡な藝術が生まれるにちがひない。街はず、あせらざる人間の眞實な詩めの聲が生まれて來るにちがひない。秋の風が草山を吹く如き自然な藝術、水の如く雲の如く自然な藝術は、一つの宗教的な悟りの後に樂き上げられるにちがひない

從安永六年。出書里而漂泊三十六年也。日數一萬五千九百六十日。千辛萬苦。一日無心樂。
不知已而成白頭翁（一茶）

一日も心樂無かりし五十年の一茶の生活の收穫が、かれの晩年の俳諧であつた。

## 故郷やよるもさわるも茨の花

凡そ俳諧史上の人々のうち一茶ほど家庭的に不運な人は稀であらう。非道なるかれの弟、かれの繼母！　かれは妻に對しても不運であつた。生まれた子は後から後からと死んで行つた。恐らく一茶の不運は、ベートーヴェン以上であつたであらう。ミレエ以上であつたであらう。かれの一生は舊約の約百にも似た一生であつたであらう。

わたくしは今夜濱を傳うて一里西の山寺に病めるS氏を訪ねた。

昨日まで四人の幼い子供達が東京からS氏のところに來てゐたのが、暑中休暇もおしまひになつたので二人は東京に、二人は信濃へと歸つてしまつた。急に子供たちが立つてしまつた後の寂しさを思ひやりながら、わたくしは三年餘も病んで海濱から海濱へと歩いてゐるS氏を訪ねた。子供たちを停車場に送つて歸つて來たS氏の奥さんは眼を赤くしてゐた。近ごろになくS氏も床の上に起きたまゝ興奮して語つた。今の世に珍しいほどの心の美しいS氏の一家にもかの一茶にも似た悲しみがあつた。

夜が更けてしまつた。わたくしは濱づゝ暗を濱邊を歩いて歸つて來た。四人の子供たちを手離してしまつてぼんやり寢床の上に浪の音を聽いてゐるS氏や、眼を赤くしてゐたS氏の奥さんのことを考へながら。美しい夜空であつた。



人と人とが相交渉するところには必ず茨の花がある。どこにも一茶の歎きはある。

強くなれ強くなれ！　S氏も強くなれ！　S氏の奥さんも！

わたくしはわたくしの心に向つてかう叫んだ。

明日は二百十日である。海は荒模樣である。

S氏の病氣のこと、島田から訪ねて來てくれて夕方歸つて行つた友人のことなどを考へながらわたくしは時折立ちどまつては暗い海を見つめた。

# 流れを慕ひて

鹿兒島線人吉の停車場で下りて俥に揺られながら稻田の間を走る。山の町はもう秋ちかい感じである。古城の石垣には秋らしい風が吹いてゐる。

薩摩か日向境あたりであらう白い雲がわいてゐる。

さつき汽車の窓から眺めた球磨川の磧が眼の前に展けて來た。

俥は青田の中の林溫泉に停つてゐた。

鹿兒島の旅の疲れを一日二日やすめて行くつもりでわたくしたちはそこの溫泉場を選んだのであつた。

溫泉宿といつても普通の山の溫泉宿とはちがつてホテルといつた感じである。設備に念が入りすぎ手が屆きすぎ、整ひすぎた感じがしないでもないが、まことに氣持ちはいゝ。湯はまことに



豐富である。淸冽である。

落ちついて見るとます〳〵居心地もいゝ。宿の女中たちの氣立もやさしい。これならば三日でも四日でも逗留はできさうである。湯上りの浴衣姿を欄に凭せる。球磨の川原は庭先まで迫つてゐる。時折り船を曳き上ぐる男たちが草を踏み、背を蝦のやうに曲げて岸を川上の方へ歩いてゆく。片帆の船が美しい流れを靜かに滑つてゆく。

翠巒峭壁をつゝんで山霧が刻々に重なつてゆく。突然霧の間から馬上の若者があらはれる。馬には靑麻を積んでゐる。馬とともに若者は渡船に乘つて溫泉旅館の方へ川をわたつて來る。雪のやうな白鷺が船上の人や馬をかすめて川下の方へ飛ぶ。

平家の人々が落ちのびて、幾百年の間世間とまつたく交通を斷つてゐるといふ世界もこの川をさかのぼつたところにあるらしい。幾重の霧、雲をへだてた山の奥の奥なのであらう。

日の暮るゝころわたくしは川岸を歩いて見た。さつき若者が川を越えて運んでゐた靑麻を煮る釜の下には焚火がちろ〳〵と薄暗を舐めてゐた。桑畑の中をふたゝび馬に乘つた若者が川原の方へ行つた。釜の火も若者もやがて川原の霧ふかくつゝまれてしまつた。

夜は川原の霧が晴れて星がまたゝきはじめた。鬱い山、寒い山ではある。わびしい山ではある。夜更けて星の高くまたゝくにつれて山も一層高く、山も一層寒い。

隣りの部屋では博多あたりの藝妓らしい女と客が、夕方宿に着いて一しきり騷いでゐたが、い

つの間にか眠つてしまつた。

川の瀬の音が耳につく。秋のやうな山風の音が。秋らしい夜である。

夜が明ける。間もなく川向うの山では老鶯が鳴きはじめた。霧はふかく川原をこめてゐる。昨日の若者はすでに馬を曳いて渡し場に船を待つてゐた。

障子を明けると小雨のやうな山霧がしと〳〵と感じられる。いかにも打ち沈んだ朝の空氣である。

隣りの部屋では例の藝妓らしい女をとらへて男がしきりに話しかけてゐる。

「もうあたし、こり〳〵です。こんなさびしい山の中は。」

「靜かでよいぢやないか。もう一晩泊つて行かう。」

「あたしいやです。けふすぐ歸りますよ。」

若い女は駄々をこねた。

しきりに鶯が鳴いてゐた。

わたくしの頭にはシモンズの「秋の都」といふ短篇の中の女主人公のことが泛かんで來た。マルセイユのぎら〳〵と炒りつくやうな太陽の町を愛する女には、古代ローマ人の遺して行つた寂しい墓場を歩くといふことは死のやうに辛いことであつたにちがひない。

球磨川の上流の溫泉宿、そこも花やかな都會の女にとつては墓場のやうに思はれたでもあらう。



わたくしたちは朝餉をすますとすぐ球磨川を下ることにした。

「船の支度ができました」と若い女中が知らせて來た。白石まで約六里の急流を下るのである。

夏草の道を水際まで歩いて行つた。うしろからは女中たちがトランクなどを抱へて見送りに來てくれた。しつとりと重たげに露に濡れた柳の下蔭に小舟はもやはれてあつた。親と子の船頭がわたくしたちを待つてゐた。

岩燕が水を切つて飛んだ。

「では、御機嫌克う……」

女たちは船が早瀬を下つて見えなくなるまで川原の中に立つてゐた。振りかへつても振りかへつてる女中たちは岸に立つて手巾を振つてゐた。

船は文字通りに矢のごとく球磨の早瀬を下つた。舳に立つて水棹をあやつゝてゐる若者の全身、を雪のやうな飛沫がつゝむ。そのたんびにわたくしたちの袖までが快く濡れる。

旅といふほどのものではないが、武藏野を數里はなれたばかりの相模川上流の山の町を訪ねたのはこの月の十九日のことであつた。いつになく早起をして田端から山の手線を新宿に出て中央線に乘り替へる。石炭を焚く汽車に乘ればちよつと旅らしい氣になる。國立、日野あたりに出てはじめて六月の田園を見出す。雜草の中に草あやめが咲いてゐる。

八王子驛で東神奈川行の汽車を待ち合せる。汗染みた浴衣一枚の旅藝人らしい男、甲州あたりの山に働く樵夫でゞもあらうか、大鋸を持ち、十歳ばかりの子に鉈のやうな道具を紙袋に入れて擔がせてゐる。二十年も前の田舍の驛を思ひ出させる。

東神奈川行の汽車に乘つて多摩川の右岸を走る。田植あころである。程ヶ谷あたりに見る草葺の屋根の上のあやめが、この山間の村にも見出さるゝ。なつかしい光景である。柿の木立、牛小屋、草屋根の形、作庭の取り方、赭土の小徑、柴山、緩やかな勾配のうねり道、土の香、草のいろ、溪から丘、丘から溪の交錯すべてがわたくしの故郷に似てゐる。亡くなつた父も母もそこいらの青葉蔭に佇んでゐさうである。場所は武藏と相模の境にちかい。

武藏なる多摩の川原をあがゆけばふるさとに似し山を見るかな

悵然としてたゞ山を見る。

橋本といふ驛で下りる。自動車の人となつて堤々たる道を一直線に走る。麥秋。桑の葉は雨に濡れてゐる。

甲州あたりの山であらう。霧につゝまれて繪よりもかすかに、雲よりも高く行く手の空を塞いでゐる。一里ばかりも走つたところでいかにも落ちついたゆかしい山の町を見出す、町の中程で道が二つ三つに岐れてゐるあたりは昔の俤をとゞめてゐるらしい。川尻といふ町である。大きな



土塀や、黑い門や、白壁の倉などが柿若葉の小蔭にもの古りてゐる。道はいよ〳〵山路にかゝる。幾曲折して山道を上りに上り、走りに走る。先に桑畑の中で見た霧につゝまれた山の中腹を走るのであらう。忽然として相模川が山の裾深く喰ひ込んで流れてゐるのを見出す。幾度か山をめぐつて、さらに幾度か銀の帶のやうな相模川の流れを見出す。釣橋の下には鮎漁の船が泛かんでゐる。翠黛重疊、白雲山に迫りて、山懷三四の家を望むところまことに南畫式の別天地である。釣橋をわたりさらに道はけはしくなる。登りつくしたところに中野の町がある。金物屋があり、呉服屋があり、酒屋がある。馬の背を借る他には道もない甲州境の山の村々から買ひ出しに集まつて來るのであらう。こゝでも三十年前の故郷の山の町を見出した。

老鶯がしきりに鳴く

「一里か二里奥へ入れば歩くか馬に乘るかより他は方法はありません」といふ町の人々の物語りを聽きながら畑の隅の草莫莽を眺めてゐると、ふたゝび老鶯の聲を聽く。甲州路に備へて相州小田原の出城がこゝの町に來る途中の城山に置かれたらしい。城山は雨雲につゝまれてゐた。

山の町は旅人にとつてなつかしいものである。信濃の大町、大和の吉野川の上市、伊賀の上野の町、木曾の福島。山の町は何となしに打ち沈んだ氣がするが、それだけに情味がある。實意がある。

窓の外の高原には麥を刈る人々の鎌の音が絶えない。

今ちやうど相模川の鮎のさかりである。鹽焼、酢のものをはじめ香魚づくしの馳走である。山の町の人々のあたゝかい心からのもてなしに鶯を聽く。旅人は酒飲まぬにすでに酔ふ。

山雨到りては山をつゝみ、川を掩ふ。

雲途切れては老鶯を聽く。

日の暮るゝに及んではじめて老鶯の聲止む。

山の町を下る人々は申し合せたやうに籠に入れた鮎を抱へてゐる。

警察の前では若い美しいおかみさんが乘合自動車に乘つた。酒屋の前には赤く塗つたトタン板が下げてあつた。自動車はそこにも停つた。子供をつれたおかみさんが乘つた。自動車は釣橋の袂で停つた。酒屋のおかみさんと漁師が鮎のことで相談をする間自動車は待つてゐた。

橋本に着いた時自動車は客を待ち合せるために十五六分も停つた。運轉手は下りてキヤツチ・ボールをはじめた。その間客人たちは車のなかにゐてぼんやり眺めてゐた。

途中から中年の醫師が乘り、若い巡査と老婆が乘つた。つゞいて黒い背廣の服の男も。みんなが相識の間である。

「先生どちらにおいでゞした？」

「Kさんの家ですよ。」

「どなたがお悪いのです？」



「赤ちやんです。」

「どんな病氣？」

「乳兒脚氣です。」

「へえ、それは御心配でせうな。」

「まだ一ケ月經たぬ赤ちやんですからな。」

醫師と老婆が同時に溜息を吐く。

「どうしても子供を持てば二人や三人は佛さまに上げねばなりませんでなあ……」老婆は黒背廣の男に視線を向けた。

自動車は山の背から山の背を縫うて走る。松並木や、耕作地の間を走る。

「來年は伜が學校を出ます。頼みますよ、あなたの工場でも、お店の方でも結構です。汽鑵の石炭焚きでさへなければ紡績の方でも、何でもよいと本人はいふとります。」

「承知しました。」黒背廣はうなづく。

「あなたの家の猫はもう仔を產みましたか？」

「產みましたよ。」

「ぜひ一疋いたゞかしてください。よい猫ですから。」

「ところが戀敵の男猫に仔猫を食はれてしまひましたよ。」

「それは可哀相なことを。」

「猫といふやつは色戀の道にかけては殘酷ですからな。」

醫師も巡査も笑ひ出した。

わたくしは眠りかけてゐた。ふたゝび多摩の川原が草の涯に漂うてゐた。

愛すべき相模川上流の山の町よ。一日の旅よ。

＊

鹿兒島に行つて薩南めぐりをやつたのは去年の七月のなかばころであつた。その前の年の七月にも閉聞嶽まで行つて掛宿の溫泉に一日を過したことがあつたからわたくしにとつては二度目の旅である。薔薇色の雲につゝまれた櫻島を左手にながめつゝ鹿兒島灣の水に沿うて走ること十里。やがて道は山にかゝる。

池田湖の手前で自動車が急に停つた。大きな樟を伐り倒したのがちやうど狹い道を埋めてしまつたのである。倒れた木をさらに二つに切つて道を開かなければならぬ。樵夫は大きな樟を挽きはじめた。運轉手は巻莫を喫かしながらのんきな顏をして樟の二つに挽き切られるのを待つてゐる。

そのをりのことを思ひ出しながらわたくしはふたゝび薩南の山の背を越えてゐた。

日本の南端である。枕崎といふ漁村。漁村といふよりは立派な町である。



山から眺むれば浪とひた〳〵の枕崎である。測候所の青白の旗が水平線の上に投影して見える。

「あれが硫黄ケ島でせうか。鬼界島はこの見當でせう。」などゝ指さゝれるとさすがに遠い旅を來たことに氣づく。海のあはれ、旅のあはれこゝに盡く。

開聞嶽が突然浪の上に映る。ちやうど日を背負つてゐる關係から眞つ黑な山に見える。墨繪の富士である。開聞の裾を洗ふ浪が銀よりも白く、素絹よりも柔かに亂れ散る。日本の南の〳〵端の、海洋の中から兀として巨人のやうな開聞嶽が聳えてゐる。何の前觸れもなしに突つ立つてゐる。

振りかへり、振りかへり、自動車を走らせてゐる間に、小山を越え、小山を越えて坊ノ津に入る。

坊ノ津はまことに整つた港である。船人にとりて理想的な港であらう。南方は黃灣まで見通しの港である。その厚い、廣い太洋の荒波を鐵のやうな岩山で防いでゐる。岩山には一面みがきをかけたやうな赤松が繁つてゐる。港は小ぢんまりしてゐるが餘程深いらしい。日本の遣唐使を乘せた船はこゝを最後の船着場として萬里の海路に立つたのであつた。

今も眼をつむつてゐると紅欄をめぐらした唐風の船が錨をおろしてゐたり、唐風の衣冠を着けた遣唐使たちの甲板を歩くさまなどが想像される。こゝに配所の月をながめた近衛三藐院の手植の藤のみがのこつてゐる。七堂の伽藍見るすべもなく今は草のみ茂つてゐる。

坊ノ津からふたゝび山を越え、溪に沿うて走る間に吹上ケ濱にかゝる。海は煙つてゐる。十餘里の間白砂青松である。しかも人稀にしていたづらに波遠く、遊子の情切々たるものがある。

# 南朝の蹟

初めて湊川を訪ねたのは、隨分古いことで三十餘年前の昔になつた。

白い砂の土堤には松の並樹がつゞき、さして廣くもない流れではあつたが水は美しかつた。しかし二度目に訪ねたころはあたりには貸長屋のやうな物が立ち並んだりして、川の水も濁れ濁れに、旅人の心にも寂しい影を投げてしまつたことを今も記憶してゐる。

はじめて湊川の古戰場を弔うての歸りに、須磨から明石の方まで、栄隨麥圃の間の徑をあてもなく歩いて行つたことがあつた。今日歩いて見たら、恐らくあのころの影とても遺されてゐないであらうが、十六七歳の少年には、一草一石ことごとく胸を打つようがとも思はれた。

老松の下に、麥の畑の隅に平家の何某の塚があり、折からの春雨に濡れてゐるその前に佇立して、少年らしい感傷に浸されたことを今も覺えてゐる。



東海道線を京都驛から西の方へすこし走れば、淀川を挾んで天王山と男山が相對してゐる。天王山の麓に山崎がある。汽車の窓から眺めると、このあたりは美しい松山と、竹の林が連なつてゐる。天王山の山懷にいだかれて、古風な町や村が千年の昔のおもかげを今もとゞめてゐるかに見ゆる。秋は山茶花や眞つ紅な柿の實に旅人の眼をよろこばしてくれる。

楠公父子訣別で有名な櫻井驛といふのは、山崎の町の西南で線路の直ぐ傍にある。數年前の初夏、そのあたりを通り過ぎて大阪へ行く途中で、行けども行けども眞白な罌粟の花が、たそがれの薄暗の底に、夢のやうにはろばろと咲いてゐるのを見たことがあつた。何といふ村であつたらう？

大阪から橋本に出て高野山に登つたをりのことであつた。長野町か三日市あたりで乘り合せた客は、昨日觀心寺に通ふバスの事故があつて、幾人かの怪我人ができたなどと語つてゐた。

秋のさなかで、熟れた稻田のかなたに金剛山を眺むる村々には、赤い柿の實が美しい寶石のやうに枝もたわゝに垂れ下つてゐるのを見た。國亡びて山河ありといふ古人の言葉を想ひ出すほど山は靜かに、稻田のほとりには野菊が咲きこぼれ、たまたま晩秋の陽を浴びて行く人の影も地に滅入りさうに思はれた。

千早の城のあたりを車窓にこゝかしこと探す。眼に映るものはたゞ悠然たる山上の白雲のみである。

奈良から木津まではこの頃ではバスも通つてゐる。初夏の奈良を訪ねる人々は汽車の線路からやゝ遠ざかつて、山地の古い村々を通り抜けてゆくバスの道をたどつて、木津の町に出るのも面白いであらう。

淋れかゝつた街地、寂に埋もれた堂宇などに昔の俤を偲ぶこともできる。

木津の町から木津川に沿うて伊賀の方へ歩一歩山地を縫うてゆく汽車の道は、さして世間的に名高くもないが、汽車の旅を楽しむ人々には、渓谷に沿うて築かれた山村の美しさを展開してくれるであらう。千曲川、犀川に沿ふ信濃の山村、大井川に沿ふ駿河、遠江の山村、木曾川のそれ……と谷に沿ふ村の美しさはあはれでもあるが、清澄徹心の境を感ぜしめるものである。木津川に沿ふ渓々の村は、むしろ幽玄的な落ちつきと親しみとを感じさせる。

一つの谿をめぐれば、さらに清冽なる流れに沿へる透明の大氣があり、翠壁の窓がある。そこにはやゝ念幻風の、たとへばゴチツク風の屋根を聯想せしむるが如き、大和あたりの古い建物がそのまゝにとりのこされてゐる。白い壁、端正なる均齊と調和を保てる山村の家々、めぐらすに柔かな俯竹の林、配するに後方の赤松山、前景の奇巖、清澗といふやうな、何處までも日本畫風な二三十戸の村々の風光が後からも後からと展開されて來る。笠置山の古城址はこれ等の木津の谷々の美しい幾つかの村々を經て、木津川をさかのぼつて行つたところにある。古木繁りて山徑白雲に潤れ、遥かに木津川の淙々たるを聴かば、自ら懐古の情に耐へざるものがあらう。



奈良を立つて三輪、畝傍などといふなつかしい名の村々をたどれば、身も心もそゞろに千年の昔に立ちかへる。畝傍、香具、耳成の三山は、蒼然として菜花の上にゆるやかなやさしい古代の姿を描いてゐる。飛鳥川のほとりに千古の夢の跡をたどれば、いひ知れぬあはれも湧くであらう。

やがて遠につゝまれた金剛山を右に見つゝ、高田、御所、壺坂と道をたどる間もなく、旅人は吉野川の清流を見出すであらう。

碧水を満へて流れは矢のごとく早い。河心を走る筏の上にも落花は晩春の山のおとづれを語つてゐる。

吉野川を渡る人々はやゝ川上に上市の町を見出すであらう。吉野川に臨み、青い山を背景に、立ち並ぶ白い壁の町、美しい石垣の上の町といつた感じの山の町である。吉野川をへだてゝ見る上市の町は、まことに磨き上げられた町の感じをあたへる。

吉野川の長橋を渡れば、そこはもうすでに吉野山である。馬の背越えともいふやうな形の一連の山の背を縫ふて、ゆるやかな山徑は奥へ奥へと走る。赭土道をたどりながら前程の山を仰げば、幾重の山を越えて切り拓かれたる麥畑の間を貫いて花の道が走り、花はやがて天上にちかく雲に入るといふ姿である。花につゝまれて古い村があり、花を出づればさらに麥畑がつゞき、麥畑の尽きるところ、さらに花あり、家ありといふ感じである。

吉野山は下、中、奥千本の花をはじめ、到るところ花の雪につゝまれた名所であるが、しかしわたくしの心を最も強く惹きつけたものは、さかりの花ではなくて、麥畑の片隅に二株三株散りはじめてゐるやうな老木の櫻であつた。そのやうな櫻を吉野の山遠く眺むるごとに、「歌書よりも軍書にかなし吉野山」の古句を想ひ出さざるを得なかつた。

詩人ウイリアム・ブレークは「もし人間なくんば自然は荒涼たるものならん」とうたつてゐるが、たしかにさうである。吉野山のつよく旅人の魂に訴へる所以は、吉野の花もさることながら、かつてそこに生き、かつてそこに動いてゐた人間の尊い心の姿である。就中、吉野朝廷の哀史を懷ふ時、迫れる山、煙れる山、ことごとく旅人の胸を打つ。

吉野宮はいふもかしこし。義臣村上義光の墓、藏王堂、或ひは大塔宮吉野落のみぎり樹下に離杯をあげさせ給ひしといひ傳ふる四本櫻、吉野朝五十七年の行在所の址、吉水神社と、すべて落花のころ、青葉のころ訪ふべき聖地である。

わたくしが行つたころは、如意輪堂のあたりは花のさかりであつたが、夜はまことに寒かつた。ちやうど滿月のころで、障子に映る月影は水よりも白く霜を含んで、夜つぴて眠れぬほどの寒さであつた。寒枯山深く月溪に冰るとでも形容したいほどの寒さであつた。

あまりに月光の美しさに、わたくしはたびたび眼をひらいては障子に投げられた月光を見た。山は靜かに水は調れて潺々の音もなく、たまたまばんどりといふ半鳥半獸のごときものが、朝より樹を傳うて飛びつゝ、すさまじい音をさせるのを聞いた。ばんどりの音絶ゆれば、後は月光裡に霜の聲を聽くほどの靜夜であつた。



翌朝は霜を踏んで落花を浴びつゝ後醍醐天皇の御陵の前にぬかづいた。山また山、雲また雲深く、御陵を拜し奉るといふ一事を思ふだに、吉野はまことに軍書に悲しき山である。

如意輪堂に詣して、さらに山徑を登るにつれて霜柱は推けてさくさくと音を立てゝゐた。やがて花矢倉といふ坂にかゝる。花矢倉は、佐藤忠信が判官の潛背長をたまはりて、防ぎ矢したところと傳へられてゐるが、この坂のすこし手前に、苔むしたる輪塔が二三基、道の傍に草に埋もれかゝつてゐた。南朝方の人々の塚である。花矢倉を通り過ぎれば、やがて小ひさな部落があり、水分神社がある。まことに古風な縛への社である。山はいよいよ深く、そこいらでは櫻はまだ當もかたく、梅のさかりであつた。

やがて西行法師の庵へちかく、道は吉野の奥に入る。大峰山詣での行者たちの白衣が三抱へも四抱へもありさうな杉の木の間に隱見することもあつた。役の行者のお弟子を祀つたといふさゝやかな堂のあたりから、右に狹い道を二三丁もたどれば西行庵であり、とくとくの清水も苔むしてゐる。

大峰山に通ふ行者たちは、そこの堂の前を眞直ぐにいよいよ峻しい山路にかゝるのであるが、恐らく南朝の尊き御方々は幾度か穿きるならはせたまはぬ草鞋に、そのあたりの山徑をたどらせ

給うたこともあらせられたであらう。古野の奥は一鳥鳴かず、山さらに深く、さらに悲しき思ひを誘ふ。



# 山の旅

中央線の興瀬で鮎を釣る男が下車してからは車内は老人とわたくしとたゞ二人だけになつた。老人は氣輕な人でいろいろの事を話しかける。車内の寒暖計を見ては、「もう三十三度に昇りましたよ」などと教へてくれた。

笹子、小佛などとなつかしい聯想をよび起す地名が多い。山百合や桔梗が狹い谷を走る線路に沿うて咲いてゐる。猿橋、大月、笛吹川、釜無川などと甲斐の國には子供時代から聽いてゐた馴染のふかい名が多い。中でも天目山は名を聽くばかりにも武田家滅亡の哀史を想ひ出させる。

急峻な山を切り拓いて一面の葡萄畑が作られてゐる。南の方には富士を、西には駒ケ岳、仙丈ケ原、鳳凰山、北岳、農鳥岳、東から北へは、三頭山、雲取山、甲武信ケ岳、八ケ岳等といふ高山に取りかこまれた盆地が甲斐の國である。その盆地の中央を笛吹、釜無の二つの川が流れてや

がて甲府の南で合して富士川となつてゐる。すつと昔は甲斐一國が大きな湖であつたといふことである。

甲斐は大月から先はわたくしにははじめての旅だつたので、山も川も町もめづらしかつた。夏の山の青々とかゞやいてゐる上に眞つ黑な富士がいたゞきを見せてゐた。富士の雪はすつかり消えてしまつてゐた。

山から山へ、耕作地から耕作地へと葡萄畑がつゞいてゐた。葡萄畑や桑畑の中に黑い草葺の屋根が見出された。どこの家も同じやうな屋根の形で、屋根の勾配の急なのも、その形の整然としてゐるのも大和あたりの家を思ひ出させた。何の家も養蠶本位に建てられた家らしく、二階は廣い窓を切り、養蠶室になつてゐる。

雪袴を着けた人たちが默々として稻苗を植ゑてゐた。八ヶ嶽は赫黑い山肌を見せてゐたが、南アルプスのところどころにはまだ雪渓の雪が瀧のやうな形にとりのこされてゐた。

笛吹川に沿うて古風な旅館があり、旅館の後の山には古い山寺があり、鐘樓もあつた。そのやうな風景も、旅に出づれば何となくなつかしかつた。

二十年前に亡くなつたわたくしの友人が、石和あたりの葡萄畑の下にしやがんで、故郷の父を懷うて泣いたといふことなどが心に泛かんで來るのであつた。

友人の父は四國のさる町に郡長をつとめてゐたのであつたが、その頃任地で病つてゐた。友人



の父は葡萄が好きであつたので、友人は甲州へ旅して葡萄畑の中に立つた時感慨無量であつたのであらう。

その友達も亡くなり、その話を一緒に聽いてゐたわたくしの妻も亡くなつた。そしてわたくしはたゞひとり甲斐の國を旅してゐる。ぎらぎらと太陽は釜無川の磧を照りつけてゐる。月見草の花も咲いてゐる。しかし旅人にとつては秋よりも寂しい。

諏訪湖の周圍にはあちこちの家に繭が建つてゐる。戰地に在る人々のために武運長久を祈る人たちの心からのものであらう。涙ぐましい思ひにさへなる。

松本に着いたが、まだ山に登る人々の姿も見かけない。土地の新聞には島々から上高地までの道はこなひだからの長雨のために崩れてゐるので、當分は交通も杜絶のまゝだといふことであつた。

だから有明廊に着いたをり、わたくしは迎へに來てくれた若者に先づ第一に「道は大丈夫ですか」とたづねた。燕への道は何處にも崖崩れ一つ起らなかつたといふことであつた。

有明廊を下りて七八丁目も歩いたところに道の傍に二十三夜の碑が見出される。かつて妻と二人で燕に登つたをりわたくしたちはその珍らしい碑の前に立ちどまつたことを記憶してゐる。無論そのころは中房までずつと歩かねばならなかつたので、女にとつては五里の山徑は一日仕事で

あつた。

わたくしたちは大町で購めて來た松茸を燒いて松山の中で晝飯を喫べた。そこの松山は大分切り拓かれてゐるがまだそのころの面影を殘してゐる。

今は信濃坂まで自動車が通ふことになつてゐるので、わたくしは案内役の男と一緒に自動車に乘ることにした。かつて妻と二人で歩いた道を歩くには忍びなかつたので。

*

信濃坂で車を捨てゝ、そこからは一里足らずの坂道を歩かなければならなかつた。

「お客樣の足でしたら一時間半はかゝりませう」といふ茶店の主の言葉を後にして山徑を登つて行つた。雨あがりの道はよく滑つた。

「この谷に熊が出ましたよ」といふ男の聲を後に聞きながらわたくしはぐんぐん坂道をたどつて行つた。

そこの山徑の一草一木ことごとくかつて故人と二人で燕に登つた日のことを思ひ出させるものであつた。

わたくしは急ぎに急いだ。

いつも山に登るごとに親馬に伴いて歩く仔馬のやうにわたくしの後から歩いてゐた草鞋姿の故人が、今日も亦同じやうにわたくしの後から歩いてゐるやうな氣がしてならなかつた。わたくしは幾度か振りかへつて狹い山路を眺めた。



わたくしは美しい谷川の流れに來るごとに合掌したい心になつた。そこには黑い瞳をかがやかしつゝ、妻がアルミのコップになみなみと水を掬んでわたくしを顧みた記憶がきざみつけられてゐる。

そのアルミのコップにはかつて二人で登つた山の名がナイフで彫りつけられてあつた。

霧島、阿蘇、槇名、淺間、燕、槍、北叡、天城、十國峠などいろいろな山の名が。

*

中房溫泉に建てられた妻の句碑を一刻も早く見たいといふ一念の爲であらうか。一時間半はかゝるであらうといはれた山徑も四十分でたどりついた。

わたくしは宿に着いて、服を脫ぎ捨てる暇もなく庭に出た。そこには白樺の山を背景に夕霧につゝまれて、白布に掩はれた句碑が建てられてあつた。

岩を攀ぢて句碑の前に立てば、白い布を通して「星ばかり美しき夜となりにけり」の句がそれと讀まれる。

句碑をめぐつて絕えず鄰公が鳴いてゐた。河鹿も鳴いてゐた。

わたくしは日が暮れてからもなほ草の中に佇んで薄暗の中の句碑を眺めてゐた。

裏山の路を下つて燕から若い男たちが歸つて來た。雪崩に打たれた登山者の屍體發掘に行つて

ゐた男たちである。

「今日も發見されませんでした」と一人の男は力ない聲で言つた。

わたくしは山の湯に浸されながら溪川の河鹿の聲を聞いてゐた。

この前燕に登つた時は大晴の山案内を連れて來た。その山案内は夜つぴて溫泉にはいつて唄をうたつてゐた。のんきな男であつた。

明日は七夕祭である。偶然にも故人の星の句を刻んだ句碑が、七夕の日に除幕式を行はれることになるのも何かの因緣であらう。

山は夜に入つても雲ふかく、二十間ばかり離れたばかりの句碑の白い姿も見えなくなつてしまつた。

わたくしは明日の天氣を氣づかひながら、寢ることにした。十二時過ぎたころであつた。宿の主の百瀨さんの「星が出た、星が出た」といふ聲を聽いたので、思はず障子を明けて見た。

空には一面の星がきら〳〵いてゐた。

明日の句碑の除幕式のことを思ひ、かつて二人で同じそこの部屋に溪川の音を聽いたことなどを考へてゐる間に、胸に迫るものを感じないではゐれなかつた。

翌日の朝、除幕式がすんだころからぽつぽつ雨が降つて來た。



「この雨でも山をお下りになりますか」と、道を案じてくれる宿の入々の親切を感謝しながらも、わたくしは山を下ることにした。

雨に濡れて、そしてわたくしの心の底までも雨に濡らして山を下ることがせめて現在のわたくしの氣持には一番ふさはしいことのやうに思はれた。

だから、わたくしはどしや降りの雨の中を信濃坂の方へ下つて行つた。

有明から高瀨川を渡つて明科に出た。

去年の秋も老けて、信濃の山は時雨するころであつた。わたくしは信濃の旅に出た。高瀨川のほとりに佇んでは、暮れてゆく山々を眺めたことがあつた。

信濃なる高瀨の河の川やなぎ枯れて暮るるをひとりゐて見し

わたくしはその折、こんな歌をうたつた。今日も日は暮れかゝつてゐる。柳の下には見知らぬ人々がバスを待ち合はせてゐる。彼れ切つた人々の眼である。

明科と西條の間には數日前山崩れがあつたさうだが、汽車は昨日から通じたといふことであつた。

姥捨あたりから淺間を眺めようとしたが、雲がふかくて山は見えなかつた。たゞ千曲川だけが

人間の運命を語るかのやうなわびしさをたゝへて流れてゐた。

暮れ行く山の田には老人や若い女たちが田を植ゑてゐた。若い男たちの姿の見えないのがさびしかつた。

狭い、そしていろいろの不規則な形になつてゐる山の田ではあるが、そこに植ゑ付けられてゐる苗を見ると、いかにも幾何學的に整然と植ゑられてゐる。

しみじみと信濃の山の人たちの勤勉さが感じられる。

わたくしは旅をするたびに田の植ゑ方を見る。整然と稻を植ゑ付けた土地の人々は必ずものごとに熱を持ち、勤勉である。

篠の井で汽車を乘り替へて軽井澤に行くことにした。かつて十年の間上田、小諸の線を夏ごとに、秋ごとに往復したことを思ひ出しつゝわたくしはたゞひとり窓に凭りかゝつてゐた。

小諸あたりで振りかへつた時、千曲川のかなたに遠く北アルプスの嶺を見出した。刹那に、浅間の麓は霧につゝまれてしまつた。

追分の驛では雨衿を穿いた二人の若者が背負籠を擔いで汽車を眺めてゐた。

わたくしは沓掛で汽車を下りて、深い霧の中を星野温泉へ歩いて行つた。

そこにはかつて八年の間妻と二人で住んでゐた草庵がわたくしを待つてゐるのであつた。

昔と同じやうに沓掛の町では牧場を下つて來た仔馬を見た。



かつて妻が愛られ行く仔馬のために玉蜀黍やにんじんを買つてやつたことなどを思ひ出した。

雨日も霧につゝまれて母子の馬が沓掛の町を追分の方へとぼ〳〵と歩いて行つた。

沓掛の驛路ちかし秋の雨

よそなかう秋かせ寒き手向かな

蝋りねて夜の雨きくや浅間山

寒さほど雨ふる秋のひと夜かな

あきかせもふるもとはやし浅間山

長き夜や浅間越ゆらん人の聲

初秋の風や浅間のうすけむり

から松のちるや秋立つ風の聲

夕きりの中なつかしや人の聲

暑き日や浅間小浅間打けむる

日暮れて草を歩めば、妻がうたつたこれ等の句が思ひ出されるのであつた。

# 仙石原

早川の美しい流れに沿ひ湯本、塔の澤、强羅と、渓をめぐり急峻をたどり、山谷のきはまるところ豁然として仙石原の大草原が視界に展げらるゝ。

北に金時山乙女峠を控へ、南に神山の雄々しき姿を望み、蘆の湖より落ちる流れを懷きて兩岸の草原は海よりも靑く、一條の徑は草に隱れ、草に奔り旅愁を誘ふ。歩めども歩めども草また草の光りが漂ふ。

耳を傾くれば草を刈る鎌の音わびしく、あはれなる小鳥も啼く。

淵尻に近づきて草上に富士の雪を仰ぎ、草下に蘆の湖の碧水を眺むるに至りて仙石原の風光はさらに美しき複雜さを加へる。

仙石原は亡友Tがかつて笛を失ひて歎きしところ。



今も月の寒きころ學生Tは笛をさがしつゝ仙石原の草の中を歩みつゝあらん。

# 草の花あり

東京を立つて十日。駿河灣の單調な波の音にも飽いた。人を避けて靜かに本を讀むつもりで旅に出たが、旅に出て見ると、いつでもさうであるが、落ちついて本を讀む氣にはなれぬ。何處にゐてゐる人の心を奪ふものはある。靜寂を求めて自然に還ればそこにもまた自然の誘惑がある。

波の荒いせゐか、漁村といふものがあまりたゝいためか、一眸の海に一隻の船すら見出されないことが多い。たまに汽船でも發見すれば、船の影が水平線の下に隱れてもまふまで海を見つめてゐる。海を掩ふ雲に變化あるごとに波の色が或ひは暗く、或ひは紺青に、或ひは淡紫色に、或ひは玻璃の如く白く變つて行く。そのやうな雲の變り、海の色の移りかはりまでもがわたくしの心を惹く。

或ひはならい或ひははへ或ひはたべし　半時と經たぬ間に風の方向が動く。波の音が移る、波の高さも變る。波の音が靜かになれば不圖裏の松山の四十雀の鳴く音が耳につく。濱ではもう百



舌が啼きはじめた。芒の穗が白い。瑠璃鳥は海の微風を浴びながら背戸の青い山で囀つてゐる。

寺の子供たちが濱の地曳に誘ふ。夜釣に誘ふ。人の善い住持が庫裡の方から德利を抱へて、夜遲くまで話し込みに來る。暗い海を渡る天の川を眺めつゝ語る。

旅は決して讀書をゆるさぬ。旅の自然、旅の微風、夜明けの空、朝の海、午睡、午後の海、小鳥の聲。夕燒、雲の色、波の音、星のさゝやき、すべてがわたくしの魂をひたすらに惹きつけてしまふ。

旅は怠惰なわたくしの心を一層怠け者にしてしまふ。わたくしは旅の怠惰を愛する。

七日住んだばかりでも幾人かの顧馴染の人はできる。背戸の畑で草を刈つてゐた女、濱で夜釣をしてゐた男、濱の駄菓子屋の老媼。

乘合自動車から振りかへる村の菅畑の石垣、寺の屋根、木槿の花。濱の松の並樹には四十雀が鳴いてゐた。そこの西から二本目の松の枝では、この冬一人の旅の若い男が首を縊つて死んでゐたといふ話を思ひ出した。

靜岡に着いて、午後の汽車まではまだ三時間近くの暇があつたので、淺間さまに出かけることにした。古城の濠には白い蓮が咲いてゐた。賤機山の嶺まで登つて見たが雲が深くて富士は見えなかつた。木の下に若い一人の男が下駄を脱ぎ、木に凭りかゝつたまゝ立ちつくしてゐた。着物は破れ、手足はひどく垢づいてゐた。恐らく氣が狂つたのであらう。その眼は寂しかつた。笑ふ

でもなく、もの言ふでもなく、何見るでもなく、恐らく考ふることもしないであらう。

わたくしの胸には二三年前駿河の海岸で逢つた一人の青年のことが思ひ泛かべられた。かれは熱心な哲學研究者であつた。かれの病身が反動的にかれの思想をさういふ方面に向けたのであつたか、かれは恐ろしく理智的であつた。冷たい理智の上にのみすべての問題を片付けようとしてゐた。大抵の病人は感情的になり易い筈であるが、かれは自分の冷たい運命を靜かに理智的に批判することを忘れなかつた。しかしどこまでもかれは病人であつた。かれは冷靜な理智によつて宿命を信ずるやうになつた。かれはよく宿命といふ言葉を使つてゐた。冷たい理智の上に築き上げられた宿命觀は十九世紀のロシヤのインテリゲンツイヤの哲學であつた。ツルゲネーフ然り、チエホフ然りであつた。

無智にして宿命の中に死ぬるものはむしろ幸福であるかも知れぬ。しかし一度考ふることを敎へられた近代人にとつては、それは永劫にゆるされざる禁斷の地である。考ふることを敎へられたる近代人は、考ふることなしには生きてをれぬ。しかも暗い鐵の鎖に縛められたる人間の宿命のみが、かれ等の思惟の對象となつて現はれて來る。考ふれど考ふれど、かれ等の思惟の世界に映づて來るものは人間の宿命のみである。刹那々々に斷たれゆく人間の生命である。刹那々々に蝕まれゆく人間の手であり、足であり、心臟である。

考ふるといふことは自らその醜き手を斷ち、自らその腸を斷ち、自らそのそれ自身の腦髓を



抉り、掴み、捨てることである。

思惟する人間にとつては、たゞ思惟することのみが生活であつて、すべてはたゞ宿命に支配せられてゐる。人間は思惟することのみは自由である。そしてたゞそれだけの自由が與へられてゐる。いかに思惟しても、一羽の雀をも地に落すことはゆるされてゐない。

思惟する以上は、自分が自分であることを意識する以上は、自分で自分の世界を作りたい。しかも人間には考ふることの他には何の力をも賦へられてはゐない。

## ともかくもあなたまかせの年の暮

俳人一茶にしてもこれほどの覺りを切り拓くまでには、四十餘年の苦しい生活の底をくゞつて來なければならなかつた。

まつしぐらに考ふることのみに生きてゆく唯一つの興味を感じてゐる若い人々にとつて、なかなかあなたまかせといふ諦めの心は生まれて來ない。また生まれて來ないのがいゝ。若い人の生きとりほど見苦しいものはない。思惟の線氣のつゞくかぎりは思惟した方がいゝ。苦しむだけは苦しんだ方がいゝ。悟りといふもつまりは諦められぬ諦めではないか。

悟りとは最深所の寂寞感ではないか。禪の悟りといふも、悟り無き悟りの寂寞ではないか。柳は綠花は紅といふも、限りある人間の思惟の力の破產の刹那の諦められぬ諦めではないか。